

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気がつけばいつもそこに君が

【Zコード】

Z4990A

【作者名】

やくも

【あらすじ】

新しい「家族」になつてもう十年。三人でいる風景は当たり前のものになつていた。今までもそしてこれからも、この当たり前がずっと続していくのだろうと、そう信じてた。だけど、それでも……。過去は消せない。罪は消せない。記憶は消せない。一体いつまで、そうやつて逃げ続けているつもりなんだ?自分の問いに、答えられない。目を逸らすな。答えはいつだって、すぐ近くにある。彼だって、彼女だって、結局同じなんだから。背負つものを見つけたら、きっと人は今よりも少しだけ強くなれるはずだから……。

First Day(1)・半自動食器乾燥機(前書き)

この物語は物語上の舞台の中ではわずか四日間と言つ短い期間の中で綴られているのです。

サブタイトルのFirst Dayといつのは、物語の中での一日目ということであり、小説そのものとしての一話目という意味です。それでは相変わらず拙い文章ではあります、最後までお付き合いいただければ幸いです。

ヒーローに憧れた時期がなかつたわけじゃない。
ただ、幼いながらにも心のどこかでは感じ取つていた。

ヒーローになんて、絶対になれっこない。

少なくとも、あの日までは……。

それは、悪魔だつた。

虚ろな視界の先、そこには確かに人ではない悪魔がいた。
振り下ろすその手が、耳障りな音を鳴らす。

「 ッ !

悲鳴。

涙に混じる声。

ただ、助けてと。

叶わない救いを求めて、叫んでた。

「起きろ！ 隼人！」

そんな怒鳴り声で、俺は夢の世界から現実へと引き戻された。
ぼんやりと目を開く。

霞んだ視界の先に、無機質な部屋の天井が見えた。
その、すぐ横に。

「やつと起きたか。このネボスケめ」

そう言つて呆れた顔を見せる、アイツがいた。

俺はゆっくりと布団の中から上半身を起こす。

寝起きでまともに働いてない頭では、思考も十分に機能しない。ぼやけた目元をこすりながら、小さくあくびをした。

枕元の目覚まし時計の時刻を見る。

午前十時一十一分。

普段なら学校はとっくに始業の時間を迎えているが、夏休みである今はその心配はしなくていい。

……そうだ、今は夏休みじゃないか。

なのになんで俺は、こんな風に叩き起しきれなくちゃいけないんだ。

休みの日に昼過ぎまで寝ていることくらい、別に珍しこことでもないだろ?」

「…………

引き続き、俺はぼんやりとしたままソイツを……同居人である安^あ曇^{つみ}七星を見上げた。

「朝^あはん、とっくに用意できてるんだから。わざと起きてわざと食べる。ほれほれ」

七星はしきりに俺を布団の中から追い出そうとする。

安眠を妨害された俺から言わせれば、それはいい迷惑だ。

俺の中では食欲よりも睡眠欲のほうが重要性が高い。

しかも夏休みとはいって、こんな平日の真昼間から叩き起しきれる覚えは何一つない。

したがつて、俺は七星の言葉に従う必要はない。

「……寝る」

「……は?」

ボスン、と。

再び俺は体を横倒しにして、夢の世界へと旅立つた。

自分の体温が残る布団の中が心地よいと思えるのは、いつになつ

ても不思議な感覚だつた。

つまりあれだらう。

水泳の授業の後に服を着替えるとやけに暖かさを感じて、すぐに眠気が押し寄せてくるあの現象と似たようなものだ。

まあ、建前はこの際どうでもいい。

ようするに、俺はまだ寝足りないといつ、ただそれだけのことなのだ。

「こら、待て！ 人がせっかく朝食の用意をしてやつたつていつに、何よその態度は！」

あー、ウルセエ。

耳元で何か正体不明の生物が雄叫びを上げているみたいだけど、そんものは俺には関係ない。

大体、お前だつて人が朝食作つても文句ばっか言つくな。やれ玉子焼きが甘すきるだの、飯が柔らかすきるだの、ドレッシングが違うだの。

自分のことを棚にあげて偉そつに説教するよつなやつこ、自由まで横取りされてたまるものか。

七星の戯言など意にも介さず、俺はまどろみの中に吸い込まれるように落ちていく。

その、刹那。

「……………んじょ…………」

何か、こう。

決してこの世のものではないよつな、そんな囁き声を。

「…………つてんでしょ…………」

聞いたよつな。

聞かなければよかつたよつな。

「起きるつてんでしょーがあー！」

「あ…………？」

うつすらと開いた視界の先。

いつの間にか引き抜かれた枕が、天高く振りかざされ、一瞬の後

に俺の顔面へと直撃した。

鼻の頭と眉間と額、総じて言つなら顔面が全体的にヒリヒリと痛い。

本日未明、材質が綿百パーセントの枕という隕石が俺の顔面に直撃した。

落下地点の周囲に対する被害状況の報告は今のところない。

当たり前だ。

俺の顔面で防いだのだから。

そんな慌しい起こされ方を経て、俺は今こうして大して減つてもない胃袋の中に黙々と冷めた朝食を詰め込んでいる。

白米に味噌汁、野菜サラダに焼き鮭。

典型的な日本食であり、見た目も味も正直言つて文句はない。

まあ、冷めてしまつてはいるけれど。

「…………」

「ひつ言わないとやたらと七星はつるといので、俺は仕方なく呟く。
「ほい、お粗末さま。食器は自分で洗つてね
ぐ、このヤロウ……」

相変わらず妙なところでじっかりしてやがる。

しかし、文句を言つたところで仕方ない。

実際、起きてきたのはこうして俺が一番遅かつたわけだし、後片付けくらいはいつもやつてていることだから苦にもならない。

蛇口をひねり、洗剤をしみこませたスポンジで手早く食器を洗つていく。

「あれ？ そういうば母さんは？」

洗い物をしながら、俺はリビングでテレビを見ている七星に声をかけた。

「明美さんなら、九時過ぎくらいに出かけたよ。町会の集まりとか言つてたけど」

「ふーん……」

洗つた食器を乾燥機の中に並べていく。

時代は便利になつたもので、今では食器の洗いや乾燥までもがボタン一つで全自动である。

その割りに俺が食器を手洗いしているのは、単に食器洗いの機械が最近調子が悪いからだ。

うちの……来栖家の中でもっとも科学技術が結集しているのは、恐らくこのキッチンだろう。

全自动食器洗い機はもちろんのこと、ガスコンロやグリルにも近代科学の結晶体が目を光らせている。

その理由としては、来栖家は母親だけの片親生活と云ふことが一番の理由になるだろう。

母親の明美は当然仕事をしているが、それを家事と両立させるのは決して楽なことではない。

なので、少しでも負担を減らすためにと、いつの間にかキッチンが目を見張る速度でハイテク化していったのだ。

もつとも、そんなことなどしなくても俺や七星だってある程度の家事全般をこなすことはできる。

だけど母親の明美としては、せめて食卓くらいは任せてほしいとのこと。

それでも今日みたいに用事ができてしまった場合などは、事前に俺か七星のどちらかが食事の用意をすると云つ取り決めになつている。

今にして思えば、その取り決めのせいで俺はいつも無理矢理に叩き起こされてしまつたのかもしれない。

かといって今日の当番が俺だとしても、結局は叩き起こされた挙句に飯の支度をさせられていたわけなので、どう転んでも俺に不利

だ。

とりあえずの遅い朝食を終えて、俺は一度一階の自室へと戻った。おかげさまと言うかなんと言つか、食事を終えた頃には眠気もすっかりなくなってしまっていた。

家中の中とはいえ、いつまでも寝巻き代わりのジャージ姿でいるのも変なので、まずは普段着に着替えることにした。

着替えるとはいっても、薄手のシャツにジーパンを穿いてしまえばそれだけで着替えは終わってしまう。

しかも着替えたまではいいが、もうすぐお昼を迎えるこの時間。ぶつちやけた話、これといつてする」とはない。

かといって、私服に着替えてまで布団の上で寝転がるのもこれとかどうかと思う。

と、思い出したように今更に締め切ったままだった部屋のカーテンを開け放つ。

窓越しに暑い日差しが差し込んできたが、今日はいつもと比べれば幾分かは涼しいようだ。

風も出ているし、散歩がてらに外をブラブラするのも悪くないかもしだれない。

ズボンのポケットに、財布と携帯をねじ込む。

特に目的地とするような場所はないが、足が向いたらその方向へ行けばいいだろ？

部屋を出て、階段を下りる。

リビングに入ると、七星はまだテレビに見入っている様子だった。テレビの中では、なにやら故郷特集のような番組が進行していた。それを食い入るように見ているのか、それとも全く耳には入らず、ただボーッともの思いにでもふけっているのか。

どちらにしても、七星はどこかぼんやりとしていた。

寝不足かとも思ったが、そつだとしたら先ほどの叩き起しの方はあまりにもハツカたり的ではないだろ？

触らぬ神に祟りなしとは言つが、触らなくてモレの神は怒り出すからタチが悪い。

やれやれと、色々なものが混じつた溜め息を一つ吐いて、俺は口を開く。

「七星」

「…………ああ、何？」

心ここにあらず、とはこのことだらうか。

七星と一緒に暮らすよつになつてからずいぶんと時間が流れただけ、時々こいつしてほんやりとしている姿を見ることがあった。まるで空を流れる雲のよつてふわふわと落ち着かないといつか、ひどく不安定な印象を受ける。

心当たりはあつた。

だけどそれは、できるなうかひつ掘り返してはいけない過去の出来事だ。

誰にだつて一つへりこあるだろ？、そつこつものが。

誰にだつてあるさ。

そう、俺にだつて……。

「隼人？」どうかしたの？」

「…………え？ ああ、いや。なんでもない」

「…………変なの」

そう言つと、七星は少しだけおかしそうに笑つた。

全く、勝手なヤツだ。

自分が同じような顔をしていたことなんて、これっぽっちも気付いていないんだろう。

だけどまあ、それでいいぞ。

沈んだコイツの顔なんて、それこそ見たくない。

「俺、ちよつと街まで出かけるナビ、お前前半ばつする。」

「……………」

……鈍いヤツだ。

いや、俺もそういう意味合いで声をかけたわけではないけど…

ハア、と。

もう一度溜め息をついて、俺は続けた。

暇なら何でも出来る。たまには散歩しても悪くなかったり、その言葉に。

七星はどうしてか、呆気に取られたような、そんな顔をしていた。
しかし、それでも、東の間の二上で。

「 しょうがなー。 一人が寂

を合ひてあげるよ」

七星は楽しそうに笑うと、準備をしてくると言

ていつた。

全くわけが分からなし
でもまあ。。。

このも、懸けはないだわ。

外に出ると、炎天下の日差しが勢いよく頭上から降り注いできた。それでも連日の暑さに比べればずいぶんとマシだと言えるが、やはり季節は夏、暑いものは暑い。

「ほら、何ボサツとしてんのよ」

俺が日差しの強さに目を瞑つていると、すぐ脇を七星はやけに機嫌よく通り過ぎた。

七星はベージュのブラウスにグレーのデニムパンツといつ、白を基調とした涼しげな格好に小さめのトートバッグを肩から下げている。

対して俺はといつと、何が悲しいのか、黒のティーシャツに紺のジーパン。

これではまるで、七星が熱を反射して俺が熱を吸収しているようなものだ。

今すぐ部屋に戻つて着替えをしなおそつかとも思つたが、すでに七星はスタスタと道の先を歩き始めてしまつている。

気のせいか、鼻歌のようなものまで聞こえてくる。

「女つて、わかんねえ……」

そう呟いて、俺はどこか納得のいかない足取りで、その白い背中を追いかけた。

俺達の住むこの佐倉町は、海に面した港町というイメージが強い。実際に町の東側には大きく港が展開され、街の特産物の多くも海産物がその割合を占めている。

かといって決して時代錯誤のある町ではなく、街の中心部には大規模なアミコーズメント型施設や大型デパートの支店なども立ち並

ぶ。

「こと生活に関する不便と思つことはなく、人じみのじつた返しこなる都心などに比べて、はるかに環境がいいと俺は思つている。家を出て、まずは住宅街に沿つて続く道を歩く。

すると大きな道路にぶつかるので、今度はそこを右折し、そちらを直進。

十分も歩けば、駅の看板が見えてくる。
そこを中心として、駅前のいわゆるアーケードや繁華街が大きく展開されているのだ。

さてと。

こうして出歩ってきたのはいいものの、目的も持たずにただ歩き続けるというのもそれはそれで体力のムダになる気がする。
いくらか涼しいとはいえ、この炎天下の中をあてもなくさまよっているのは自殺行為に等しい。

「七星、お前どこか行きたいトコつてあるの?..」

「え? 私?」

話を振られ、少し前を歩いていた七星は振り返る。

「つていうか、隼人はどこか行く場所があつたんじゃないの?」

「いや、何も。ただ、家にいるよりはいいかなと思つて。最初に言つただろ。散歩みたいなもんだって」

まあ、散歩なら文字通り歩いていればいいのだけれど。

「うわ、無計画……」

非難の視線を浴びせられた。

と、こつししている間にも体温と体力はどんどん奪われていく。

何もしてないのにエネルギーだけを搾り取られるなんて、まさか理不尽の極みではないだろうか。

なので、とりあえずは。

「んじゃ、とりあえずそこの喫茶店にでも入ろう。暑くて仕方ない

「ん、そだね」

ガラス越しに見える店内は、まだ比較的客足は少ない。まずは冷たい飲み物でも口にして、午後の予定を立てるとこよ'。

鈴の音を鳴らし、俺と七星は喫茶店のドアをくぐった。

すぐにウェイターが寄ってきて、お決まりの案内文句を口にする。「いらっしゃいませ。一名様でよろしいですか？」

「はい。タバコは吸わないんで、禁煙席でお願いします」「かしこまりました。ご案内しますので、こちらへどうぞ」

ウェイターの後に続いて、俺は歩き出す。

そのあとに七星も続く。

案内されたのは四人席だったが、まあ店内の客足が少ないから問題はないのだな。

向かい合つように座つて、俺と七星はそれぞれにアイスカフェオレとアイスココアを注文した。

注文を受けると、ウェイターは礼儀正しくお辞儀をし、カウンターヘと戻つていった。

「ふう……」

背もたれに体を預けると、ふいにそんな溜め息が漏れた。

疲れたというわけではないのだが、暑さに参つていたというのも本當だ。

ちょうどいいから、薄手の洋服も見て回ることにしようか。

そんなことを考えながら正面に視線を戻すと、七星はどうしてか俺の顔をジッと見続けていた。

「……？」

別にさほど驚くことでもなかつたかもしれないが、体が勝手に飛び退くよつた反応を示してしまつ。

そのまま一分が過ぎ、一分が過ぎる。

相変わらず七星は、視線をピクリとも動かさない。

ただジッヒ、俺の顔を見据えてくる。

ジー。

「……七星？」

ジー。

「おい、七星つてば……」

ジー。

「聞いてるのか？」

ジー。

「……バカ七星」

「なんだと！」

「うわっ」

「バカとはなんだ、バカとは…」

「バカ、お前。いきなり反応するな……」

「だからバカつてなんだ、バカつて！」

「今のは不可抗力だ。聞き流せ。それと、店内で騒ぐな

その一言で、七星はよつやくハツとなる。

幸い客足が少ないこともあり、他の客は七星の小さな騒ぎには気付いていないようだった。

「うー……」

それで落ち着いたのか、テーブル越しに身を乗り出しかけていた七星は、ようやく腰を下ろした。

「つたくもー……」

ふてくされ気味の七星。

「それはこっちのセリフだ……」

グラスの水を一口含んで、俺は呟いた。

「何よー。いきなりバカつて言われたら怒るに決まってるでしょー

「その前だ、前。いくら呼びかけても反応しなかつただろ、お前

「え？ 私？」

「そう。お前」

もとい、七星以外に誰がいるところだろ？

あいにく俺は、生まれつき幽霊が見えるとかそういう特異な体质などは持ち合わせていない。

「……」

と、再び七星は黙り込んでしまう。

俺は全くもってわけがわからないままだ。

注文の品がやや遅れて運ばれてきた。

だが、特に待つというほど待っていたわけでもなかつたので、多少の遅れはそれほど気にはならなかつた。

ガムシロップとミルクをそれぞれ一つずつ流し込み、薄茶色の液体を口にする。

うん、うまい。

喫茶店の飲み物なんてただ高いだけでインスタントと同じじゃないかと言つ人もいるが、そういうものばかりでもない。

俺はこの店に通いなれたというほど頻繁にやつてくるわけではないけれど、ここのかフェオレの味は好ましいものだつた。

遅い朝食のせいもあって空腹感はほとんどなかつたが、胃の中の流し込んだカフェオレはほどよく隙間を満たしてくれた。

向かいに座る七星も、そのままたるそうなアイスココアを口にしている。

わずかにほこりただよつたその表情から察するに、口には合つたようだ。

しかしまあ……。

この店のアイスココア、俺はまだ口にしたことではない。

というか、基本的に俺は甘いものがあまり好きではない。

拒絕するほどに嫌なわけではないのだが、自分から進んで口にすることなどほとんどないと言つてもいい。

だからその、なんだろう。

店側からすればサービスなのだろうが、そのアイスココアにセツ

トでお得と言わんばかりについてくるバーラのアイスクリーム。一体何を考えているのだろうと、真剣に悩み出しそうになつてくる。

これが「コーヒーの付け合わせならまだ納得できる。

「コーヒーの苦味をアイスの甘味で補うといった具合だらう。

しかしどう見たつて、アイスココアにアイスクリームは甘いものに甘いものの組み合わせでしかない。

これはようするに、密を太らせようという店側の隠れた陰謀なのではないだろうか。

もちろんそんなことはあり得ないだらうけど、甘いものが苦手な

俺から言わせればこの組み合わせは拷問である。

恐らくこの先の将来、俺はこの店でアイスココアだけは決して注文することはないだらう。

「どしたの？ 隼人」

「え、ああ、何が？」

「さつきからジーッとこっち見てるけど」

「いや、特に意味はない」

アイスクリーム一つに後の人生設計をしていたなどと、バカラしくて口が裂けても言えやしない。

しかしその視線が手元のアイスに向けられていたと察した七星は、それこそ深い意味などなくこう言つた。

「……食べる？」

「謹んでお断りします」

長く居座つても、体が冷房の気温に慣れてしまう。

お互にのどを潤したあと、とりあえずはデパートの中を見て回るといつことに結論付けて喫茶店をあとにした。

ちなみに言うと、喫茶店はなぜか俺の奢りだつた。

「私、付き合つてあげてるんだけど？」

席を立つ際に満面の笑みでそう言つた七星に、俺は大人げもなくわざかな殺意を抱いてしまつた。

ちくしょう、この三百五十円をいつか倍にして返してもらうからな。

平日の真昼ではあつたが、夏休みといふことも後押しし、デパートの店内はさすがに人が多い。

そういえば、時期的にももうお盆の真っ只中だった。

里帰りする人、してくる人、どちらにしても少なくはないのだろう。

とりわけ、特設スペースのみやげ物などは多くの家族連れや親子連れで賑わいを見せていた。

そんな人の波を搔き分けながら、エスカレーターを乗り継いで衣類売り場にやつてくる。

このフロアは大小様々なテナントで構成され、参加店舗数は軽く十を超える。

フロアの中央にエスカレーターの乗り場があり、それを円形に囲むようにして店舗が構えられているのだ。

もちろん、店によつて男性向けと女性向けでジャンルは分かれており、気がつけば七星はすでに服選びに没頭していた。

「むー……」

こつちもいいがそつちも捨てがたいなどと、唸るように七星は品定めをしている。

ほとんどの店舗では夏物大処分という看板を掲げ、店内の夏物も大半が割引価格にて放出されているようだ。

ちなみに俺は、適当にメンズのズボンやシャツを見て回つてている。デザインもそうだが、まずは着心地に重点を置いている。

見た目の派手さとか、いわゆるカッコよさというのは二の次だ。そこまでファッショニこだわりはないし、どんな服でも着こな

せるといつ自信もない。

ようするに、普通でいい。

夏物とはいつも、どうせ暑さは九月の終わり頃まで続くのが毎年のことだ。

それを考えて、俺はズボンを一着とシャツを一着ほど購入することにした。

「ありがとうございましたー」

今風の若い男性店員が、見た目に似合わず丁寧に袋詰めをしてくれたのが少し驚いた。

さて、こつちの買い物は一段落したわけだが。

「むー……

七星は相変わらず奮闘していた。

いや、それでも七星なりに厳選した逸品を選りすぐつっているのだろうけど……。

「つーん……

その日はようつとだけ、本気モードが入つてこようが見えた。七星がさつきからにらめっこを繰り返しているのは、ビリヤリコンピースのようだった。

似たような品を両手に握んで悩んでいるようなのだが、俺からはどちらも同じものにしか見えない。

女つてこつのはどうして、こんなにも電話と買い物が長いのだろう。

これはもはや、一種の社会現象として真剣に議論されてもいいような気がしてきた。

その後たつぱり一十分を費やして、結局七星は別のものを購入していった。

「あれだけ悩んで買わないとは、女つてわかんねえ……

「何? なんか言つた?」

「……別に」

内心で呟いたと思つていたのに、無意識のつむぎで葉に出していたようだ。

俺達は今、デパートの地下にある休憩場のよつなスペースで休んでいた。

服を買い終えた後は、そのままさらに上の階にある雑貨売場へと向かい、同じフロアの百円ショップも渡り歩いた。

そこで買ったものはなかつたが、適当に商品を眺めながら歩くだけでも時間は思いのほか過ぎていつた。

その後、最上階にある書店に立ち寄つた。

これといって特にめぼしいものもなく、俺はマンガ雑誌を立ち読みして時間を潰していた。

しかし、ずいぶんと時間が経つたにもかかわらず、七星は一向にやつてこない。

「探したい小説があるから、それまで時間を潰してて

そう言つた七星は、まだ現れない。

少し遅すぎやしないだろうか。

探して見つからないのならば、とりあえずは店員に聞いてみればいいだけのことだ。

それとも、七星も立ち読みに没頭してしまつてゐるのかもしれない。

そうだとしたら頷ける。

小説一冊を丸々読み切るとすれば、一時間程度の時間は当たり前のように消化される。

さすがにそこまで付き合つのは「メンだ。

俺は荷物を持って、小説のコーナーを見て回つた。すると思いのほか簡単に、その一角に七星の姿を見つけることができた。

思つたとおり、立ち読みに没頭していねむつだ。

「何せつてんだよ。」

- 1 -

しかし、返事はない。

書と誌書に集中してしまった時代が

七星のあしらひ

肩を掴んで少しぐるぐる

しかし反応はない

ならば是が非でも反応してやらんにかね
二は認めたるが、二は認めたる。

……バカ七星」
ボソリと、囁くように言う。
同時に一步退き、身構えた。

10

5 7

二〇六

一三は歎か

うーうー、マジか？

卷之三

忍の恋の、龜は七曜に近づく

実は二のが氣付かなハフリで、

と掴まれたりするんじやないだろうか。

ハシニルシニシ想作を勝りまし一トヨ。

「七星、どうしたんだ……」「

と、顔を覗き込もうとして。

... 記... ... 記...

「イツ。そんな、小さな寝息が聞こえてきた。

立つたまま寝てやがる…………。

よくよく見れば、手にしている小説もさつきから一ページとして捲られてはいない。

なんて器用なヤツなんだ。

驚きと呆れで、俺はドツと疲れが押し寄せてきた。

「こら、起きろ七星。寝てんじゃねー」

グリグリと、頭の頂点を押すようにねじった。

「……あう、痛い、痛いってば……」

意外とあつさりと七星は目を覚ました。

目元を軽くこすりながら、手にしていた小説を閉じて棚の中へと戻していく。

「もー、何すんのよー……」

「よつによつて、立つたまま寝るな。ムダに器用なんだよお前はまだ完全に起きていない七星の手を引いて、俺は足早に書店を後にする。

寝ぼけたままのコイツを放つておいたら、それこそビニに流れでいくか分かったもんじゃない。

とにかく少し、休める場所に行こう。

「…………」

という流れで、俺と七星は今に至る。

エレベーターの中でもウトウトしかけていた七星を引っ張つくるのは楽ではなかつたが、水分補給をさせたらすぐに目が覚めた。

簡単な性格で助かる。

ガス欠の車体に給油したようなものなのだから。

「今何が、すつごく失礼なことを想像されたような気がする

「…………」

俺はカップの中のオレンジショーツを飲み干した。

いつの間にやら時間だけがしっかりと流れ、もう夕方の四時にな

りうとしている。

デパートの地下は食品売場にもなっているため、この時間になる
と夕食の買い物に訪れる主婦の客層が一段と多くなる。

「そろそろ帰るか。もう夕方だし」

空になつた紙のカップ潰して、手近に合つたゴミ箱に放る。

「そうしようか……あ」

ふいに何かを思い出したよつこ、七星が声を上げた。

「何？」

「ごめん隼人。もう一ヶ所だけ付き合つてくれない？」

「そりや別にいいけど……あんま長くなるなよ？」

「分かつてるつて。ほら、行こう

何がそんなに楽しいのか、七星は一足先に駆け出した。
その背中を追いかけて、俺もゅつくりと走り出す。

ふと、思った。

「これじゃ、俺が七星の買い物に付き合わされてるみたいじゃん……

まあ、途中から分かりきつてたことだけど。

…

てつきりデパートの別のフロアに移動すると思つていたのに、七星はそのまま外のアーケード街へと向かつていった。

アーケード街は縦に長い商店街のようなものだ。

近年ではゲーセンやネットカフェの施設も多く立ち並び、ドラッグストアや薬局も軒並みを飾つている。

「えーと……あ、こっちだ」

右か左かと少しだけ悩んで、七星は左の道へと歩き始めた。目的地はあるか、その場所さえも知らされていない俺は、ただ七星のあとについていくことしかできない。

夕方になり、アーケードの中も日中に比べるとずいぶんと人の数が増えている。

人ごみが苦手な俺は、はつきり言えばわざと帰つてしまいたい気分だった。

しかしあ、理由はよく分からぬが今日の七星はずいぶんと機嫌がいいようだった。

時折何の前触れもなく怒つたり、立つたまま寝るなどという大道芸は見せ付けてくれたものの。

どうせこのあとは真っ直ぐに家に帰るだけだし、そのついでにもう一軒くらい立ち寄る店があつてもいいだろ。

とはいえるが、一体目的地はどこなのか、俺には見当もつかない。と、前を見ると。

「……あれ？」

いつの間にか、少し前を歩いていた七星の背中が忽然と姿を消していった。

慌てて振り返るが、そこにも七星の姿はない。

まんやつと歩いている間に、どんどん前へと進んでしまつたのだろうか？

いや、田を離した時間はそれこそ数十秒程度のものだ、それは考えにくく。

一体どこに行つたのだろうと、俺は周囲のあたりに田を配りせて……。

「わ……」

ふいに、あらぬ方向から腕を引っ張られた。

見るとそこに、七星が立つていた。

「な、七星……」

「何驚いた顔してるのよ？ しっかりついてくれないと困るじゃない」

「あ、ああ。悪い……」

「ほひ。じひひひひ」

そうして引っ張られるままに、七星は俺の腕を掴んで路地裏の狭い通りへと入つていぐ。道幅は途端に狭くなる。

なんだか薄暗いし、人の出入りは多くはなさそうだ。

そんな道なき道を歩くこと数十秒。

「はい、到着つと」

七星はようやく俺の腕を離し、足を止めた。

「到着つて……」

七星の視線を田で追つてみると、そこは中古のクロシヨップのようだつた。

ただし、立地条件はかなり悪い。

こんな路地裏にあるくらいだから、settと駐車も限りなくゼロに近いんだろう。

店の看板も古びて錆付いているし、ネオンサインはどこかびんの電球が切れている。

扱うものが中古なら、店そのものも中古だった。
しばし呆然と立ち尽くす俺を尻目に、七星はスタスタと店の中へと入つていく。

一応、自動ドアとしての機能はまだ失われてはいなじょうだった。
しかし反応が鈍く、一度開いたドアはなかなか閉まらないとしない。
その間に、俺は七星のあとに続いて店の中へと入つていった。

店に入った瞬間、雰囲気が変わった。
薄汚れてすす臭かつた裏路地は、どこか大人びたムードの漂う酒
場のようなイメージを思わせる。

ゆつたりとしたテンポのジャズ系の曲が、雑音のない静かな店内
をいつそう引き立てているようだつた。

「いらっしゃい」

カウンターにどつしりと構えた恰幅のいい中年男性。

この人が店のマスターだらうか？

ざつと見たところ、店内には店員らしき姿は見当たらない。

ということは、そういうことなのだらう。

俺はカウンターのマスターに小さく頭を下げて、木造の店内に歩
を進めた。

店内には中古のCDだけじゃなく、古今東西の様々なレコードも
取り揃えてあつた。

ほとんどが国外のバンドのものようで、俺にはタイトルをえ読
めないものばかりだ。

どれもこれもが古ぼけたジャケットに納められてはいるものの、
とても丁寧に扱われている。

中古といえば確かに中古だが、限りなく新品に近い中古だ。

店の奥の方に行くと、そこには比較的最近のCDが置かれていた。
いわゆるPOPや、ロック系の曲だ。

しかし、いくら新しくてもそれらはもう三年以上も前の曲ばかり。中古CDショップのだから新作を探すのがおかしいとはおもいつつ、昔懐かしい曲をいくつも手にする。

もつとも、俺が懐かしいと思える曲の大半は自分でCDを持っていない曲だ。

どうしてそれが懐かしいのかといふと、よつするにその曲が主題歌として使われていたドラマなどによる影響が大きい。劇中で流れる挿入歌やエンディングで流れる曲は、回数を重ねて見るだけでいつしか口ずさめるようになるものだ。

ふと俺は、一枚のCDを手に取った。

「これは……」

それも昔、好きだつたドラマの主題歌として歌われたものだつた。あのドラマはかなり好きだつたのに、どこか中途半端な終わり方をしてしまつたのが納得できなかつた。

まあ、当時の俺は十三歳。

恋愛ドラマの展開にいちいち反感を覚えるなど、今では到底ありえない話だけ。

ジャケットを裏返す。

隅の方に、手書きで値段が書かれたシールが張られていた。値段は三百五十円。

まあ、さすがに中古というだけあつてずいぶんと安い。迷う時間は必要なかつた。

俺は黒い買い物籠の中にCDを一枚入れて、再び店内をグルリと歩き始めた。

しばらく店内を回つて、よつやく思ひ出した。

七星はどうだ？

入店してからもう一十分ほどが経っている。

長居はしたくないといっておきながらも、ずいぶんと時間が経ってしまった。

「アイツ、どこ行ったんだ……」

この店は一階のフロアのみで構成されている。

決して広くもない店内だから、探せばすぐに見つかるはずだ。と、CDの棚からレコードの棚へと変わる途中に。

「あ、いたいた。おい、七星……」

見つけたその背中に声をかけようとして、俺は思いとどまつた。七星は小さなテーブルのようなものに肘を乗せながら、大きなヘッドフォンに両手を添えている。

耳に流れるメロディのリズムを感じ取るよつに、片足の爪先が一定の間隔でトントンと床を叩く。

目を閉じ、メロディに合わせて何度も小さく頷く。

その横顔はどこか幸せそうで、ついつい声をかけるのがためらわれた。

見れば七星が肘を乗せている小さな台のよつなものが、他にも一つほど並んでいる。

レンタルショップなどで見たことがある。

これは確か、CDを視聴できるプレイヤーだつたはずだ。

ようするに、実際に聴いて気に入つたら買つてくださいこという店側の配慮である。

見た目は古臭いけど、客への心遣いは立派なものだと、俺のこの店に対する印象は好感触だ。

「あ

その声に俺は視線を戻す。

見ると、七星は大きなヘッドフォンを外してプレイヤーのスイッチを切るところだった。

曲の演奏が終わったのだ。

「『めんごめん、つい夢中になつてた』
「いや、別に待つてないからいいよ。で、お前は買つのもとかない
のか？」

答える前に、七星が俺の手に提げた籠の中身を覗う。

「隼人はそのCD、買うの？」

「ん？　ああ。昔好きだった曲なんだ、これ。それにまあ、値段も
安かつたし」

「ふーん……」

「それで、お前はどうすんの？」

「え、私？」

「今聴いてた曲、気に入つてるなら買えればいいんじやないか？　そ
れとも、以外にもレアで値段がヤバイとか？」

「んー……まあ、確かに気に入りではあるんだけど、ね……」

七星の言葉はどこか歯切れが悪い。

もしかして本当にプレミア物で、バカみたいな値段がついている
のか？

「まあ、私のことはいいからさ。買つなら早く会計済ませてきなよ
「え？　あ、ああ、そうだな」

促されて、俺はマスターの構える会計に向かつ。

それに気付いてか、マスターの男性は読んでいた新聞を折り畳ん
で椅子から腰を上げた。

途端に、俺はギョッとした。

マスターの身長は、それこそ楽に百九十センチに届くのではない
かという巨体だった。

プロのバスケット選手、いや、バレーボール選手並の背丈だ。

俺の身長も百七十八センチで、どちらかと言えば長身に部類され
る。

が、これは比べ物にならない。

今でも百八十センチに届かない一センチを嘆いていふといふのこ
世の中上には上がいるのだと思はされた。

「三百五十円だな、毎度あり」

その体躯とは裏腹に、マスターの声色はとても温厚だ。

俺は財布から小銭を取り出し、ちょうど三百五十円をマスターに

三
源
九

は早て柱に向勝機に詰る連中の新聞を拂ひ如き

なぜだか俺の中に、敗北感のようなものが芽生えてしまった。

「終わつたぞ……つて上

会計を済ませて戻つてくると、七星はまたヘッドフォンをして先ほどと同じ曲に耳を傾けていた。
だから、そんなに気に入るくらいに好きなら買つてしまえばいいのに……。

いた。

「わっ」

そんな声で振り返る七星たったが、俺が会計を終えたのを確認するとすぐに演奏を停止させた。

二二二

「いや、いいよ。その曲、覚えればいいじゃん。好きなんだろ?」「うん。まあ、ね」

やせつ、七哩の血難せむべりかせつとしなこ。

からない。

「……まあ、いいか。なら、そろそろ帰ひつ」
「ん、そうしな」

一転して、七星はまた機嫌のよそそつな顔を見せる。
やつぱり女つて、よくわかんねえ。

「マスター、お邪魔しました」

店を出る際に、七星がそんなことを言ったので驚いた。

振り返ると、マスターは椅子に座ったまま両手を上げてそれに応えていた。
ますます驚いた。

家に着いたのは、ちょうど夕方の五時を少し回った頃だった。

「ただいま」

「ただいまー」

そう言って玄関の扉を開けると、キッチンからまな板を叩く音が聞こえてきた。

母さんが夕食の支度をしているのだろう。

「あら？ 珍しく一人一緒になのね。お帰り」

料理の手を止め、母さんはキッチンからひょっこりと顔を覗かせて言った。

それはいいが、包丁を持ったままといつのは危ないから気をつけほしい。

「あ、明美さん、私も手伝います」

七星は一足早く家の中に上がり、荷物をリビングのソファに預けるとキッチンへと向かった。

「あら、いいのよ七星。ゆっくり休んでなさい」

「いえ、お手伝いします。明美さんだけ、今日は朝から忙しかったじゃないですか」

「ああ、それね。ほら、もうすぐ海岸沿いの神社の夏祭りがあるでしょう？ そのことについての会合だったのよ」

「あ、そつか。もうそんな時期ですね」

キッチンから聞こえてくる一人の会話を聞きながら、俺はとりあえず荷物を持って部屋へと戻る。

荷物自体は重く感じるほどるものでもないが、なんだかんだで今日は結構歩き詰めだった。

おかげでふくらはぎの筋肉が少し張っている。

極端な運動不足ではないが、最近あまり体を動かしてなかつたのも事実だ。

これを機に、少しは運動する時間を増やした方がいいかもしけないな。

ベッドに背中を預けながら、俺は今日買った服を袋から取り出す。値札などのついている不要な部分をはさみで切り取つて、タンスの中に服をしまう。

「これでよし、と」

ちょうどいい具合に腹も減つてきた。

夕食まではもう少し時間がかかるだろうから、それまでは部屋でのんびり過ごすことにしよう。

何もせずにリビングでテレビをつけていると、七星がうるさいからな……。

さて、何をして時間を潰そうか。
と、手を伸ばした先に。

「……」

今買つてきた、一枚のCD。

ビニールを破り、ケースの蓋を開ける。
机の上にあるCDプレイヤーにディスクをセット。

イヤホンを耳に。

読み込みの機械音。

再生のボタンを押す。

やがて、あの頃の懐かしいメロディが流れ出す。
自分でも気付かないうちに、笑みがこぼれる。

指先が、メロディに合わせて部屋の床をコツコツと叩いていた。

いつもと変わらない夕食の風景。

とりわけ今日は、いつもよりも賑やかだったようだ。

とはいっても、母さんが俺達二人にどこに行つていたのと聞き、それに対して七星が一方的に喋つて俺は相槌と否定を繰り返しただけ。

全部に相槌なんて打つてたら、俺は今頃喫茶店で店員相手に「ティッシュ皿を投げ合つて戦う、謎の奇人変人に仕立て上げられていた。今日一日の出来事を語るだけで、どうしてそこまで常識はずれなストーリーが展開されるのだろう。

今に始まつたことじやないが、七星の話の飛躍つぶりには気疲れさせられる。

夕食後の時間は緩やかに流れる。

母さんはキッチンで洗い物をし、俺と七星はソファに座つてテレビを見ていた。

内容はバラエティの番組なのだが、司会者とゲストのお笑い芸人が見事に噛み合わない。

それがまた番組全体の雰囲気を別の方向から盛り上げる形となつて、大きな笑い声が沸き上がつた。

こんな感じのトーク番組は、俺も七星も好んでみるものだ。

ただ単純に持ちネタを披露してくれるよりも、何気ない日常会話を面白おかしくしてくれるほうがより面白い。

と、ここで番組のコーナーが変わつたようだ。

ここ最近、番組内で人気が出てきているという心理テストのコーナーが始まつた。

スタジオの向こうから、このコーナーの顧問とも言つべき心理学者の男性がやってくる。

最近ではこいつ、学者とか教授といつたいわゆるお偉い方々もバラエティの番組で多く見かけるようになつた。

それが今時の視聴者には受けがよく、様々な番組でゲストやレギュラーとして取り上げられている。

『それではですね、今回もまた一つ、ちょっとした心理テストを皆さんに受けてもらいたいと思います』

心理学者の男性はそう言つと、問題の書かれたホワイトボードをひっくり返した。

するとそこには、簡単な図式で父、母、息子、娘と、それぞれに書かれ、それらが船の上で乗員のように並んでいる。

『今回のはですね、もしかしたらちょっとだけ残酷なものかもしれません』

残酷という言葉に、司会者やお笑い芸人がこじわざばかりに突っ込みを入れる。

そのたびにスタジオに笑いが沸き起つり、いつそヒートアップしていく。

司会者が適当なところで場を静め、引き続き心理学者の男性が先導する形になる。

『問題としては簡単です。これはですね……』

問題の解説が始まった。

それは、俺もどこかで一度は耳にしたことがあるような心理テストだった。

舞台設定として、登場人物は海の上を漂流しているといつ状況にある。

食料も水もすでに底を突き、助かる見込みはあまりにも少ない。そんな彼らに、わずかに救いの目が出る。

遠くに陸地が見える。

そこまで辿り着くことができれば、助かるかもしね。しかし、ここでアクシデントが起つる。

ボートの船底から、浸水が始つた。

結論から言つと、このままではボートは転覆してしまつ。が、誰か一人だけならボートに乗せたままで陸地まで辿り着くことができる。

その場にいる誰しもに、すでにこの場所から陸地まで泳いでいる体力は残されていない。

同様に、誰か一人に助けを呼びに言つてもうつたとしても、助けが来る前に彼らは溺れてしまう。

この状況で、あなたなら誰を助けますかという、そういう心理テストだった。

漂流者は四人家族。

それぞれ、父、母、息子、娘の四人である。

ゲストはそれぞれに手渡されたボードに、自分が助けるべきと思う人物とその理由を書いて提示する。

結果として、心理学的観点から捉えたその人間の深層心理が分かるのだという。

テレビの中の、しかもかなり限られた状況の問題ではあったが、なるほど、確かにこれはある意味で残酷かもしれない。

誰か一人を助けるということは、同時に残りの三人を見殺しにするということなのだから。

さすがにお笑い芸人のゲスト達も、問題の取り組みには真剣な表情で望んでいるようだ。

普段見せないような苦悶の表情を見せる人も少なくない。

「なんか、嫌な出題ねえ」

キッチンでの洗い物を終えた母さんが、テーブル越しにそんな言葉を呟いた。

「でもまあ、例えの話だしさ」

俺は何気なく、気軽な感じで言葉を返した。

「まあ、そうだけどね。あんまりこういうのは好きになれないな、母さんは」

それは当然だと思う。

そもそもこの問題のような状況に遭遇することなど、それこそ常識で考えたら天文学的な確率のものだらう。

「ちなみにさ、母さんだったら誰を選ぶ?」

俺は背中越しに聞いてみた。

「んー、そうねえ……」

あまり好きではないといってた割には、母さんは真剣に考えている。

しばしの間、うーんと唸りながら、口を開く。

「選べないなあ、母さんは。そんなことを選ぶくらいだったら、全員が助かる方法を考えるわ」

それは多分、問題の答えとしては正解でもなく不正解でもないだろう。

俺も実際、母さんと全く同じ考えだった。

ありえないことだけど、そんな状況になつたら誰を残すかではなくどうすれば全員が生き残れるかを考えたい。

設定をそのまま引き継ぐのなら、この四人は血の繋がつた家族だ。赤の他人ではない。

その中から生かす一人と殺す三人を選ぶなんて、出来っこない。

「なあ、七星は……」

話を振ろうと振り返つて、俺は思わず呼吸が止まりそうになつた。そこに、見てはならない何かを見てしまつたような気がして。だからすぐには気付くことができなかつた。だからすぐには気付くことができなかつた。だつて、ウソみたいだ。だつて、ウソみたいだ。

どうして、七星は……。

「え、何?」

七星が俺のほうを振り返る。

……気付いて、いないのだろうか。

「ちょっと、どうしたの七星……」

俺の後ろの母さんも、その異変に気付いて声が裏返りそうになる。

「え? え?」

やはり、七星は気付いていなかつた。

驚きに満ちたその表情の中に、理由の分からぬ場違いな涙が流れていることに……。

自室のベッドの上、俺は明かりもつけずに灰色の天井をぼんやりと見上げていた。

眠るにはまだ早すぎる時間、しかしこれといつてすることは何もなく、仕方ないのでベッドの上で天井を見上げている。

あの後……。

正体の分からぬ自分の涙に、七星は少しだけ取り乱した。その場をうまく取り繕ってくれたのは、母さんだった。俺自身、何がなんだか全くわけがわからなかつた。

「隼人、悪いけどちょっと、七星と一緒にして」

そう言つた母さんの言葉に、俺は素直に従つた。

正直あの場では、俺は何もすることができなかつただろう。不意打ちとも取れる涙に取り乱していたのは、七星以上に俺だったのかもしぬれない。

……もう。

終わつたことだと思っていたのに。

あんな記憶は過去のものだと、捨て去つてしまつたと思っていたのに。

そうじや、なかつた。

少なくとも七星は、違つた。

まだ心のどこかで、あのときの傷を引きずつている。

アイツは悪くないのに。

罪を責められるのは、七星ではなく俺のはずなのに。

罪人である俺が全てを忘れ、犠牲者である七星がまだ過去を引きずつている。

……理不尽だ。

奥歯が軋む音がした。

行き場を失つた怒りが、再び胸の内で膨れ上がりつてくるよう。田を閉じる。

どうしてこんなにも、鮮明にイメージが流れ込んでくるんだろう。

赤い炎。

罵詈雑言。

打ち付ける、耳障りな音。

悲鳴。

泣き叫ぶ、声。

何度も振り上げる、悪魔の拳。

何もかもが燃え盛る炎の中で。

何度も、何度も、何度も、何度も何度も何度も何度も何度も……。

「やめろっ！」

自分の言葉の残響が、部屋の四方の壁に反射してしつこく耳の奥に跳ね返る。

「はあ、あ……あつ、はあ……」

呼吸が整わない。

心臓の鼓動が否応なしに高まる。

ドクン、ドクン。

忘れかけていた記憶が呼び覚ます。

その手に残る、罪の重さを。

嫌でも思い知らされる。

あの、炎の中で。

俺は、間違いくなく、確かに……。

「…………ッ！」

消し去れない。

拭い切れない。

それは、あの日から分かつていたことだ。

それは、最初から分かっていたことだ。

今更、それを……。

無かつたことなんかに、できるはずがないんだ……。

「コンコン、と。

部屋の扉を、どこか遠慮がちにノックする小さな音。

「……隼人、起きてる?」

その声に、俺は跳ね上がるよう体を起こした。

「七星、か……?」

「うん……」

「待つてろ。今開けるか……」

「あ、いいの。このままで聞いて」

立ち上がって歩きかけた体に急ブレーキをかける。

ドアノブを回そうと伸ばした手が、虚しく宙を泳いだ。

「さつきははじめんね。いきなり泣き出したりなんかしちゃって……

自分でも、よく分からんだけどさ」

「……ああ。もう、大丈夫か? 少しは落ち着いたか?」

「うん。もう平気」

「……そつか。なら、いい」

「うん……」

それつきり、俺も七星もしばらく黙り込んだままだった。もつとかけてやる言葉はあるはずなのに、どれだけ探しても正しい言葉が見つからない。

それはまるで、さつきの心理テストとよく似ていた。

どの応えも正解ではなく、同時に不正解でもない。

それでも俺は、思つたはずだ。

正解でも不正解でもない、別の答えを探すんだけど。

だけど今は、見つけられない。

かける言葉が、見つからない。

「じゃあ、私はもう寝るよ」

「……ん、分かつた」

「おやすみ、隼人」

「ああ、おやすみ……」

扉越しに、七星の足跡が少しずつ遠ざかっていく。

一瞬だけ訪れる安堵と、その後に押し寄せる罪の意識。俺は自分の無力さ加減に、また奥歯をギリと噛み締めた。

月明かりに照らされたカーテンを静かに開ける。

頭上には、奇麗な半月が金色に光っていた。

俺は机の上に放り出されたままの空のCDケースを取る。中身のCDは、プレイヤーに入つたまま。

詩もメロディも、全てが好きだった曲。

タイトルは、フリー・ブルーム。

自由の羽根。

「ウソばっか……」

俺は誰にでもなく、自分自身に呟く。
自由も羽根も、俺にはない……。

いつの間に眠ってしまったか、全く覚えていない。
夜中につなされるように、何度も目を覚ましていたのは覚えてい
る。

その度に俺は、精眠を貪るように無理矢理目を閉じて眠ろうとし
た。

だが、睡魔はなかなかやつてこない。
そんな意味のない奮闘をどれだけ繰り返していたのだろうか。
気がつけば俺はまた眠りについて、またうなされるように起こうと
れてはを繰り返していた。

頭が重い。

脳がそつくりそのまま鉛の塊にでもなつてしまつたかのようだ。
中途半端な眠気はくすぐるようになつて、体全体もどこか氣だるさ
で充满している。

起き上がるこゝとさえも苦痛以外のなにものでもなく、かといって
目を閉じても一向に眠りは訪れない。

天井を見上げたまま、前髪をクシャリと搔き分ける。
まぶたは重いのに、不思議と目はしっかりと覚めていた。

「……」

首から上だけを横倒しにして、薄暗い部屋の中、枕もとの目覚ま
し時計を見た。

時刻は十一時半を示している。

昨夜からほぼ半日以上も眠つていたことになる。

だといふのに、このだるさは何だ。

疲れは抜けたところか、いつそう蓄積している。

いや、確かに肉体的な疲労は毛ほども感じられない。

昨日あれだけ張っていたふくらはぎの筋肉だつて、今はもうなんともないのだ。

だから疲れが溜まつているとすれば、それは肉体的なものではなくて精神的なものだ。

腹たらしいことに、心当たりは嫌といつほどに明確だ。
分かりきついていたことといえば確かにそれまでのこと。
一夜過ぎたくらいで何もかもを忘れ去れるくらいなら、誰だってこんな苦労はしなくてすむ。

「う……」

両腕に力を入れて、なんとか上半身を起き上がらせる。
少しでも力を抜くと、鉛の頭はそれだけで前のめりに沈もうとする。

左右に頭を振つて、どうにか意識を保たせようとするが、効果のほどはたかが知れている。

部屋の明かりが消えているとはい、なんだかやけに薄暗い。
俺はベッドから下りて、机に寄りかかりながらカーテンを開け放つた。

昨日までの快晴がウソのように、空は灰色一色の曇天に包まれていた。
今はまだ雨は降つてこないものの、いつ降り出してもおかしくない。

吐き気がした。

空模様がそつくりそのまま、俺の胸の内を絵に表したように思えて……。

階段を下りる途中、トントンと包丁がまな板を叩く音が聞こえてきた。

キッチンに立つ人物はすぐ想像できたが、同時にどうじただろう

とこう疑問も浮かび上がる。

リビングに足を踏み入れると、案の定、キッチンでは母さんが昼食の準備に追われているところだった。

「あら、おはよう隼人。ずいぶんと寝てたみたいね」母さんは小さく微笑みながらそつまつと、出来上がった昼食を次々にテーブルの上へと運んでいる。

「……おはよう。母さん、今日は仕事休み？」

「え？ ああ、そっか、まだ言ってなかつたつけ。昨日から一週間、お盆休みなのよ」

なるほどと、俺は納得した。

リビングに皿を向けるが、そこは電気とテレビがついているだけで誰の姿もなかつた。

普段ならソファの上でくつろいでいる七星の姿も、今日は見当たらない。

「……母さん、その……七星は？」

コトーン、と。

サラダを盛りつけた皿をテーブルに置き、母さんは少しだけ難しい表情を見せた。

「まだ起きてこないわ。寝てるのか、部屋に閉じこもつてるのか……」

「……そつか」

リビングの天井を見上げる。

その先は、七星の部屋だ。

今頃アイツは、何をしているんだろう。何を思い、何を考えているんだろう。また、あの時と同じなのか。繰り返すだけなのか。

過ぎ去った日々の記憶が、俺の脳裏に焼き付けた記憶が甦る。

「……顔、洗つてくる」

俺はリビングを出て、洗面所へと廊下を歩く。

「ええ、そうしてらっしゃい」

母さんも俺の胸の内を読み取ったのか、普段に比べてどいか言葉が優しかった。

こんな不安定な心境だといつのに、空腹だけはしっかりと安定を保っている。

朝の一食を抜いているだけあって、食欲そのものはあった。

しかし、いくら食べても味が分からぬ。

おいしいのは分かつてゐる。

ただ、何か足りない。

それは多分、味の一工夫とかさじ加減とか、そういうものではなくて。

ただ単純に、いつも三人の食卓が、今は一人だっていう……。

ただ、それだけのことなのだろう。

時計の秒針が規則正しく時を刻む。

やや遅い昼食を終えて、俺は着替えを済ませてリビングのソファに座つてゐる。

特に見たい番組もなかつたけど、何かに集中していないと溜め息ばかりが出てくるので、とりあえず今はテレビの画面に集中していきる。

「はあ……」

ダメだ。

結局溜め息が漏れた。

それもそのはずだ。

一体俺はが楽しくて、真昼間から料理教室入門なる番組を見なくてはならないのだろう。

しかも、昼食を食べ終えた後だ。

確かにそれなりにおいしそうなものが出来上がつてはいるが、食いたいとは思えなかつた。

それよりも何よりも、今になつて再び眠気が少しずつ押し寄せてきた。

空腹が満たされたことで、休息の足りない体が睡眠を欲しているのかもしない。

まあ、それも当然かもしない。

俺が自分で記憶しているだけでも、昨夜のうちに起きた回数は四回だ。

一度目が覚めると、次に眠るまでに大体一時間近くは間があつたような気がする。

そんなんじやまともな睡眠など取れたといえるわけもなく、今頃になつて眠気が出でくるのも不思議なことではなかつた。

「……んー」

あぐびを噛み殺して、少し背伸びをする。

体中のだるさはいくらかなくなつてはいたが、それでもまだ疲れのよがなものが残つてゐる。

今ここで眠つてしまえば、多分夜中まで目が覚めないだろ。

一日の大半を寝て過ごすといつのも考え方だが、この際仕方がない。

昨日みたいに気分転換で出かけよつとも思つたが、外はあいにく天氣は下り氣味だ。

昨日までの連日の炎天下がウソのように、灰色の空の下は濁んだ空気が漂つてゐる。

今にも雨が降り出しそうな空氣は、それだけで寒氣を運ぶ。

そういえば、今日は冷房がかかっていない。

それはつまり、冷房などなくてもわざかばかりに肌寒さを感じる日ということだ。

季節が急に変わつてしまつたような錯覚さえ覚える。

天気の下り具合は梅雨のそれだが、空気は秋から冬に移り変わる時期のものによく似ている。

まあ、どちらにしたって外出する気分にはあまりなれない。

寝る寝ないは別として、静かに部屋の中で過ごすというのは妥当な判断だらう。

リモコンのスイッチを切る。

電子音と共に、画面が黒く消える。

ソファから立ち上がるうとした、そのとき。

「おはよー……」

ど、聞き慣れたそんな呑気な声で。

田元をこすりながら、今まさに起きたといわんばかりの七星がやつてきた。

七星は顔を洗うと、遅い昼食に手をつけ始めた。

母さんは最初、心配そうにテーブルの向かいに座つていたけど、ほどなくして一人の会話は小さな笑い声に包まれていた。

まるで、昨日の出来事がウソのよう。

少なくとも、こつしてその横顔を見ている分には。

ポツリポツリと。

灰色の空の隙間から、とうとう雨粒が降り出した。

「やだ、洗濯物取り込まなくっちゃ」

週刊誌を読みふけっていた母さんが、急ぎ足で庭に向かう。
降り出したばかりで、雨脚はまだそれほど強いものではない。
空と同じ灰色のアスファルトの地面が、雨に濡れて次々に黒く変
色していく。

「雨、かあ……」

窓ガラス越しに外の景色を見て、七星は呟いた。
ぼんやりと空を見上げては、どこか憂鬱そうに溜め息をついてい
る。

俺はただ、そんな七星の横顔を眺めていた。

一夜明けて、七星は普段どおりに振舞つている。

俺は最初、それが無理して作っているものじゃないかと思つた。
けれど、こうして見る七星は普段の何一つ変わらず、俺の余計な
心配もただの考えすぎだったんじゃないかと思わせる。
それなのに。

まだ、頭から離れないんだ。

昨日の、七星の言葉が。

『うん。 もう平気』

平気なわけがない。

そんな声じやなかつた。

だけど俺は、それを確かめることができなかつた。

なんのことはない。

ただ扉を開けて、七星の顔を見るだけでよかつたのに。

できなかつた。

心のどこかで、それを怖いと思っている自分がいた。

眠れない夜は、その反動だったのかもしれない。

もしかしたら俺は、未だに……。

自分と向き合つてもできず、「今日までを生きてきたのかもしない。

」
「……」

目を閉じれば、鮮明に思い出せる。

だから夜は、嫌いだつた。

目を閉じなくては眠ることもできないのに、目を開じれば何もかもが押し寄せてしまうから。

一体、俺は……。

いつからそれに、慣れてしまつたんだろうか。

ゆつくつと目を開ける。

そのまま目を閉じていると、眠つてしまつやつだつたから。
と……。

「……え？」

目の前に、何かがある。

それが七星の指先であると氣付くのと、ずいぶんと時間がかかつた。

しかし、それに氣付くよりも早く。

「おりやー！」

そんな七星の声と共に、俺の額に軽い衝撃が訪れる。
ズビシッ、と。

あえて効果音を付けるなら、そんな感じだろう。

「な、なんだ……？」

突然の衝撃に、俺はたじろいだ。

その衝撃の正体が七星の手刀……よつするにチョップである」と
に気付くのに、やや時間がかかつた。

「何してんだ、お前……」

「いや、何って言われても……」

目の前の七星はどこか笑いを堪えているような様子だ。

「隼人があんまりボーッとしてるもんだから、いつちょ 気合いを入れてやるつかなと」

だから、どうしてそれでチョップが飛んでくるんだ、チョップが。気合を入れるって言えば、平手打ちだる普通は。

いや、だからといつていきなり平手打ちを見舞われてもそれはそれで大迷惑なんだが。

「で、どう?」

「どうつて……何が?」

「少しほの目が覚めた? あんまりボーッとしてると、脳が溶けるわよ」

身を乗り出しながら七星は言つ。

今になつて氣付いた。

俺と七星の体の距離が、ずいぶんと近い。

まあ、原因は七星がずっと身を乗り出しているせいなのだが。そのせいでも、わずかながらにも七星の胸元がはだけ、そこから肌が覗いていた。

不可抗力というか、あくまで意識して見ようとしているわけじゃないのに、正直ほのやり場に困る。

「い、いいから離れる。危ないから!」

俺はほの目を背けながら、七星から視線を外した。

ああ、くそ。

なんだつて俺がこんなに緊張しなくちゃいけないんだ。

口にした言葉とは裏腹に、俺の心臓は確かに鼓動を高鳴らせていた。

「む、なんか釈然としないんだけど」

七星は俺の態度が気に入らなかつたのか、わずかに眉を吊り上げ

る。

「糀然としないのはこいつだ、バカ！ 少しは考えて行動しろ！」

「バ、バカって言つたな！ 昨日あんだけ忠告したのに、まだ分から
ないかアンタは…」

「つるせえ！ あれのビニが忠告だ！ ああいつのは駄々をこねる
つて言うんだよ…」

「うー、言わせておけば…」

ギャー、ギャーと。

俺と七星は、一体何が原因なのか分からなくなるほどに野次を飛
ばしまくっていた。

そうしている間にも、時間だけが流れしていく。

だけど、それでよかつたのかもしれない。

胸の内でくすぶつてた黒い気持ちはいつのまにか消え、口喧嘩し
てこいるこの瞬間さえも楽しいこと、そう思えるようになつていていたから。

められている。

俺の王将は守りをことじとく突破され、もはや丸裸に近い状態だ。対する七星は余裕じこじろか、俺の飛車と角をすでに奪い取っている。

これでどう戦えといつただらつ……。

「はい。王手銀取り」

「げ……」

また負けた。

わずか六十一手で詰みである。

「ふつふつふ、まだまだね隼人」

勝ち誇り、七星は見下すように嘲笑う。

「ぐ……」

言ひ返そうにも、俺はグウの音も出ない。

一時間の間に五回の対局、結果は俺の五連敗。

そりや、将棋なんて基本ルールを覚えてる程度で戦略なんてものは何一つなかつたが、まさか五連敗とは……。

プライドとか尊厳とか、言葉ばっかで形になつてない色んなものが俺の中で音を立てて崩れ落ちていく。

「もう一勝負しようか?」

「……いい。もう遠慮する」

ドッと疲れが押し寄せる。

よもや全敗するなどとは、思つても見なかつた。

得手不得手という言葉はあるが、そんなので慰められると余計に惨めになつてくる。

「ふふん」

「コ、コイツ、今鼻で笑いやがつた……。

俺は将棋盤を運び、今はもう使われていない、過去に父親の書斎として使われていた部屋に入った。

もう使われなくなつてずいぶんと経つのに、掃除などの手入れは

しつかりと行き届いている。

どこか懐かしく感じる部屋の匂いが、少しだけ俺の後ろ髪を引くようだった。

押入れの戸を開け、そこに将棋盤を戻す。

俺の父親が死んで、もう十五年が過ぎようとしている。

幼い頃の記憶なんて、あてにはならないけど。

この部屋はあの日から……父親が最後にこの家を出て行ったあの日から、何一つ変わらないままだった。

掃除をしているのは母さんだろう。

部屋の大半を占める書物を整理すれば、もっと広く見えるんだろうけどな。

本の匂いの染み付いた部屋。

俺が父親と共に過ごした時間は、刹那的なほどに短い。

面影すらともに思い出せない父親。

写真でしか知らないその顔は、母さんによく似合つ笑顔で笑っていた。

戸を閉めて、部屋を出る。

また、この場所だけ時間が止まる。

リビングに戻ると、時計は夕方の四時になつたところだった。

「もう四時か……」

とはいっても、起きてからまだ三時間ほどしか経っていない。

今日はなんだか時間の流れ方が遅かつたり早かつたりで、時間感覚がおかしくなりそうだ。

雨は相変わらず降り続いているし、勢いも少し強まっているようだ。

さて、いよいよすることがなくなつた。

せめて天気が晴れていれば、外に出かける気にもなつただろうに。

「さて、と……」

お茶を飲んで休憩していた母さんが、やつまつて腰を上げた。

「んー。そろそろ買い物行つて」ようかな

なんだかんだでもう夕方だ。

夕飯の支度を始める時間もそろそろ押し迫つている。

「ああ、いいよ母さん。買い物は俺が行つてくれる」

「あら? 頼まれてくれるの?」

「うん。何もしないでボーッとしてるよりはいいから

「それじゃ、お言葉に甘えるわね」

そう言つと、母さんはメモ帳に買い物のリストを書き始める。その間に俺は部屋に戻り、上着を取つてくることにした。夏とは言つても雨の中を半袖で歩くのは寒そうだ。

「はい。それじゃお願ひね

母さんからメモの紙とお金を受け取り、俺はそれをポケットの中に突っ込んだ。

「んじゃ、行つてくれる」

「はい、気をつけてね」

靴を履き、玄関の扉を押し開ける。

「結構強いな……」

軒先に立つと、思つた以上に雨脚は強まつていた。

風はないが、気温も肌寒さを感じるほどに冷え込んでいる。

「つと、いけね。傘は、つと……」

「はい」

「あ、サンキュー……つて、ちよつと待て」

「何? まだ忘れ物?」

「そうじゃない。つてか、何でお前がいるんだよ七星

「何よ。いちや悪い?」

「いや、別に悪くはねーけど……」

「なら問題ナシ。やあ、さつさと行きましょー」

そして一足先を歩き出す七星。

「はあ……ま、いつか」

考えるよりも諦める方が楽だと、俺は結論を出す。

傘を広げ、道を歩く。

バラバラと音を立てて降る雨の中、数歩先の赤い傘が、嬉しそうにぐるぐると回っていた。

「ジャガイモ、ニンジン、タマネギに牛肉……って、どう見ても今夜はカレーだよな、これ……」

母さんに渡されたメモを見ると、そこにはカレーの定番の食材一覧が書き連ねられていた。

いや、そもそもメモの一一番上がカレールーになっている時点でモロバレなんだけど。

「ニンジンにタマネギ、つと。あとは牛肉だけ?」

俺の隣でカートを押す七星が声をかける。

「いや、他にもあるな。トイレットペーパーと洗剤と、あと牛乳だな」

メモを読み上げながら、俺と七星は並行して歩く。
最寄のスーパーであるここは、時間帶的にも多くの客足が集中していた。

品揃えを考慮すれば駅前まで足を伸ばした方がいいのだろうけど、大体の日用品や食材はここで揃う。

それに今日は雨降りだ。

雨の中、わざわざ遠出したくないと思う人も少なくないのだろう。
「よし、と。んじゃ、あとは牛肉だけだな?」
「そうだね。つて、ちょっと待つて」
「つと、何だ?」

歩き出した俺の肩を七星が掴む。

「いいから、もうちょっと待って」

そう言つ七星は、なにやら熱心に携帯のディスプレイを凝視していた。

なんなんだ、一体？

と、そんな疑問を浮かべたとき。

「ダッショ！」

「……は？」

七星は突然走り出した。

それも、肉売場に向けて一直線に。

『ただ今よりお肉売場にて、タイムサービスを行わせていただきます。数に限りがございますので、お早めにご利用ください』

そんな店内放送が流れたのは、七星がダッショした直後のことだった。

「まさかアーツ、これを狙つてたのか……」

七星がジッと携帯を見ていたのは、そこにある『デジタル表示の時計でタイミングを計つ』ていたのだろう。

事実、七星の動きに合わせるようにして、周囲で目を光らせていた主婦の方々が押し寄せるように肉売場に集結した。

「……なんだ、これは……」

すし詰め状態とはまさにこのことを言つのだらう。

肉売場の正面はちょっとした戦場へと変貌し、無言の圧力が奥様方の士気を高揚している。

『はい、押さないで。押さないでください。数は十分にご用意しておりますので、どうか押さないでー』

売場担当の店員の人だろうか、メガホンを片手に構えて売り子をしている。

俺はその人だからが恐ろしく、中々近くに寄れないでいた。いや、誰だつてこんな後継を目の当たりにすれば引くと思つ。

それよりも、我先にと突つ込んでいった七星は果たして無事な

だらうか？

肉の有無よりも、本気でアイツの身が心配になつてきた。

「お待たせ」

「うお！」

と、七星はいつの間にか俺の背後に立つていた。
しかもその手にはしっかりと、戦利品の割引シールつきの牛肉が握られていた。

「チョロいチョロい」

「……」

俺は感心していいのか呆れていののか、どちらにしても言葉が出来ない。

「お前、スゴイな……」

「さう？ 慣れれば結構簡単だけど」

慣れる、か。

「アレに、どうやつて慣れると？」

俺達の田の前では、未だに争奪戦が繰り広げられている。
規模こそ小さいものの、あれは間違いなく戦場だ。

「……さつき携帯見てたけど、あれってやつぱりタイミングを計つてたのか？」

「そうそ。日によつて微妙に誤差が出るんだけどね。まあ、今日は平均より少し早かつたかな。主婦の人達が一瞬で遅れてたし」

「一瞬、ねえ……」。

あの、ミサイルみたいな勢いで飛びついたオバサン達の反応は、
あれでも遅れていたということだ。

「ま、なんにしても私の敵じゃないけどね」

勝ち誇り、七星は言つ。

「……もはや何も言つまい。

俺は今日、あまりにも身近すぎて気付かなかつた戦争を田の端た
りにした。

それでいいだろ？

「どうしたの隼人？ なんか疲れてない？」

「いや、別に疲れてはないけど……」

溜め息を一つついて、俺は続けた。

「お前、いい母親になるとと思つよ。うん」

「な……」

俺としては、特に意味もなく告げた言葉だった。

けど、七星にとってはそうではなかつたようだ。

「……七星？ どうかしたか？ 顔、赤いぞ？」

「べつ、別に！ な、何でもない！」

何でもない割には、やたらとうれつが回つていない。

「……そつか？」

「そつ！ ゼ、全然おかしくない！ おかしくない！」

一度繰り返す。

わけが分からぬ。

俺、何か変なこと言つたつけ？

雨の帰り道。

行きとは違い、今度は俺が七星の数歩先を歩いていく。
が、なにやら七星の様子がさつきからおかしい。

「落ち着け、私……何も聞いてない何も聞いてない

……」

そんな囁きがさつきから聞こえてくる。

その表情は赤い傘が邪魔して読み取れないが、どこか慌てている
のは確かだつた。

帰宅した途端に、今まで強かつた雨脚が目に見えて弱まり始めた。
何にせよ、雨が止んでくれるならそれに越したことはない。

庭の草木に水をやる手間が一回だけ省けたと思つてしまへ。

「ただいま」

「ただいまー」

「はいはい、」苦勞様

エプロンをかけた母さんがキッチンからやつてくる。

俺はカレーの材料が一式詰まつた買い物袋を母さんに預け、家の
中に上がつた。

七星もそれに続く。

「お金、ここに置いてくよ」

「ええ。……あら? 思つたより安く上がつてない? セールでも
やつてたの?」

「ああ、それは……」

答える代わりに、俺は視線を七星に移した。

「タイムサービスやつてたんで、それのおかげだと思います」

「あ、そつか。今日は木曜日だつたわね」

そこで素直に納得するといつゝとせ、母さんもあの戦場を田の当
たりにした、もしくは挑んでいのだろう。この家の女性陣は、とてもパワフルだと改めて実感をせられた。

いつもと変わらない夕食の時間が過ぎていぐ。

七星と母さんは食事よりも会話を楽しんでこなつたが、俺は会
話よりも食事を優先する。

「母さん、おかわり」

「早つ!」

隣にいる七星が驚きの声を上げる。

「喋つてばっかりのからだる。別に極端に早いわけじゃねーつて
「何言つてんのよ。会話と食事があるから困りんになるんじやない
の」

「そつか? 食いながら喋ると、かえつてマナー違反な気がする」

「食事の手を止めればいいじゃないの」

「それだと腹が減るだろ」

「はいはい、そこまでそこまで」

小さく笑いながら、母さんは俺に皿を渡す。

「そういう会話だつて、立派な団らんよ。一人とも、気付いてる?」

言われて見ればその通りだつた。

「でも、七星の気持ちも分かるけどね」

「さつすが明美さん。分かった、隼人? 食うだけが脳じやないのよ」

「……すごい言われようだな、おい……」

そんな俺と七星のやり取りを見て、母さんはどこか本当に嬉しそうに笑みをこぼした。

「そつか……もづ、十年になるんだね。この三人が家族になつてから

その言葉に、俺も七星も食事の手を休めた。

「いつの間にか、こうしてるのが当たり前になつてたもんね。振り返つてみれば、本当に色々なことがあつたけど……」

「何だよ母さん。いきなりわ……」

「あら? おかしい?」

「いや、そんなことはないけどさ」

俺はグラスの水を一口含む。

隣の七星は、どこか真剣な表情で母さんの話に耳を傾けていた。

「十年、か……あつといつ間でした。少なくとも、私にとつては七星が口を開く。

「どこか嬉しそうに、楽しそうに。」

「元はといえば、全部私のわがままから始まつたんですね」

「力チャリ、と。」

スプーンが皿の上に置かれる。

「私が一人になつたとき、本当なら親戚に引き取られるはずだつた。それを私が無理言つて、そうしたら、明美さんが私を引き取つて

「……ええ、そうね。そんなこともあつたわ」

母さんはゆっくりと田を開じ、開く。

「それが今から十年前、か……本当に、月日が経つのは早いものね」

「ホント、そうですよね……」

「衝突もあつたし、すれ違いもあつた。でも、今となつてはいい思い出ね。一人目の子供が、意外な形で授けられたんだもの」

その言葉に、七星は微かに頬を赤らめて笑つた。

「でもまあ……」

そこで母さんは一度言葉を区切り、なぜか俺に視線を向け直して続けた。

「七星がこの家にいたって言った本当の理由は、別にあるんだろうけれど……ね？」

最後にまた、視線を七星に戻す。

俺は母さんの視線に倣つて、隣の七星に視線を移した。するとなぜか、七星はさつき以上に頬を……いや、顔全体を真つ赤にして固まつていた。

「な、な、な、何言い出すんですか明美さん！ わ、わ、わ、私は別に隼人が……」

「あら？ 私、隼人がどうこうなんて言ったかしら？」

「あ、う、それは、その……」

「…………」

「おいおい……」

俺は今聞こえないフリをしているけど、当然会話は筒抜けだ。その、なんだ。

なんだかとんでもなく恥ずかしくなるような会話をしてないか、この一人……。

「……ごちそうさん。俺、先に風呂入つてくるわ」

「こには逃げの一手だ。

」の様子じや、母さん悪ふざけの矛先が俺に向くのも時間の問題

だろうし。

「ちょ、ちょっと待ちなさい隼人！ アンタ、絶対に誤解してるから！」

誤解するような会話じゃなかつただろうと、内心で呟いて立ち去る。

「こ、こら！ 待て、バカ隼人！」

七星の罵声も母さんの笑い声も無視して、俺は階段を上がる。
ああ、もう。
うるせえな……。
恥ずかしいのは、お前だけじゃないんだよ。

湯船の中の体から疲れが抜けていく。

「ふう……」

一日……いや、具体的に言えばまだ半日も経っていないが、やはり一日の締めくくりは風呂に限る。

時々、自分の精神年齢が異常なほどに老化しているんじゃないのかと思つてしまふときがある。

だがそんな雑念も、湯船の中で足を伸ばしていれば気にもなりはしない。

大して疲れなど溜まつてもいなはずなのに、湯船に浸かつた体はなかなか強情だった。

体も髪も洗い終わり、少しお湯に浸かつてすぐに出るはずだったのに、いつの間にかリラックスしてしまっている。

そもそも俺が風呂にやつってきたのは、あの食卓での恥ずかしい会話から逃れるためだけのことであつて、入浴が目的ではなかつた。

普段、風呂に入るときも俺は最後に入るようにしている。

これは別にそういう理由らしい理由があるわけじゃないが、言つなればアクシデントの事前対策とも言つべきか……。

早い話が、一つ屋根の下で年頃の男女が生活を共にするというのは色々な意味で危ない。

まあ、この家の場合は母さんがいてくれるから問題はないんだけど。

今でこそ俺達三人の生活は当たり前になっているが、それはこの生活の始まりが今から十年も過去のことだからだ。

当時は俺も七星もまだ七歳。

当然年頃でもなんでもないし、その時点ではただの幼馴染の延長

上のものでしかなかつた。

が、十年も経てば話は別だ。

七星はどうか知らないが、少なくとも俺はそう思つてゐる。

十七歳といつ年齢は子供でもなく、かといつて大人でもない。

ようするに中途半端なわけだが、それでも大人に向かつて進んで

いる途中だと俺は思つてゐる。

「この年齢になれば、一つ屋根の下で生活を共にするといつことが
どういう意味を持つのか嫌でも理解させられる。

それは決して嫌悪感を抱くようなものじゃないけど、俺だつて間
違ひを犯さないようといくらか慎重にもなる。

形は家族といつても、俺と七星に血の繋がりはない。

そんな因果関係が拍車をかけたといつわけじゃないが、俺は時々、
七星を異性として意識してゐることがあるんだと思う。

もちろん、全部に自覚症状があるわけじゃないけど。

もしかしたら七星も、そういうことがあるのかもしれない。

今まで当たり前のように共に生活をしてきたから、それを意識
しなかつただけで。

「……つて、何考えてんだよ俺は……」

「こりが風呂場だといつことを差し引いても、俺の体温はわずかば
かり上昇しそぎだ。

さつさと上がつて、湯冷めしないつちに着替えてしまおう。

最後に軽く顔を洗う。

よし、さつぱりした。

「隼人、いる?」

湯船から出よつと浴槽の底に手をついたとき、洗面所から母さん
の声が聞こえた。

「うん、いるけど?」

曇りガラスの向こいに、母さんが何かを腕に抱えているようなシ
ルエットが見えた。

「いつも使つてるタオルがまだ乾いてないから、代わりのを洗濯機の上に置いておくわね」

「ん、分かった。ちょうど上がるところだつたから」

「そつは言いながらも、母さんがそこでいるんじゅ出で出れないじやないか。」

「親子とはいえ、見られたくないものがある。」

「仕方なく俺は、もう一度湯船の中に体を預けん」といふ。

「ねえ、隼人」

「ん、何?」

風呂場といつ密閉空間にいるせうだらうか、俺の言葉は浴室の壁に反響して大きく耳に届く。

「さつきの話の続きをなんだけど」

「……うん」

正直、やめてくれと言いつこうになつた。

母さん、その我が子をいじるクセは直した方がいいと思つ。しかし母さんの言葉は、俺にとつて予想外のものだつた。

「……まだ、悪い夢を見るときがあるの?」

「その問いに。」

「……」

俺は、言葉を失つた。

視線が虚ろになる。

目の前にあるのは、体温よりも少し暖かいただのお湯なの。に。

揺れるその、水面が。

いつしか轟々と、渦を巻いて。ゆうり、と、歪んで。

視界が霞む。

目の前の色といつ色が、黒く塗り潰されていく。

黒く、黒く、どこまでも黒く。

呼吸さえ忘れて、その色に視線は釘付けになる。

やがてその黒色の液体が、わずかに光に映える。

黒が薄れて、新しい色が現れる。

それは。

赤く、赤く、どこまでも赤く。

深紅と呼ぶに相応しいその色合いは、まるで生きていのようになっていた。

脳裏を掠めるイメージ。

一瞬だけ、心臓が破裂しそうなほど高い鼓動を鳴らす。

ドクン。

体が熱い。

体温が上昇しているわけじゃない。

お湯の温度が上昇しているわけでもない。

熱いのは、周囲。

もう一つの真紅。

猛る炎が、いつの間にか周囲を焼きながら迫っていた。

「…………隼人、隼人、どうしたの？」

「…………！」

その声に、俺は意識を取り戻す。

「え…………何、母さん？」

「何つて…………何度も呼んでも返事がないから、てっきりのぼせちゃつたのかと思つたわよ」

「あ、ああ…………ごめん。大丈夫だから…………」

「そう？…………ならいいんだけど…………」

母さんにはそう返したが、正直大丈夫ではないかもしれない。すっかり抜けきったはずの疲労が押し寄せるように逆流し、俺の体は鉛のように重かつた。

呼吸もどこか荒く、体内の酸素が著しく減っている。

心臓は何かに驚いたように活性化し、慟哭のような鼓動を繰り返す。

湯船の中だといふのに、正体不明の寒氣を感じた。

にもかかわらず、触れた額は焼けるような熱を持つていた。

「ごめんね。母さん、余計なことを聞いたわ……」

「……いや、大丈夫だから。気にしないで」

「……ええ」

それだけ言うと、母さんのシルエットは洗面所から消えた。スリッパが床を叩く足音が、廊下の向こう側に遠ざかっていく。俺の中の正体不明の熱と疲労は、未だに体内でくすぶっている。

……正体、不明？

おいおい、笑わせるなよ。

誰かが耳元で囁いた。

心当たりなんて、一つしかないだろう？

幻聴にしては、やけに痛いところを突いてくる。

俺はもう一度顔を洗つて、重い体を浴槽の外に引き上げた。

雨は上がつていた。

縁側に座り、俺は夜といふにはまだどこか明るい夏空を見上げている。

ところどころにまだ厚い雲が浮かんではいるが、紺色の澄み渡る空にはいくつかの星が姿を覗かせている。

水溜りの残る庭の上を吹きぬける風が、火照つた体に心地よい涼風を送つてくれる。

これでズズムシの泣き声でも聴こえてくればかなり風流なのだが、あいにくとこの住宅街にそれを望むのは難しい。

「……」

方膝を抱えるようにして座つていた俺は、軽いめまいを覚える。

風呂上りからずつとこつして夜風に当たつて休んでいるわけだが、なかなか体の重苦しさはなくならない。

風呂場のときに比べれば、それでもすいぶんとマシになつたのだが。

「……つ、ダルイな……」

スポーツドリンクを一口含む。

のどは一時的に冷たさで潤されるが、胸の辺りでは未だに熱がくすぶつていた。

その熱が時折、言葉にはできないほどの猛烈な吐き気を促す。とはいっても、それは普通の嘔吐感のようなものとは全くの別物だ。

まるで胃の中の胃液や臓器、血管から血液までのそれをぐちやぐちやにかき混ぜられているような。

腹の中に自分以外の何者かの手があつて、それがあらゆるものを持つりつぶして回るような、そんな悪寒じみた感覚。

「……つー！」

めまいと吐き気が同時に起る。

俺は背中を壁に預けて、片手で頭を、もう片手で胸を驚撃みにする。

皮膚に爪が食い込む痛みも気にならず、ただ不快感だけを搔き鬯るようつに指先が軋む。

「う、あ……つー！」

たまらずに悲鳴が漏れる。

そのまま苦悶の時間が流れる。

数字にすれば、それはたつた十秒足らずの出来事。

「はつ、は……あ、はあ……」

呼吸が荒い。

消えかけた体内の熱が、再び沸騰したお湯のように上昇していた。その代わりに、押さえつけている頭と胸からは痛みは消えていた。これほどの熱さを体は持つていて、流れた汗は驚くほどに少なかつた。

額の汗を袖口で拭おうと、腕を上げる。

「痛つ！ な、何だ？」

持ち上げた左腕、いや、その先。

ちょうど左肩の辺りから、鋭い痛みが走った。

衣服の下に隠れて、その部分は地肌を晒していない。

だが、分かる。

その下には、大きくも小さくもない傷跡が一つ、今も消えることなく残っている。

痛み出したのは今日に始まつたことじゃない。

今までにも何回も、何の前触れもなく突然痛み出したことがある。

それは、十年前のあの日に負つた傷。

俺が今まで生きてきた十七年という短い人生の中で、恐らくもつとも大きな罪を犯した日。

傷口はとっくに塞がっている。

ただ、傷跡だけが戒めの刻印のように未だに消えない。

その傷跡が疼くように、時折こうして鋭い痛みを告げるのだ。まるで、俺に語りかけるように。

囁くように、一言。

人殺し。

と。

「ふー、さつぱりしたー」

そんな声に横を振り返ると、そこにはじょじょに風呂上がりの七星の姿があった。

体からはまだ微かに湯気が立ち上り、頬も紅潮している。

いつもならそんな姿を見れば、俺は少なからず目のやり場に困つていただろう。

だけどこのときは、まだ少し頭の中が混乱していたのかもしれない。

気がつけば俺は、口を開いていた。

「……なあ、七星

「ん？ 何、隼人？」

「お前、さ。覚えてるか？」

「何を？」

「その……」

言いかけて、俺は言葉に急ブレーキをかけた。

傷跡の残る、しかしもう痛みのない左肩を右手で押さえ、沸き上がつてくる言葉を必死で呑み込んだ。

「……隼人？」

俺の様子がおかしいのに気付いて、七星が一步俺に寄る。

「……悪い。やっぱ、なんでもない」

「……変なの」

そう言つと七星は、手にしていたアイスティーを一口含み、リビングに戻つていった。

「……バカか、俺は。

よりによつて七星にそんなことを口にして、どうなるつていうんだ。

あの出来事を掘り返されて一番辛いのは、七星だつて分かってる

だろう。

それなのに、俺は……。

「……」

疲れているのかもしれない。

こんな風に連日、あの日のことで苛まれるなんてのは今までなかつた。

そうだ、疲れているんだ。

そう自分に思わせることでしか、今の俺は平静を保つことができなかつた。

一日が終わる。

どうして今頃になつて、あの頃の夢を見るよつになつたんだろう。
終わりが見えない悪夢に、俺は今夜も苛まれるのだろうか。

一人で眠る夜を不安に思うことも、今までにはなかつたはずなのに。

「…………」

考えたところで答えは見つからない。

明日になつたら、何もかもを忘れ去つてしまいたい。

そう、願わざにはいられなかつた。

助けてと、呼ぶ声がした。

だけど、体が動かない。

痛みという感覚だけが、唯一俺の視界をクリアにしていた。
悪魔の手は、容赦なく、ためらいもなく振り下ろされる。

助けなくちゃいけない。

痛みに歪む視界の先。

助けなくちゃいけない。

誰かの泣き声が聞こえてた。

助けなくちゃいけない。

分かつてる。

分かつてゐるのに、どうしてこの体は動かないんだろう。

分かつてた。

俺なんかじや、ヒーローにはなれないことなんて。
ずっとずっと前に、分かつてしたことなんだ。

今朝に限つて目覚めは早かつた。

相変わらず部屋の中が薄暗いのは、電気が消えてカーテンも締め切つているせいだが、それにしたつてやけに静かだった。

起き上がってカーテンを開けることで、俺の中のその疑問は解消された。

外はまだ微かに明るい程度で、ようやく朝陽が東の空に浮かび上がつたところだった。

すずめの鳴き声を耳にするのもどこか懐かしく、空気に紛れてうつすらと白い靄が漂っていた。

そもそものはず、何しろ時刻はまだ朝の六時半にもなつていない早朝だ。

こんな時間に活動しているのは、ジョギングとラジオ体操に出かける人々くらいのものだろう。

起きたばかりでぼやけた目には、朝の日差しも毒物だ。

早すぎる目覚めにまどろみを殺しながら、俺はとりあえず顔を洗うべく、部屋をあとにした。

洗面所で顔を洗う。

キッチンに明かりはついていたが、そこに母さんの姿は見えなかつた。

調理途中の朝食がテーブルに並んでいたので、そのときはまたま席を外していたのだろう。

タオルで顔を拭く。

自分で言うのもなんだが、驚くほどに目覚めは爽快だった。

昨夜までの体の重さもだるさも、今はウソのよつて吹き飛んでしまっている。

ただ一つ文句があるとすれば、一体何が悲しくてこんな早朝に田を覚ましてしまったのかとこゝりとだつた。

繰り返すようだが、こんな早朝に田が覚めてもやめことなど何一つない。

限られた一日の時間をムダに使おうとは思わないが、それにしたつて少々度が過ぎてゐる。俺にはラジオ体操の日課もなければ、ジョギングの習慣もない。夏休みとはいへ、ただでさえすることが少ない平日。できることならもう少し、ベッドの中で惰眠を貪つていたかった。しかしまあ、顔まで洗つて吹き飛ばした眠気はもうやつてこない。普段学校のある日だって、こんな早くに田が覚める」とはないのだから。

「ま、仕方ないか……」

なにはともあれ、これからまだ一度寝に挑むところのものがバカラしい。

眠気がないとこゝりとせ、寝起きしつかりと撲つたところのだから。

あとは、そうだな……。

のんびりと朝食を食べながら、今日の予定を考えるといつてよ。

「わあーーー！」

と、コビングでしゃべるなつ、身をよは思わず一歩飛び退くようにして声を上げた。

「……何してんの？」

俺は奇怪な姿勢のままじばじば固まる肉を横田、コビングのソファに座つた。

「あー、ベックした。朝っぱらから心臓に悪こわ……」

「……」

朝っぱらから「いらっしゃったよ」だ。

「そんなに驚くほどのもんかな？」

引き続き朝食の準備を続ける母さんの背中に、俺は問いかけた。

「そりやねえ」

と、母さんはどこか楽しそうな声で背を向けたまま続ける。

「休みの日は必ずと言つていいほど毎まで寝てる隼人が、まさかこんな時間に起き出してくるなんて。雪でも降らなきやいいけど」
真夏に雪が降るわけないだろうと、俺は内心で母さんに突っ込みを入れておく。

それでもまあ、槍が降るよりは大分マシなんだだろうけど。

俺は無造作にリモコンのスイッチを入れた。

電子音が鳴り、ブラウン管の画面に映像が映し出される。

早朝のこの時間じや、さすがに放送しているのはどこかのチャンネルもニュース番組ばかりだ。

チャンネルを切り替えるのもムダなので、とりあえずは天気予報に耳を傾ける。

本日は全国的に晴れ、夕方まで熱くなる日々が続くとのことだ。
佐倉町のある地域にも、でかでかと快晴マークの太陽が表示されている。

最高気温は二十九度、最低気温は二十度。

快晴どころは、蒸し暑い一日というのが正しい表現の気がする。

「それで、どうかしたの？」

ふいに母さんのそんな声が聞こえた。

「……何が？」

一瞬だけ迷つたが、今リビングにいるのは俺だけだ。

ということは、その言葉は俺に対して投げられたものなのだろう。
「こんな朝早くに起きてくるなんて」

「おかしい？」

「んーん、おかしくはないけど……」

フライパンを持ったまま、母さんが向き直る。

野菜炒めを皿の上に盛り付けながら、齒くよりに言つて。

「……何か、悪い夢でも見たのかなって思つて

「……」

悪い夢。

俺の中でそれに該当することと言えば、たつた一つだけだつた。だけどその悪夢にうなされ続けていたのも、今はもう昔のことだ。今ではそんなことはないに等しくなつてゐる。

至つて平和なものだ。

「別に、そんなんじやないよ。ただ、何となく皿が覚めただけで……」

「……そう」

力タン、と。

出来上がりばかりの野菜炒めが盛られた皿が、テーブルの上に置かれた。

「……あのね、隼人」

「ん……」

母さんのその声は、どこか悲しげに聞こえた。

言おうか言つまいか、ひどく悩むように、一拍の間が流れた。

「あなたはあの日の出来事を今も引きずつて、負い目に感じていることがあるのかもしれない。だけどね、これだけははつきりと言える

「る

一瞬だけ、言葉が途切れる。

深呼吸をするような間。

続けて、母さんは言葉を吐き出した。

「あなたがどう思おうと、あの瞬間。間違いなくあなたは、七星にとつてのたつた……」

しかしそこに続く言葉は、俺の耳に届くことはなかつた。

「おはよー……」

そんな、いかにも朝に弱いアイツの声が聞こえてきたからだ。

「…………」

「…………」

母さんは俺と七星を交互に見やり、俺は母さんと七星を交互に見やつた。

「……あれ？」

と、七星はそんな間の抜けた声を上げた。

「つー、うわ！ 隼人が起きてる。珍しい……」

などと、まるで珍獣扱いの一言を頂戴する羽目になつた。

しかし、俺も母さんも返答はない。

不思議に思った七星が、俺と母さんを交互に見比べていた。

「……どうかしたの？ 一人とも……」

すると母さんは何が面白かったのか、小さく笑つて七星に向き直つた。

「ううん、なんでもないの。おはよ七星」

そして俺に皿配せをしてくる。

今のはなかつたことにしようべと。
さつきの……。

母さんのあの言葉の後に、どんな言葉が続いたのか。
俺には見当もつかなかつた。

だけど、母さんが会話を中断した理由はすぐに分かつた。

母さんは七星の前で、あの日の話をするのが心苦しかつたんだろう。

う。

それは俺も同じことだったから、今は母さんの皿配せに小さく頷いておく。

今日という一日が、どこか賑やかに始まる。

久しぶりに三人で囲むことになる朝の食卓を、焼けたトーストの香ばしい匂いが泳いでいた。

のんびりと朝食を食べるつもりだったのだが、あまりのんびりしてると料理も冷めて食欲もなくなってしまう。

結局、矢継ぎ早に朝食を意の中に納めていくことになってしまった。

それでも今朝の食卓は会話が弾んだ方だったと思つ。

とはいっても、俺はいつもどおり母さんと七星の会話に耳を傾けていただけだ。

時折、何の前触れもなく七星が話を振るわけだが、基本的に俺は相槌を打つくらいのことしかしない。

それでも大体は、七星がしつこく絡んでくるわけで、端から見ればそれも会話として成立しているように見えるのだろう。

しかしその実態は、俺がいいように言われているだけである。もちろん俺だってずっと黙つてばかりいるわけではないけど、七星のテンションに比べればずいぶんと大人しい。

「イツ、寝起きはメチャクチャに弱いくせにどこからこんなに喋る気力が溢れてくるんだろう。

まあ、考えるだけムダなんだよな。

コーヒーをすすりながらテレビの画面に目を向ける。

画面の中は報道特集の連続だった。

とりわけ面白いとも思えないし興味もないの、俺はコーヒーを味わうこと集中していた。

とはいって、インスタントのコーヒーにそこまで味を追求できるわけもない。

淹れ方は大分自己流になつてきたが、味に大差があるのかというとそこまでのものでもなかつたり。

そんな風にコーヒーをすすりながら、朝の時間は緩やかに流れていいく。

れて、どうしたものだらう。

まずは今日の予定を立てるつもりだったのだが……。

改めて思つても、やはりこれとこつて特にする」と、したことに

は思ひ当たらない。

一昨日のように散歩がてらの買い物に出かけるとこつ手もあるが、そこまで財布に余裕がわるわけでもない。

こつそのことバイトでも始めるといつ手もある。

が、残りわずかとなつた夏休みではあまり期待はできなこ。

新学期が始まれば学校の方もそれなりに忙しくなるだらうし、バイトとの両立は難しいかもしだれなこ。

夏休みの期間だけのバイトをするのなら、もつと早くに計画を立てておくべきだつた。

さてさて、どうしたものだらうか……。

最後の一口を飲み干して、俺は溜め息をついた。

その横では、七星がのんびりと週刊誌のページに手を落としていた。

なんだかんだで「イツも結構暇そなのこ、今日は何をしそうとか考へないのだらうか。

その辺は呑氣といつかマイペースといつか、まあ七星の場合はお氣楽といつ言葉が一番似合ひ氣もするけれど。

俺はソファから立ち上がり、空のカップを持つてキッチンに向かう。

ちょうど洗い物をしてゐる母さんの隣に立ち、カップの中を水ですすいだ。

「あ、どうぞ」

と、思い出したよつて母さんは口を開いた。

隣にいる俺もソファに座つてゐる七星も、同時に母さんの方を向いた。

「一人とも、今日は何か予定とかあるの？」

洗い物に手を動かしながら、母さんは尋ねた。

「いや、俺は特に何も」

「私も、特にね」

揃いも揃つて暇人だつたようだ。

「じゃあ、よかつたらひょっと手伝つてほしことがあるんだけど？」

どうだらうかと、母さんは俺達に聞く。

どうこういつも、まずはその手伝いの内訳をせりを聞かせてもらわ
ない限りは……。

俺は七星に向ける。

七星も同じ意見なのか、俺と田を合わせた直後、再び母さんに視
線を戻した。

「手伝ひって、なんの？」

蛇口を止める。

母さんは濡れた手をタオルで拭きながら、七星の方を振り返つて
言った。

時刻は昼の十一時。

俺は手に鉄パイプを抱え、炎天下のうだるような暑さの中、長い石段を上っていた。

「何で、俺が、こんな、目……」

すでに何往復目か忘れるくらいに行き来している石段。

その長さもあることながら、バカみたいな傾斜がいつも体力を奪っていく。

額から滲み、頬を伝う汗はポタポタと地面に黒い斑点を作っていく。

首にかけたタオルで汗を拭い、俺は体力を振り絞つて石段の頂上を目指した。

「つい、たあ……」

全身で息を切らしながら、俺はようやく石段を上りきる。

覚えているだけで、これで石段を七往復はしたはずだ。

さすがに体力も底を突き、手に抱えている鉄パイプも今は体を支える杖の代わりになっている。

体力にはそれなりの自信があったのだが、この炎天下が必要以上に水分と体力を奪っていくのだ。

俺は手にした鉄パイプを地面に転がすと、力なく近くの木陰に座り込んだ。

そろそろ休憩をしておかないとい、今度こそ石段を真っ逆さまに転がり落ちかねない。

「はあ……」

ぐつたりと肩をうなだれる。

やはり安請け合いすべきではなかつたかもしけないと、内心で後悔じみた感情が沸き上がる。

夏祭りの準備を手伝ってほしいと、母さんは俺と七星に頼み込んだのだ。

佐倉町では毎年夏祭りが行われている。

今年もその時期が迫った、というか目前に控えていたのだ。

佐倉町の夏祭りは一風変わつており、全行程が二日間の構成で行われる。

その前夜祭が明日の土曜の夕方から始まり、当田祭が田曜の午後から開かれる。

言われて思い出したが、確かに今年ももうそんな時期を迎えていた。

そういえばこの前、母さんが朝早くから町内会の集まりに出かけたけど、それも夏祭りに関する集まりだったのだろう。

さて、そんな相談を受けた俺と七星だが。

はつきり言つてしまえば、断る理由などはなかつた。

結局俺も、今日の予定を何一つとして立てられていなかつたわけだ。

それだったら何でもいいから目的を持つて行動するほうがいいだろうと、俺は母さんの提案を受け入れたのだ。

一方七星も、断る理由がないので承諾した。

で、その結果がこれだ。

俺が今休んでいる木陰のある場所は、神社の境内の一角だ。

佐倉町の神社だから佐倉神社。

なんのひねりもないそのままのネーミングの神社である。

そして俺がさつきから幾度にも渡つて運んできた鉄パイプ。

決してこれは、ガラの悪いお兄さん達が河川敷で血に飢えながら振り回すような物騒なものではない。

これは神社の境内に開かれる夜店の屋台、その骨組みとなるパーティの一つだ。

何しろ場所が場所だ。

神社というだけあって、立地場所は小高い山の中腹になっている。石段前まではトラックで一気に運んでこれるのだが、さすがにトラックに石段を走らせるわけにはいかない。

いや、そんなアクロバティックなことができるのならそれはそれで見てみたい気もするのだが。

とまあ、そういうわけで。

地上から境内まではさすがに人の力で運ぶことになるわけだ。そこで俺は、男＝力仕事というあんまりな社会公式でこの仕事を手伝っている。

しかし周りを見れば、そこはいかにも力自慢の漢が粒揃いだった。それもそのはずだ。

なぜならそのおじ様方の大半は、常日頃を海の漢として生きるサバイバー達なのだから。

生死の狭間の極限で闘つ彼らにとつて、陸の上など恐れるものは何もない。

鍛え抜かれた筋肉と、漢達の目には見えない魂という団結力。想像することつちが怖くなりそうだが、こと力仕事に関してはこれ以上の存在はない。

だからといって、そんな中に一般高校生の俺が混じつても大した効果はないわけで。

「……無理。基本の体力が違すぎる……」

作業開始から一時間。

俺はあえなく、一度目のダウントを奪われてしまった。

境内の中央の通路を挟むようにして、夜店の屋台は向き合つて開かれる。

その数はおよそ二十ほど。

しかもここだけではなく、石段の下の地上にも多くの屋台が開かれるという話だ。

年に一度の祭りは、小規模ながらも盛大に行われる。

明日の夕方になれば、この辺りは多くの家族連れや子連れの姿で賑わいを見せるだろう。

そんな風に思いながら体を休めていると、突然首筋に冷たいもの

を感じ取った。

「うわっ！」

驚いた俺は中途半端に立ち上がるよつにして、その場から飛び退いた。

そしてすぐに向き直る。

「……って、お前」

「おー、やつぱり隼人だつたか！」

意外な人物が、そこにいた。

「健二、何でお前がここにいるんだ？」

今俺の目の前にいる人物は、高校の同級生でクラスメートの西久保健二^{にしく ほけんじ}の姿だつた。

「何でつて、お前、そりやこっちのセリフだつてーの」

そう言つて健二は俺の隣に腰を下ろした。

その手にはスポーツドリンクの缶が握られ、健二は一つあるうちの一つを俺に差し出した。

「ほれ」

「くれるのか？」

「ああ、差し入れ。つてか、向こうでみんなに配つてるんだけどな」

そう言つて健二は神社の社の方を指差した。

確かに底では、おばさん達が飲み物を配つてゐる姿が見える。

「でもまさか、こんなとこでお前に会つとはな」

「それこそこっちのセリフだ。お前、夏休みは帰郷してるんじゃなかつたのか？」

「おう。それで昨日の夜帰つてきたんだよ。なのに、今朝起きたらいきなり祭りの準備手伝え、だぜ？ ヒデーよなあ」

健二はどこか大げさに自分の不幸をアピールした。

俺はその様子に笑いながら、健一からもらったスポーツドリンクの蓋を開ける。

「で、どうして隼人はこんなことしてんだよ？」

「ん？　お前と似たようなもんだよ。母さんに手伝ってくれって言われて、特にすることなかつたから引き受けた」

「ふむ。で、どうよ実際？　働いてみた感想は？」

「……ちょっと、後悔してる」

「……だよな」

などと話しながら、俺と健一は笑い合つた。

その後も休み中のことなどを適当に話しながら、俺達は火照った体を休ませた。

「さて、と」

「言つて、健一は立ち上がつた。

「んじや、俺はそろそろ行くわ」

「ん？　帰るのか？」

「逆だよ逆。どうこいつわけか、ウチの親が夏祭りの実行委員だからさ。もうちょっと働かないと、あとで何を言われるやひ

「なるほどな」

「隼人はどうすんだ？」

「そうだな……」

少し考えて、俺は立ち上がる。

「まあ、お前一人じや可哀想だから、俺ももう少し手伝つていくよ」

「お、さつすが隼人。俺が見込んだだけのことはある

いつ、お前が俺を見込んだんだ。

という突つ込みは、この際あれなので黙つておくことこじよつ。

「んじや、またあとでな。昼飯も出るうらしいから、そのとき一緒に

食おうぜ」

「ああ、別に構わないぞ」

「んじやな」

軽く手を上げて、健一は石段を駆け下りていった。
さじと。

俺も負けてはいられないな。
もう一仕事してやるか。

……まあ、倒れない程度に。

太陽が真上に差し掛かる頃、俺は通算で十三回目になる階段の往復を終えたところだつた。
いい加減に鉄パイプを抱える腕も、それを支える肩も痛くなつてきた。

グレーのシャツは汗を吸い取つて黒く変色してしまい、中途半端に乾いてどこか着心地が悪い。

ともかくにも、これでようやく一区切りがついた。

午前中の作業で、大体の骨組みとなるパーツは運び終えることができた。

もつとも、俺が運んだものなんてそれこそ数えるほどだつたが、それでも達成感はあつた。

作業に区切りをつけた大人達も、休憩のために物陰などで休んでいる。

さて、俺も一休みしたいのだが、先に約束した健一の姿がまだ見当たらない。

まだどこかで作業をしているのだろうか。

俺は木陰から立ち上がり、一度下の様子を見てくることにした。パツと見たところ、境内の中には健一の姿は見当たらない。

仮にすれ違うとしても、俺が石段を下ればお互いに気付くだろ？
と、俺が石段を下るのとしたそのときだつた。

「お、いたい！」

案の定、健一はちようど石段を上り終えてやつてきたところだつ

た。

「ちゅうじよかつた。俺も健一を探してたどこだ」「そつか。まあ、すれ違いにいならなくてよかつた。んじや、昼飯食いに行こうぜ」

「それはいいけど、どこで食べるんだよ?」

「ああ、下のほうに休憩用のテントがあるんだよ。あと、集会所が解放されてるからそつちでもいい」

「何にしても、下りないとけないってことか

「そうゆうこと」

健一と並び、長い石段を下る。

さすがに何度も石段を往復したこと也有って、足の筋肉は特に張つてきているようだつた。

早いところ涼しい場所で昼食にありつきたいところである。

俺と健一は真つ直ぐに集会所に向かつた。

なんだかんだで、やはり屋内の方が冷房が効いているだろうと思つたからだ。

集会所の扉は全開にされ、玄関口には多くの靴が脱ぎ捨てられている。

中からはガヤガヤと話し声も聞こえ、結構な人数が集まつてているようだつた。

俺と健一も靴を脱ぎ捨て、集会所の中へ入る。

「ああ、こつちだ隼人。場所はもう取つてある」

真つ直ぐに多目的ホールへ向かおうとした俺を、健一がそつとつて呼び止めた。

健一が指差す先は小さな和室があるほうだ。

確かにそつちも休憩場所として使われているようだが、場所を取つてあるとはどつこつだう。

疑問に思つたが、こつこは素直に健一の言葉に従つておくとしよう。何にしても、まずは腰を据えて休み、空腹を満たすことが最重要

だ。

和室の扉をくぐる。

すでに多くの人が集まり、各自に昼食と談笑が交わされている。

「あ、やっと来た」

と、そんな声がしたのは部屋の隅の方からだつた。
声がした方を向き直つてみると、そこには七星の姿があつた。
それともう一人、これまた意外な形でクラスメートに出会いついと
になる。

「行こうぜ、隼人」

「え？ ああ……」

促され、俺は健二の後について一人のいる場所に向かう。

「遅いぞ健二」。それと、来栖君は久しぶり。元気だつた？
「まあ、元気といえばそれなりにはな。瀬口は相変わらずだな」
「まあ、それが取り得みたいなもんだしな」
「ちょっと健二、それどういう意味？」
「想像にお任せしますよ」

などと、早くも談笑が始まる。

今こうして健二と喋っている彼女も、健二同様に俺のクラスメー
トだ。

名前は瀬口葵。せぐち あおい

健二とはいわゆる腐れ縁とのことだ。
「はい」

と、すぐ隣にいる七星からカップが差し出される。

「ん、サンキュー」

カップの中身はよく冷えた麦茶だった。

水分を失っている体としては、補給できる冷たい水分ならなんでも歓迎だ。

一気に飲み干して、俺はようやく一息をつく。

「隼人、結構汗かいたみたいだね」

「ん？ ああ、そりゃあな。あんな長い石段を十往復以上もすれば、そりゃ汗だくになるつて」
「だよなあ。つたく、若いからつていいよつて使われるのも問題だよな」

「全くだ」

同じ苦労を共にしているので、俺と健一の意見は合致する。
その会話が見た目異常に年寄り臭くて、結局四人揃つて笑い合つているわけだけど。

「ま、何にせよお疲れ様男性諸君。お喋りもこれくらいにして、まずは腹ごしらえといきましょうか」

言つて、瀬口が人数分の弁当を手渡してくる。

弁当といつても、こういう席ではおなじみのおにぎりだ。
不思議と、それがかえつて食欲を誘つ。

俺達四人は輪になるよつに座り、各自に食事を開始した。

黙々と食事が続くと思ったが、そこは話し好きの瀬口がいい具合に会話をリードしていく。

「ウソ！ 来栖君も七星も、もう夏休みの課題終わっちゃったの？」
「まあ、一応やるだけなら全部やつた。つつても、他にすることなくて暇な時間が多かつたからだけなんだけど」
「いいないないな。結果論でも、終わりよければ全てよしじゃん」
何か言葉の使い方がズレているような気もするが、ここはあえてスルーだ。

「葵はまだ終わつてないの？」

「んー、私も大体は片付いてるんだけどね。世界史のレポートが面倒で、まだあんまり手をつけてないんだよねー」

世界史、か。

俺もやり終えた身分として、その面倒さはよく分かつていい。

「確かに、あれは結構面倒だよな」

「そうだね。あらかじめテーマが『えらばれれば、もう少し楽だつたとは思うけど』

「だよねー。つたく、半沢のヤツ、妙なところで回りくどいんだから」

半沢というのは、俺達の通う高校の一年の社会化担当の教師の名前だ。

別に嫌われているわけではないのだが、妙なところで回りくどいという瀬口の言い分は大体当たっている。

「それで、二人はテーマ何にした?」

「私達は産業革命にしたよ」

七星の言葉に俺は頷く。

「第一次世界大戦とかにしようとも思つたんだけど、戦争だとやらうと人物の名前が多いだろ?だからこっちにした」

「なるほど。それに、二人で共同でやれば作業量も減るもんね」

「そういうこと」

「んー、だとすると、私は産業革命じゃないものにしたほうがいいよねー……」

「別にかぶつても問題ないとは思うぞ? そもそもテーマも自分で決めるって言われるんだし、そりゃ少なからずかぶるだろ」

「ま、それもそっか」

世界史の課題は、歴史上の出来事一つを題材にして論文のようなものを仕上げるというものだ。

簡単に言えば新聞記事をスクランプして自分なりの見解を述べる、つてどこだらうか。

まあ、この場合舞台は日本だけじゃなく世界全体で、自然とテーマも広く分かれるわけだが。

「ところで健一」

瀬口が呼ぶ。

「ん？ 何だ？」

「アンタ、さつきから話についてこないけど、もつ課題済ませちゃつてるわけ？」

俺と七星の視線も健一に向く。

「おいおい、そんなの決まつてんだろ？」

と、健一が意外にも余裕の笑みを見せた。

「な……まさかアンタに限つて、そんなこと……」

信じられないと言わんばかりに、瀬口は苦しそうな表情を見せる。

正直、俺も驚いた。

だが、しつかりと課題を済ませておくとは健一もやるじやないか。

と、そう思ったのも束の間で。

「そんなもの、終わつてるわけがないだらつ」

と、健一は堂々と言い放つた。

「……」

「……」

「……」

一同沈黙。

いや、まあ、そんなことじやないだらうかとは思いつつも、思わないようにしていたんだが……。

「ま、そんなこつたろうと思つたわ。健一に限つてそんなこと、ありえるはずがないもんね」

うんうんと一人納得し、瀬口はお茶をすする。

「その割には、ずいぶんと余裕があるみたいだよね、西久保君」

「ふ、当然だ。俺の辞書に不可能の文字はない」

それはきっと、お前がそのページだけを破り捨てたからだらつ。

後で確かめてみる。

不可能と一緒に、不完全の文字まで消えてるだらうから。

「その自信は一体どこから来るのよ……」

疑り深い視線で瀬口が聞く。

「もちろん、それは当然っ！」

ビシッ！と、健一はなぜか俺に向けて指を向けた。

「……アンタまさか、来栖君のそのまま写そつてんじゃないでしょうね」「うね

「イエス、オフコース！」

何で英語なんだ。

しかも、堂々と言づな。

「健一、言つておくが……」

「おお、みなまで言つた隼人！ 言わなくとも分かっている。水臭いこと言つたんだろ？ 分かってるよ、俺達親友だもん……」

「いや。写させてやらんぞ、俺は

「なつ……」

そして、健一の時間が凍りついた。

間抜けにも口をあんぐりと開けたまま、健一は信じられないといった表情で俺を見返している。

「ま、待て！ どういうことだ隼人！ 話が違うぞ！ ワツツ？

ホワイ？ ハウアーユー？

「なぜも何もあるか。そもそも、俺はそんな約束した覚えはない。それに、ハウアーユーって何だよ」

いきなりご機嫌いかがと聞かれても、どう答えていいか分からない。

「そ、そんなバカな……俺の計画が……」

「いや、どう見てもバカはアンタでしょ……」

ダメ押しの一撃だが、瀬口の言い分は正しい。

それつきり、健一はしばらく石化したように動かなかつた。

こうしてその後もしばらく、食後の談笑は賑やかに続く。

気の許せる仲間同士でこうして時間を過ごすのが、本当に久しぶりに思えた。

一時を回った頃になつて、休憩していた人々が続々と部屋をあとにするようになった。

俺達四人もそれに便乗し、一度外へ出ることにする。

外に出るなり、うだるような暑さが肌を直撃する。日中の気温はますます上昇し、地面はさながらに熱した鉄板のような熱さを帶びていふようだ。

「あーあ、また午後も石段の往復すんのかー」

健二がいかにも面倒くさそうにぼやく。

だが、俺も健二の意見には賛成だ。

ある程度は慣れてきたとはいへ、あの石段の往復はさすがに堪える。

できれば午後はもう少し楽な仕事をしたいものだ。

「でも、もうほんどのパーツは運び終わつただろ？ 屋台の組み立てなんて当口でもいいわけだし」

「だといいんだけどな。どちらにしても、力仕事ばっか任されそうだし」

なるほど、確かにその予感は正しそうだ。

「そういえば、七星達は午前中何してたんだ？」

「私達は浜辺のテントの中で作業してたよ。提灯を糸に通したり、飾り付けをしたり」

ようするに雑務といつといろだらうか。

しかしそれにしても、日陰で過ぐせるだけずいぶんと快適だとは思つ。

「げー、何だよそれ。メチャクチャ樂じやんか。こんなのは差別だ。なあ隼人？」

「何言つてんのよ。ずっと座りっぱなしで同じ作業を繰り返すのって、実は結構疲れるんだからね」

「やうやう。お尻も痛くなつてくんし……」

「つまるところ、じつちでも疲れるところなんだ。」

俺と健一は力仕事で体力を、七星と瀬口は細かい作業で集中力を、といったところか。

「まあ、なんでもいいけど。とりあえず何をすればいいか、俺は母さんに聞いてくる」

「あ、私も行く。明美さん、午前中は私達と一緒にいたから、まだわつきのテントにいると思うから」

「だったら、俺の親父も多分そこだらうな。実行委員会の人もテントにいるつて聞かされてるし」

「じゃ、みんなで行けばいいじゃない。バラバラに仕事するより、まとまってたほうが退屈しそうにならへばなるでしょ」

瀬口の意見に全員が合致し、俺達はまず浜辺付近のテントへと向かうことになった。

海岸沿いの道から階段を下り、浜辺に下りる。

熱砂と言つ言葉があるように、俺達の踏む浜辺の砂は日差しの照り返しでギラギラと輝いていた。

こんなところを素足で歩こうものなら、それこそボイル焼きのようになつてしまいそうだ。

しばらく歩くと、浜辺の一角に白いテントが見えてくる。

夏祭り期間の本部テントもあるそこは、過去に海の家として機能していたものを流用したものだ。

歩み寄る俺達の姿に気付いたのか、たまたまテントから顔を出した母さんがそれに気付いた。

「あらあら、お揃いで」

「い）無沙汰してます、おばさん」

「ども」

瀬口と健一が口々に挨拶を交わす。

「こんなにちは、葵ちゃん。それに西久保君も。午前中はお疲れ様」
一人の挨拶に、母さんも微笑んで返す。

「母さん、それで午後のこれからのことなんだけどさ、
とりあえず俺は話を切り出す。

「午後は俺達、何をすればいいのかな?」

前述の通り、屋台のパートを運ぶ仕事は午前中のついでほとんど
終わっている。

七星や瀬口にしたつて、できるなら午後もお尻の痛くなる仕事は
したくないだろう。

「んー。母さんも直接の実行委員つてわけじゃないから、詳しいこ
とはちよつとねえ……」

「こいつとは、仕事は無事終了といつことでいいのだろうか。
それならそれで、一度家に帰つてシャワーで体を洗い流してしま
いたいものだが。

「健一、お前こんなところで何やつてんだ?」

と、そんな声が俺達の耳に届いたのはそのときだった。

「げ……」

その声に、健一が一瞬だけ表情を苦くする。

声の主である男性は、テントの奥から一歩一歩歩いてくる。

その風貌には、俺も見覚えがあった。

「あ、健一のお父さん」

瀬口がそんな言葉を口にした。

俺よりももう少しだけ高い背丈に、日に焼けた黒い肌。
ガツチリとした体格は、さながら海の漢を想像させる。
地元の漁港で漁師をしている健一の父親、修吾さんがそこにいた。

「ん? おう、来栖さんとこの隼人か。また少し背が伸びたんじゃ
ないのか?」

「あ、はい。あれからもう少しだけですけど」

そうかそうかと、修吾さんは嬉しそうに笑った。

こうして会つて話すのはずいぶんと久しぶりだが、相変わらず賑やかで大らかな人だつた。

「で、お前は何やつてんだ健二？　もう飯は食つたのか？」

「昼飯？　うん、もう食い終わつた。でも、午後は何をやらされるのかと聞きに来たわけ」

なるほどなど、修吾さんは一つ頷いた。

「しかし参つたな。思いのほか手際がよかつたから、午前中だけで大体の準備は完了してんだよなあ」

「マジ？　だつたら俺達、このまま解放？　ラツキー」

健二は労働からの解放を知り、一人喜び出す。

だが。

「いや、待て。あー、しかしなあ……」

修吾さんは何を悩んでか、ウンウンと一人で唸り始める。

「どうかしたんですか、西久保さん？」

隣にいた母さんが聞く。

「いえ、一応準備そのものは終わつてるんで、帰つてもらつても構わないんですよ。ただ……」

「ただ、何です？」

瀬口が聞き返す。

その様子を、健二が視線だけで余計なことを、と言つて見ているような気がした。

「これは、ずいぶんと私的な用件でね。ここから少し先に歩いた岩場の奥に、小さな入り江があるのを知つてるかい？」

言つて、修吾さんは指を指した。

その先には確かに遠めでも分かるほどの岩場があつた。

「実は、その入り江の近くが毎年花火とかで使われてるみたいなんだが……」

「ゴミ、ですか？」

「ええ、やつなんですよ」

母さんの言葉に、修吾さんは相槌を打つ。

「あの入り江は海に直接面した流れ込んだ。そこが汚れてちゃ、海そのものにも影響が出る」

なるほど。

漁師である修吾さんとしては、海の環境といつのは生命線に繋がるものもある。

それが汚されるというのは、正直な話気分はよくないのだろう。「毎年うちらの組合でも点検には行くんですけど、今年は時間がなくてね。実際今も、祭りの準備で手が離せないときてる」

実行委員である修吾さんは、機材運搬や事務処理の手続きなど、このあとも裏方の仕事が残っているのだといふ。

「そこでだ。ぶしつけだとは思つんだが、みんなでちょっと様子を見てきてくれないか?」

「えー。マジかよ親父。大体なんで俺達なんだよ」

「アホ。お前一人で行かせるほつがよっぽど不安だろ?」

不思議と、その言葉には俺も七星も瀬戸も素直に納得して頷いてしまう。

「お前ら……」

その様子に、健一はガックリと肩を落とした。

「わーったよ。行けばいいんだろ行けば」

ブツブツと文句を言う健一だったが、結局は折れる形になる。

そんなわけで、俺達は浜辺の奥にある入り江に向かうことになつた。

岩場を迂回する道は残念だがないので、俺達は足を滑らせないよう岩場を乗り越えた。

「よつ、と……」

入り江の中に到着する。

周囲を見渡した限りでは、田立つよつな「」は散らかってはいなかつた。

ただ、ところどころに花火の残骸のようなものが残っているのも確かだ。

それが去年のものなのか、今年のものなのか、それともさらにずっと昔のもののかは分からぬ。

とりあえず俺は、目に見える範囲の「」は持つてきたペーパーバッグの中に入れていく。

「なんか、悪いなみんな」

ふと、健一がそんなことを口走った。

「な、なによいきなり。気持ち悪いわね」
真っ先に反応したのは瀬口だ。

「いや、成り行きとはいえ、付き合わせる形になつちまつたしさ」「別に、そんなこと気にすんなよ。嫌だつたら最初から付き合わな
いって」

「そうそう」

「うう。お前達の熱い友情を感じるぜ」

「つていうか、むしろアンタ一人だとえつて不安なのよね。そのまま失踪とかしそうで」

「……」

もはや健一は何も言い返さない。

口では瀬口に勝てないと、どこか諦めたようだった。

「ねえ、ところどさ。これって何？」

七星の言葉に、全員がその方向を向き直る。

七星の指差す先、そこに、ポツカリと口を開けたような空洞が覗いていた。

「これ、洞窟になつてんじやないか？」

真っ先に身を乗り出して中を覗く健一が、そんな言葉を口にする。

「へえー。こなんのがあつたなんて、私初めて知つた
俺も瀬口と同じ意見だつた。

確かに浜辺を訪れる機会なんてないに等しいが、まさかこなんと
こなんにこんなものがあつたとは。

「この洞窟、どこかに通じてんのかな？」

「どうだうな。そんなに深そつには見えないけど……」

言いながら、健一は足元の小石を洞窟の中に投げ込んだ。

カツン、カン、カン……。

そんな音を鳴らして、小石は洞窟の奥へ転がつていった。

「地下に通じてるつてわけじゃないみたいだな。多分直線だうけ
ど、意外と長いかもしない」

まあ、どちらにしても足を踏み入れるのは遠慮した方がよさそう
だ。

何もないとは思つが、何があつてからじや大変だし。

「よし。行くぞ」

「……は？」

その声に、俺は健一を見る。

「だから、行くぞ」

「行くつて、この中にか？」

「他にどこがあるんだよ？」

「……」

頭が痛くなつてきた。

そうならなにように、俺達三人がついてきたんじやなかつたっけ？

「なあ瀬口、どうする……つて」

「さあ、レツツゴー！」

「……お前もか」

もはや頭痛には慣れた。

まあ、どこかでこうなるんじやないかと思つてはいたけれど。

「どうする、隼人？」

七星が聞く。

「……どうも「いつも、あの一人を放つておいて」と思つか?」

「……だよ、ね……」

結果、一致団結……なのだろうか。

何か、何かが違うような気がしてならない……。

「で

歩き始めてわずか一分。

俺達は早速、お決まりのパターンに出くわしていくた。

「分かれ道か……」

「分かれ道ね……」

「……分かれ道だな」

「うん。分かれ道だね……」

そして、一同沈黙。

「で、どうすんだよ健二?」

「俺かよ!」

「お前が先陣切つてきたんだろ? が!」

「はいはい、洞窟内で騒がない。トラップが発動したらどうすんのよ」

「ト、トラップ……?」

「これは何かのRPGなのか?」

「とにかくだ。道が一手に分かれてるなら、俺(も)手に分かれればいいわけで」

「いや、まあ、そりやそうかもしねないが」

男同士女同士で行くわけにもいかないし、どうしたものだらう。と、俺が考えているときだつた。

「んじや、私達はこっち行くから」

「イデテテ……」

健二の耳を引っ張つて、瀬口はスタスターと左の道に向かつていつてしまつた。

「ちよ、ちよっと葵?」

「こいのこいの。」このバカは私のほうが扱いに慣れてるからや。じや、そつちはそつちでがんばってー」

「バカ、いてーつづーのー 離せー。コラ、聞いてんのか葵ー。つか聞けよー！」

そんな声が、少しずつ洞窟の奥に遠ざかっていく。

「……どつする、隼人？」

「どうするつて言われてもな……」

幸い、洞窟の中は思ったほど暗くはない。

田を凝らせば十分視界の先は見えるし、足場も安定している。

「引き返すならそれでもいいけど、健一達は先に行つてしまつたしなあ……」

反対側の道からは、まだ遠くに健一の声が聞こえるような気がした。

「まあ……行つてみるか？ 嫌ならこいにかど」

隣の七星の反応を待つ。

「……じゃ、行つてみよつか？」

「そうするか……」

あまり乗り気ではなかつたが、とりあえず俺と七星も奥へ進んでみることにした。

道なりに歩く。

薄暗さはあるが、これといって障害らしいものもなくスタスタと先に進むことができる。

「当たり前だけど、何もないな……」

「……そうだね」

瀬口がトラップなんて言葉を口にしたときは、さすがにちょっと嫌な予感がしていたんだが……。

まあ、さすがにこんな場所にゲームみたいな仕掛けがあるわけがないよな。

「あ」

ふいに七星が声を上げた。

「どうした？」

振り返ると、七星が立ち止まっている。

「ごめん、ちょっと靴紐がほどけたみたい。先に行つてて

七星は屈みこんで、靴の紐を結び直す。

俺は言われたとおり、ゆっくりと歩きながら考えた。

さつきからこうして歩いている地面は、やけに人の手が行き届いているような気がする。

少なくとも、天然の洞窟の道とは思えない。

だがしかし、入り口を見た感じではこの洞窟はどう見ても天然の

ものだ。

ということは、もとからあつた天然の空洞に、人の手が加えられたということだろうか？

だとしたらそれは、一体何のために？

「……」

などと考えたところで、答えなんて分かるはずがない。別に古代の遺跡つてわけでもあるまいし、そこまで深く考える必要もなさそうだ。

「七星、まだか？」

振り返り、名前を呼ぶ。

「あ、もうちょっと……っと」

紐を直し、七星は爪先をトントンと叩く。

「ごめん、今行く……」

と。

屈んでいた七星が、立ち上がりかけたとき。

「……？」

ふいに、俺の視界の先で何かが動いた。

それは最初、煙のように見えた。

さほど大きくもない洞窟の中、天井と地面との間に灰色の煙が見えたような気がして……。

カツン、と。

聞こえたその音に、俺の神経はいち早く反応した。

「七星！ 後ろに跳べ！」

そう叫ぶよりも早く、俺の体は反射的に動いていたのだと思つ。

「……え？」

そんな七星の声を聞きながら、俺は全力で走っていた。

ふと、七星が自分の頭上を見上げる。

そこに、砂時計の砂が落ちるような映像。

流砂の中に小石が混じり、パラパラと音を立て落ちていく。

その、もつとも奥に。

大きな黒い影が一つ、近づいてきていた。

「あ……」

それが岩の塊だと理解するよりも早く、俺は七星の体を抱えて地面の上を転がつていた。

「ぐつ……！」

背中から落下したとはいえ、衝撃で一瞬だけ呼吸が停止しそうになる。

そのまま七星を腕の中に抱えたまま何度も転がり、よつやく回転が止まつたその直後に。

ドズン……と、大きな音を立て、天井の岩肌の一部が通路の上に落下した。

「い、つてえ……」

俺はゆっくりと、地面を転がつた体を起こす。

腕を少し擦り剥いたくらいで、目立つような大怪我はしていない。背中がまだ痛いまだが、それもじきに引いていくだろ？

「お、おい、七星！」

思い出したように、俺は自分の腕の中にいる七星の名前を呼んだ。

「え……な、何？」

キヨトンとしたままの表情で、七星は答えた。

その様子だと、ケガらしいケガはしていないようだ。

ホッと、俺は緊張の糸を緩めた。

「何、今……」

七星はまだ状況が飲み込めていない様子だった。

「多分、落盤だらうな。あの部分だけ、岩肌が脆くなつてたんだと思つ」

先ほどまで七星が靴紐を直していた地面の上には、崩れ落ちた岩が真つ一つに割れて転がつていた。

大きさこそそんなにでもないが、あれが人間の頭を直撃したら大変なことになつているだろ？

たんこぶ程度で済まないのだけは確實だ。

「そ、そうだ。隼人、大丈夫？ ケガとかしてない？」

ようやく理解ができたと思つた途端、七星は取り乱したように俺の容態を気にかけてくる。

「ん？ ああ、なんともない。ちよつとあがこち擦り剥いてるくら
いだ」

「ホントに、ホントになんともないの？ ねえ？」

「どうしたというのだろうか。

七星の心配は、どこか行き過ぎているようにも思える。

なんというか、どこか必死さにも似たものが伝わってくるのだ。

「あ、ああ。大丈夫だつて。なんともないから」

そう答えると、今度は納得したのか。

ふいにヘナヘナと力なく膝をつき、七星は咳くよつと言つて。

「……よかつた」

今になつて氣付いたが、七星はずつと俺のシャツの裾を手で掴んでいた。

まるで握り締めるかのように強く掴むその手が、どうしてか、小刻みに震えていた。

「……バカ。大げさなんだよ、お前は……」

「だつて、だつて……」

その声はどこか、泣いているように聞こえてしまう。

バカと呴いたにもかかわらず、七星は食いついては来なかつた。ふいに、ここが薄暗くてよかつたと思つてしまつ自分がいた。

ここだと、七星の顔ははつきりとは見えないから。もしも陽の当たる場所だつたら、もしかしたら……。

七星の目に微かに光るそれを見た俺は、きつと平静ではいられなくなつてしまふ。うだつたから。

「……行こうぜ。立てるか？」

コクンと、七星は答えずに一つだけ頷いた。

七星のことも心配だが、この場所に長居するのも危険だ。

この洞窟が今すぐに崩れ去るとは思えないが、落盤を目の当たりにした俺としては不安の芽は消えない。

幸い、先ほどの分かれ道から大した距離を進んだわけでもないの

で、ここは素直に引き返したほうが安全だろ？

まだ少し落ち着きを取り戻していない七星の手を取つて、俺は立ち上がる。

さすがに手を握るとこいつとこいつ恥ずかしさはあったが、この際そんなことは気にしていられない。

手を引かれ、立ち上がった七星と共に来た道を引き返す。七星はしばらくの間、一言も言葉を口にはしなかった。そして俺は、今更ながらに気付かされた。

握った七星の手は、驚くほどに小さかつたとこいつとこいつ。

合流地点まで戻つてみると、そこにはなぜか健一と瀬口の姿があった。

「あれ？ なんで二人とも……？」

「お、そっちも戻つてきたか」

健一達も俺達の帰りを待つっていたようで、再びその場所に四人が集合する形になる。

「いやはや、参つたわ。こっちの道、行き止まりになつてんだもん」「それで、戻つてきたつてわけか」

「そういうこと。ああ、そうだ。戻つてくる途中にさ、なんか変な音が聞こえたんだけど、そっちで何かあつたのか？」

健一が言う音については、恐らくあの落盤のときの岩肌が落下した音のことだらう。

隠しておぐわけにもいかないので、俺はそのことについて話す。

「マジで？ それで、二人ともケガとかしなかつたか？」

「ああ。それは心配ない。ちょっと転んで擦り剥いた程度だ」

「まあ、何にしてもその程度で済んでよかつたよ。そうと分かつたら、じんなどこに長居は無用だね」

瀬口が先頭を切り、出口へと誘導する。

「ほひほら。逃げ遅れてペシャン」なんて私は「メンだよー」「まさかとは思ひけど、そつも言つてらうねーよな。行こうぜ、隼人」

「ああ」

瀬口のあとを追い、俺達は足早に洞窟をあとにした。

再び入り江に出る。

「まあ、ここまでくればとりあえずは安心だろ」「ひ

走つてきた道を振り返りながら健二が言つ。

「それにしても落盤とはね。まあ、七星も来栖君も無事で何よりだけど

「一步間違えば、ケガじゃ済まなかつたもんな」「うんうんと、健二と瀬口は頷き合つ。

俺は改めて自分の腕に目を向けた。

何ヶ所か擦つたあとがあつたが、それだけだ。

痛みはまだ少し残るが、内出血や打撲の心配もないと見ていい。

「それよりどうする？ 最初の目的からすっかりズレてるけど」

「元々俺達はゴミ拾いにきただけであつて、それがこんな結果になることなどは誰にも予想できなかつたことだ。

まあ、確かに自分たちの好奇心と判断でこいつなつたわけで、アクシデントと言うよりは自業自得なのが。

「つつても、ゴミなんてほとんど落ちてないよな？」

「うん。思つてたよりはずいぶんと奇麗なもんだけね」

「だったら、ここにいたつて仕方ないだろ。戻つて、修母さんに問題ないですかって伝えようぜ」

「そうだな、そうするか」

健二が確認を取るように聞くと、俺と瀬口はそれに頷いた。

そうして健二と瀬口は来たときと同じように、岩場を登つて浜辺へと戻る。

俺もそれに続き、岩場に足をかけようとして一度後ろを振り返つ

た。

「…………？」

「…………え？ あ、『ごめん。何でもない……』」

「…………行くぞ。足元に気をつけろよ」

「うふ……」

岩場をよじ登る。

一瞬前のその一言が、頭から離れない。

うん、って……何だよ、それ。

なあ、七星。

お前いつから、そんなに弱々しくなったんだ？

そう思つても、俺は口にはできなかつた。

テントまで戻り、事のあらましを修吾さんと報告する。落盤があつたといつひとには、修吾さんも母さんもかなり驚いていた。

早急に手配して、入り江近辺を立ち入り禁止にすることだ。結局収穫した「ミミ」も数えるほどで、俺達の午後の仕事はこれで終了となつた。

まだ十分に太陽は高い位置にあるが、健一は「は」のあともう少し修吾さんの手伝いをすることになつた。

瀬口も夕方から予定があるらしいへ、一足先に帰宅するとのことだつた。

「七星」

と、去り際に瀬口が呼んだ。

「ん、何？」

「何があつた？ 元氣ないよ？」

「…………うふん。そんなことないけど」

「…………そつか。ならいいや。じゃ、来栖君も七星も、また明日ね」

「ああ、またな」

「…………」

軽く手を振りながら、瀬口は去っていった。

その言葉がどんな意味合いのものだったのか、俺よりも七星のほうがよく分かっているはずだ。

「母さんは、このあとどうするのね？」

「私ももう少し、皆さんを手伝つていくわ。一人は先に帰つていいわよ。私も夕飯の支度に間に合つように戻るから」

「ん、分かった」

俺は砂浜に座る七星のもとに駆け寄る。

「七星、帰る？」

「え？ あ、うん。明美さんは？」

「母さんはもう少し手伝つていくつてさ。俺達は先に帰つていいつて」

「……そっか、分かった」

立ち上がり、七星はズボンについた砂を払つた。

俺達は並んで浜辺を歩き出す。

ザクザクと砂地を踏みしめる音と、ザザアという潮騒の音が交互に耳の奥に届く。

真夏の太陽の下、一人分の影が背中に伸びていた。

だけど、どうしてだろう。

七星の影は七星自身よりも長く伸びていて、横田で見たその背中がこんなにも小さく見えるのは……。

それはきっと、夏の陽炎が見せた一瞬の幻なんかじゃない。

帰宅してまず、俺は風呂のスイッチを入れた。

今はすっかり乾いてしまつてはいるが、午前中の肉体労働でかなり汗をかいていたはずだ。

さすがにそのまま着替えるのも忍びないので、まずはさつやヒヤワードを浴びてしまうことにしよう。

「七星、お前はどうする?」「

「え、何が?」

「だから、シャワー浴びるかって。お前も汗かいてんじゃないのか?」

「あ、うん。そう、だね。じゃ、そうする……」

言葉が途切れ途切れで、どこか弱々しい。

自分が何を言っているのか分かっていないようにも思える。

「……んじゃ、お前先に浴びてこいよ。俺は後でいいから」

「うん……」

答えると、七星はやはりどこか重い足取りで風呂場へと向かっていった。

「アイツ、大丈夫かな……」

七星には聞こえないように、俺は小声で呟いた。

しかしそれ、さすがに風呂場まで押しかけるわけにもいかない。

しばらくはテレビでも見ながら待つことにしよう。

と、リモコンに手を伸ばしかけて俺は気付いた。

ソファの上に置まれているのは、体を拭くためのバスタオルだった。

「これがここにあるということは、いつも洗面所に置いてあるタオルは今はないとこになる。」

さすがにシャワーを浴び終えて、その体を拭くタオルがないのは困りものだらう。

それは俺に限らず、七星だって同じことだ。

仕方ない、持つていてやるか。

どうか、お約束のアクシデントだけは起きませんように……。

洗面所の扉を開ける前に、俺は一度耳を澄ませる。

ザァーと、確かに中からはシャワーの流れる音が聞こえた。

よし、アクシデントの心配はしなくていいな。

それでもできるだけ音を殺しながら、俺は洗面所の扉を引く。

腕に抱えたタオルを、洗濯機の蓋の上に置く。

よし、これでいい。

あとは物音を立てずに扉を閉めるだけ……つて、こっちの方がよっぽど怪しく見えるのは気のせいだろうか。

しかしあの後には引けない……じゃなくて、引けばいいんだよ引けば。

が、しかし。

ガタン、ヒ。

「げ……」

俺の膝は確実に、押し開けようとした扉に一撃を見舞つてしまつた。

「え？」

当然、その音は曇りガラス一枚隔てた浴室にいる七星にまで届いていた。

「……隼人？」

逃げ出すよりも言い訳を考えるよりも早く、浴室から名前を呼ばれた。

「……とか、逃げ出したところで犯人は俺以外にありえない。

「……あー、違う違う。そんなんじゃなくてだな、俺はただタオルを持ってきただけだからな」

とりあえず否定から入る。

説明としての手順がメチャクチャなのは、俺も相当焦っているからなのかもしねりない。

「タオル、洗濯機の上に置いておいたから」

「……うん。ありがと」

なんだか妙に声が上ずりそうになる。だつて仕方ないだろう。

そういう生き物なんだよ、男つてのは。

「……まあ、それだけだから」

早めに会話を切り上げないと、俺の中の何かがおかしくなつてしま

まいそうだ。

それだけ告げて、俺はさつとこの場を後にじょりとした。

だが、しかし。

「あ……」

そんな、あからさまに何か言いたそつな声で俺の動きは止まる。

「な、何だ？ どうかしたか？」

「ああ、ちくしょう。

何で俺の声まで緊張してんだよ。

「う、うん。その、大したことじゃないんだけど……」

だつたら頼むから後回にしてくれ、とは言い返せず、俺は黙つ

て七星の次の言葉を待っている。

「その、さつさはありがとね……」

「……え？」

「ほり、落盤があつたとき、助けてくれたじゅん……」

「あ、ああ。そのことか。いいつて、気にすんなよ

「う、うん。それでも、一応ね。ありがと……」

「……ど、どういたしまして？」

何で疑問系なんだよ、俺は。

内心で自分に突つ込みながらも、俺はやたらと動悸が激しくなつていた。

「うん。そ、それだけ……」

「……そつか。じゃ、行くな」

だから、何に對して断りを入れてるんだ俺は。

「うん……」

七星、お前も答えるなよ……。

パタンと音を立て、俺はよつやく洗面所の扉を閉めた。

午前中の肉体労働なんか問題じゃなくなるほど、今の時間の方が
息苦しかった。

十五分ほどして、俺は七星と入れ替わりにシャワーを浴びていた。擦り剥いた腕の傷にお湯がヒリヒリと痛んだが、構わずに汗を洗い流す。

体と髪の毛をしっかりと洗い流し、やることだけ終わらせて手早く着替えを済ませる。

強く打った背中が気になつたが、今はほとんど痛みもない。まあ、あとから痛み出すようだつたらシップでも張つておくことにしよう。

タオルで髪の毛を拭きながら、俺はリビングに向かう。

汗も流し終わり、サッパリとした気分だ。

リビングに戻ると、ソファに座る七星の後姿が見えた。

一瞬、さつきのやり取りが思い浮かんで心臓が高鳴るよつた錯覚を覚える。

いや、それが本当に錯覚かどうかはこの際置いておくとして。テレビの中では、ドラマの再放送が流れていた。

七星はそれに見入つているのか、俺がリビングに入つてきただにもまだ気付いていないようだった。

が、それは違つた。

「……ん?」

テレビの音声に紛れて、何かが聞こえる。

まるで隙間風が吹き込むような、そんな小さな音だ。

その音の正体は、案外目立つ形でそこにいた。

「……スウ……スウ……」

音の正体は、ソファで眠つてしまつた七星の小さな寝息だつた。

午前中からの手伝いで疲れが溜まつてしまつたのか、七星はソフ

アに座つたまま眠つてしまつていた。

「……つたぐ、呑氣なヤツ……」

俺は呆れながらも、どこかで七星の寝顔を直視できないでいた。しかし、いくら夏場といつても冷房の効いた部屋でそのまま寝かせておくと風邪を引かれてしまつかもしれない。

世話が焼けるとは思いながらも、不思議とそれを面倒だとは思えなかつた。

俺は一度母さんの部屋へ行き、押入れの中から薄手の毛布を一枚引っ張り出す。

そしてそれを、呑氣に眠る七星の体にそつとかけた。

何も知らない七星は、相変わらずスゥスゥと幸せそうな寝息を立てていた。

さてと。

俺も部屋に戻つて、夕飯までの時間を潰すことじょうか。

一階に上がる前に、テレビを消しておひつとリモコンに手を伸ばす。

リモコンを画面に向け、電源を切らうとした、その瞬間。

『そいやつて、いつまで逃げているつもりなの?』

その言葉に、俺は一瞬心臓を驚撃みにされたような感覚を覚えた。なんてことはない。

それはただ、ドラマの中の人物を演じる女優が放つた、脚本どおりの一言に過ぎない。

ただ、それだけだといつて。……どじつしてだらう。

その言葉は、俺の心の全てを見透かしているような気がして……。

「……ッ!」

電源を切る。

電子音と共に、画面は瞬く間に暗転した。

リモコンをテーブルの上に戻す。

「トトと音を立てたが、七星が起きることはなかった。

言葉ではうまく言い表せない感覚が、俺の中で渦巻いていた。

だけど俺は、それと向き合つともせずに踵を返す。

一階へと階段を上がる。

自分の足音が、家の中にこだました。

そうやって俺は、また知らず知らずのうちに逃げ出していたのか

もしれない。

いつまで、だつて？

そんなの、俺が聞きたいくらいだ……。

助けて、助けて、助けて……。

声にならない言葉がこだます。

痛みに歪む視界の先、炎の中で揺らめく景色。

美しいほどに猛る赤は、灰燼の空に火の粉と言う星を降らせる。

一方的な力の行使は止まることを知らず、あたかも炎がその凄惨さを強調しているかのよう。

体は……ダメだ、動かない。

指先一つ動かすだけで、全身をズタズタに引き裂かれるような痛みが走る。

もはや苦痛を上げることさえも至難で、かろうじて目を開けるのが精一杯。

揺らめく炎の中、悪魔の手もまた揺れていた。

相変わらずの耳障りな音。

叫ぶような悲鳴はいつしか、泣き声を殺して痛みに耐えるだけの悲痛に変わっていた。

助けなくちゃいけない。

心がそう言つている。

助けられない。

体がそう言つてゐる。

力が欲しい。

たつた一度だけでいい。

この体を無理矢理にでも立ち上がらせ、目の前の悪魔を打ち倒すだけの力が欲しい。

そのためなら、たとえこの体が炎に焼かれて消えてもいい。

一度だけでいいんだ。

たつた一度だけ、俺にヒーローになれる力を与えてくれ。アイツを……助けなくちゃいけないんだ。

守つてやるつて、決めたんだ。

だから……。

動けよ、俺の体……ツ！

筋肉をねじ切つて、血管を引きちぎつてでもいい。

俺にはまだ、立ち上がる足がある。

俺にはまだ、殴りかかる拳がある。

俺にはまだ、やめろと叫ぶ声がある。

俺には、まだ……。

守り通すと決めた、大切なものがあるんだ！

そして俺は、それを見た。

真つ赤な炎の中、それだけが奇麗な銀色を輝かせていた。

それは。

神が与えた、悪魔の刃だった。

目を覚ます。

いつの間に眠つてしまつたのだろう。

俺は体を起こし、明かりの消えた部屋の中を見回した。

「……俺、寝ちまたのか」

部屋に戻ってきたところまでは記憶があるのだが、そのあとがどう

うしても思い出せない。

ということは、部屋に戻つてすぐに眠つてしまつたことなのだ。

眠気はほとんどなかつたはずだが、今日一日の肉体労働を考えれば無理もない。

シャワーを浴びて目が覚めたと思っていたが、逆に体が休息を求める始めていたのかもしれない。

枕元の時計は間もなく九時を示そうとしている。

うたた寝程度の時間と思つたが、それでもなかつた。

確か、帰宅したのは三時前後だつたはずだから、かれこれ六時間近くも眠つていたことになる。

どうりで頭がスッキリしているわけだ。

そんなことを考えていると、急に空腹感がこみ上げてきた。

いつもの夕食の時間はとつぐに過ぎているし、それも当然か。

何はともあれ、一度下に下りたほうがよさそうだ。

寝癖の立つた髪を軽くかきながら、俺は部屋を出てキッチンへと向かつた。

「あら、ようやく起きてきた?」

キッチンではすでに夕食が終わり、母さんは洗い物にいそしんでいた。

テーブルの上には、俺の分の夕食がラップにかけられて残されたままである。

「ごめん、すっかり寝込んでた」

「いいのよ。今日はすごいぶんと働いてくれたみたいだから、疲れたんでしょ」

「ん、そうかも」

「今、飯温めるから、座つてなさい」

言われるまま、俺は椅子に腰掛ける。

ほどなくして、レンジをぐぐつて暖かさを取り戻した夕食が広げ

られた。

「いただきます」

並んだ料理に箸を伸ばしていく。

ところどころ熱の通つてないものもあつたが、空腹の度合いが大きく、そんなものは気にもならない。

俺は黙々と食事を続ける。

普段は隣にいる七星がよく喋るのだが、今はいないのでやけに静かで違和感を覚えるくらいだ。

結果、俺はほぼ無言のままで遅い夕食を食べ終える。

時折母さんが背中越しに話しかけてきたが、ほとんど粗糙を打つ程度の会話でしかなかつた。

まあ、今の場合は食事に集中していただけなのだけど。

食器を重ね、流し台に運ぶ。

「あ、食器はそこの置いておいていいわよ」

「いいよ。遅れたし、自分でやる」

スポンジに洗剤を染み込ませ、泡出したのを確認して蛇口をひねる。

手早く食器を洗い、次々に乾燥機に立てかけていく。

「あら?」

と、リビングにいる母さんがそんな声を上げた。

洗い物の途中だったが、俺も首から上だけで背中を振り返る。

「これ、押入れにしまっておいたはずなんだけど……」

母さんが手にしているのは、一枚の薄手の毛布だった。

「ああ、ごめん母さん。それ、俺が使つたんだ」

答えるだけ答えて、俺は再び洗い物を再開する。

「使つたって、この暑い時期に?」

「いや、そうじゃなくつて……」

振り返らず、俺は続ける。

「毎晩帰つてきてから、七星がそこで寝りやつたんだよ。で、風邪

引かれるのも困るから、母さんの部屋から借りたんだ

「ああ、そういうことね」

納得したのか、母さんはそう答える。

「でも、隼人、」

と、母さんは一度閉じた口をまた開いた。

「ん？」

「どうして風邪を引くだなんて思ったの？」

「どうしてつて……そりゃ、冷房入れっぱなしの部屋で寝てたら体が冷えるだろ？」

「それはそうだけど、だつたらどうして、直接冷房を切らないのよ？」

「？」

「……あ

言われてみればその通りだつた。

何でそんな簡単なことに気がつかなかつたんだろう？

「ああ、そういうえば。

確かあの時は、その前後に心臓によろしくないトークがあつたりしたから、さつとそのせいだ。

などとは、口が裂けても母さんは言えない。

言えば最後、悪ノリする母さんはありとあらゆるといひまで俺をいじり倒しに来るはずだ。

そしてそれは恐らく、俺に限らず七星にも独りをつけるだらう。同じ家の中で一倍恥ずかしい目に遭つなんて、まつぱらゴメンだ。

「……」めん、気付かなかつた

と、とうあえずそう言つてこの場を「」まかしておぐ。

さすがに母さんも、そこまでしつこ詮索はしてこないだらう。とこうか、そう願う。

「隼人つて、時々妙なところで抜けてるのよね

などと言つて、母さんはおかしそうに笑つていた。

まあ、いじり倒されるに比べれば笑われるくらいは句ともない。

俺は特に反論もせず、洗い物を終えて蛇口を戻した。

「あれ？」

「そう言えばと、気付いた俺は母さんに聞いた。

「母さん、七星は？」

「今は部屋にこると思つわよ。もしかしたら、もつ寝てるかしれないわね」

確かに、七星もリビングで居眠りしてしまつたくらいだ。

今日一日の疲れがドシと押し寄せて、普段よりも早く寝てしまつても不思議ではない。

つて、今の今まで寝てた俺がそつうのもどこかおかしい気がするけど。

テレビのリモコンを操作して、適当にチャンネルを替えていく。

と、ふいに今日が金曜であることを思い出し、俺は新聞のテレビ欄に目を向けた。

その後チャンネルを替えるが、どうやら番組がまだ始まつていな

い様子だ。

おかしいな。

ロードショーは九時から放送しているはずだから、このチャンネルで合つているはずなのだが……。

今の時刻は九時半になつたばかりだ。

CMに重なつてもいい限りは、番組が放送されているはずである。

俺はもう一度番組欄を見る。

と、その理由が分かつた。

「野球放送の延長で、時間がずれてるのか……」

これは決して珍しいことではなく、むしろ日常茶飯事と言える。

まあ、放送局側としてはプロ野球は高視聴率を確保できるわけだから当然の配慮だろう。

間もなくして、ロードショーのオープニングが始まった。

放送時間はちょうど三十分変更されてこるらしく、毎週のよう

見ている俺にとつては嬉しい誤算だ。

食後のコーヒーを飲みながら、俺はしばらくな画面へと集中する。

長いよつで短い一時間が過ぎ、ロードショーはエンディングを迎えた。

今回放送されたのは海外の映画の日本語吹き替え版のもので、確か去年の春頃に日本でも劇場公開されていたものだ。
いわゆるファンタジーで、様々な画面で最新技術のCGや演出効果が用いられ、見るものを楽しませてくれた。

「ふあ……」

スタッフホールを眺めながら、ふいにあくびが出た。
少し前まで熟睡していたと直つて、もう眠気が押し寄せてきているようだ。

本当にこの後ももう少し見たい深夜番組があるので、何よりもまず、体は休息を必要としている。

「明日も出かけるわけだしな……」

出かけると言つよりは、遊びに行くといったほうが正しい。

今日一日しっかりと働いて準備したのだから、祭りの両立を楽しむのは揃と言つものだらう。

まあ、祭りは夕方からなので時間的にはずいぶんと余裕はあるのだが。

「……寝るか。起きてても眠いだけだし」

テレビのスイッチを切り、空のカップを流し台に置き、俺はあくびを殺しながら部屋に向かつ。

「あら？ もう寝るの？」

と、ちょうど廊下で風呂から上がってきた母さんと会わした。

「うん。何か今日は疲れた……」

「ま、がんばって働いてくれたしね。みんな感謝してたわよ。若い

のに感心だつて

若いから働かされたんじゃないだろうか、とは思いつつも、俺は
あえて突っ込まないでおいた。

「とりあえず寝る。おやすみ

「はい、おやすみ」

母さんとの会話を早めに切り上げ、階段を上がる。

一階の廊下はシンと静まり返り、地肌で触れる床の温度がどこか
冷たく感じた。

明かりの消えた廊下の奥、そこには七星の部屋がある。

俺と七星の部屋は、ちょうど一階の廊下の端と端に位置して扉同
士が向き合つ形になつてゐる。

俺の部屋の扉は何もないが、七星の部屋の扉は小さなネームプレ
ートがぶら下がつてゐる。

ほとんど飾りのようないのだが、それが七星にとっては自分の居
場所を強く示すものだ。

その扉の向こう側。

七星は今も、午後のあの時と同じように優しい寝息を立ててゐる
のだろうか。

それとも、眠れずに好きな小説でも読みふけつてゐるのだろうか。
その部屋から、漏れる光はない。

ふいに、嫌なイメージが沸く。

本当は七星は、もうあの部屋にはいないんじゃないだろうかとい
う、根拠も何もない不吉なイメージ。

バカ、そんなわけないだろう。

俺は自分の頭に浮かんだ言葉を書き消した。

一体何を考えているんだ、俺は。

疲れているんだろう。

と、気がつけば一夜前と同じ思考。

朝がやつてくれば、きっと全てがただの杞憂だと証明してくれる。

俺は部屋の扉を押し開けて、明かりもつけずにそのままベッドに
なだれ込んだ。

パタンと、扉が閉まる。

眠れば何もかも、忘れることができる。

夢にならない限り、現実という悪夢からは開放される。
目を閉じると、すぐに睡魔はやってきた。

早く眠ってしまえと、後押しされていたようだった。

たとえそれが今宵の悪夢への入り口だったとしても、今の俺は抗
うこともできなかつた。

まぶたが下りる。

胸の内に、拭いきれない不安を抱えたまま。

Last Day(1)・奪い、奪われたモノ

勇者はその聖なる剣で、魔王を打ち倒すと言つ。

握り締めた途端、进るような熱が掌を焼いた。
それでも、握った手を離さない。

立ち上がる。

生まれたての子犬が何度も転びながら立つよつて、その何倍もの時間をかけて立ち上がる。

体中が悲鳴を上げた。

痛み以外の感覚など、すでに持ち合わせてはいなかつた。
ボロボロの体で、炎よりも揺れて立ち上がる。

呼吸を繰り返すたびに、焼けた空気がのどの奥と肺の中をせりて
焼き飛く。

満身創痍とはこのことだつた。

立ち上がつたところで、前に進む力が残るとは思えない。
それでも俺は、立ち上がらなくちゃいけない。

目の前で泣いているアイツを、助けなくちゃいけない。

何かを救うために、別の何かを犠牲にしなくてはいけないといつ
のなら。

俺は喜んで、この体を差し出してやる。

膝が笑う。

情けないな、無様だなど、自分で自分を笑い飛ばす。

ああ、情けねーよ。

ああ、みつともねーよ。

無様で仕方ねーよ。

それでも俺は、立つた。

この一瞬だけ、勇者であるために。

ヒーローであるために、俺は立つんだ。

だけど、きっとそこまでだ。

立ち上がったところで、俺にはもう戦いを挑む力なんて残されてはいないう。

この手に握った、剣とは似ても似つかない小さな刃も、ただの一回さえも振り下ろすことは叶わない。

……だけど。

そんな無様な勇者でも。

そんな傷だらけのヒーローでも。

目の前の敵に向かつて、倒れ込むくじこのことせきるんだ。

笑う膝で、一步前へ。

体はバランスを崩し、前へと倒れる。

その刹那、さらに一步前へ。

さらに、さらに一步前へ。

ひどく乱れた足並み。

九十歳を超えた老人だって、もうちょっと真っ直ぐ歩けるだらう。でも、それでもいい。

絶望的とも思えたその距離は、這いつまづいて歩いても十分手が届く距離だから。

よりめき、つまづきそうになりながら前へ。

ただひたすらに、前へ。

地上と星との距離が今、限りなくゼロへと近づく。

ここまできたら、もうHONDINGは田の前だ。

最後の一歩。

踏みしめた大地は、どうしようもなく不安定で。だけどその手に握った刃を、決して離さない。

今一度、強く握り締める。

炎の熱さを忘れるほどに、強く、強く、強く。

何よりも強く。

願いはただ一つだけ。

壊れてもいい。

ただ、もうアイツの泣き顔を見たくなかつた。

本当に、それだけのこと。

傾ぐ体。

これで、本当に終わり。

薄れ行く意識の中で、振り返つた悪魔の顔を見た。

直後に、吐き気を覚えるような手応え。

肉を突き破る刃の感覚。

右手が何か、温かい液体に濡れていた。

倒れれば最後。

もう、立ち上がる力なんてどこにも残されていない。
だからこれは、俺が最後に見た炎の中の記憶。

一瞬、幻かと思った。

悪魔の顔が、優しく笑つてた。

口の端に赤い零を伝わせながら、何かを告げていた。
ありがとう、と。

そう、聞こえたような気がして。

そこで俺は、今度こそ意識を失つた。

日に日にあの頃の夢が鮮明になつていく。

推理ドラマが解決編に向かつて進行していくようだ。

最初はただの映像。

次はシーンの再生。

そして、役者の再演。

苦痛でしかなかつた。

誰も好き好んでこんな夢を見たいわけではないと言つの。

まるであつてつけのように、悪夢は連日甦る。

だから今もこうして、夢見の悪さに俺は一人苦しんでいる。

どれだけ体が拒み続けても、夢と言つのは結局その人間の心の問題だ。

だから俺にはきっと、この悪夢に苛まれ続ける、その理由となる何かが心にあるのだ。

そして俺はそれが何であるか、すでに答えを導いている。
そこまでできているのなら、あとはそれを言葉や行動に移すだけでいい。

そう、その通りだ。

だけど俺は、そのたつたそれだけのことができないんだ。
伝えるべき言葉も、やるべきことも全て知っている。

それでも心のどこかで、俺はいつも怯えていた。

だって、俺の手はもう真っ赤な血の色に染まってしまっている。
罪人の手なんだよ、この手は。

たつた一度の傲慢で、数え切れないほどものを失つてしまつた
んだ。

……いや、失わせてしまつたんだ。

それは本当にかけがえのないもので。

世界中どこを探しても、そこにしかなかつたもので。

たとえそれが俺にとつてどれだけ大切な人を傷つけたとしても、
俺がその人を傷つけていい理由にはならなかつたんだ。

ちょっと考えれば分かることだつた。

そんな大切なことに気付いたのは、もう何もかもが手遅れになつてからだつた。

結果として、俺は俺の大切なものを守つた。

その代わり、大切なものが大切にしていたものを奪つた。

奪つた俺が幸せを手に入れて。

奪われたアイツが幸せを失つた。

それがどれだけ理不尽なことか、考えるまでもないだろう。結局はただの自己満足だつたんだ。

俺はあの日、ヒーローになれたつもりだった。

自分にとつて大切な人を守ることができたから。

だけど、大切な人を守つたその手は、もう取り返しのつかない罪を犯していた。

何かを守るために何かを犠牲にしなくてはいけない。その犠牲は、俺が背負わなくちゃいけないはずだった。

俺が俺を犠牲にしなくちゃいけなかつたんだ。

だけど俺は、知らず知らずのうちにそのことから逃げていた。

結果、俺は自分を何一つ犠牲にすることなく、俺の大切なものを守り通した。

その影で、俺の代わりに犠牲になつたものがあつたなんてこと、気付きもしなかつたんだ。

そのことに気付いたのが、アイツが俺の家で一緒に暮らすようになつた頃だつた。

新しい三人の家族。

母さんと二人だけの暮らしさは辛くも苦しくもなかつたけど、一人増えた三人の家族は楽しかつた。

違和感なんて何一つ感じさせなかつた。

まるで最初から三人は家族だつたかのように、当たり前の日々を過ごしていた。

でもあるとき、俺は思った。

どうしてアイツは、俺と母さんと一緒に暮らしたいと思つたんだろ？

そして俺は、一つの結論に至る。

この新しい三人の家族の中で、血の繋がりがないのはアイツだけだ。

家族なのに、どうして血が繋がつてないんだろう？

それは、アイツが本当の家族じゃないからだ。
じゃあ、アイツの本当の家族はどこにいるの?
それは……。

……あれ?

アイツの、本当の、家族……?

ねえ、どこにいるの?

それ、は……。

ねえ、どうなの?

……。

……いないんでしょう?

え……。

いないんだよ、本当の家族なんて。

何を、言つて……。

……。

だつて、当たり前でしょ?

まさか、忘れたの?

だつたら、思い出をむかへあげるよ。

……やめろ。

アイツに家族がない理由。

……やめる。

俺がこの手で 殺したからさ。

やめろ……っ!

田が覚める。

どこへ伸ばしたのか、俺の右腕は無造作に虚空を掴もつとしていた。

「は、はあ、はあ……

た。

寝起きとは思えないほどに呼吸が乱れている。

にもかかわらず、不思議と寝汗の一つも流していない。

だらしなく伸びた手が、ストンと抜けるように落ちる。

呼吸を少しづつ整えながら、俺はようやく悪夢につながれていたことを思い出した。

夢の中にはいつも炎の中。

誰かを守り、誰かを殺したあの日。

あのときから十年、今でも俺の手は見えない血の色に染まつたまま。

罪を背負うこともできない罪人。

傲慢すぎた自分の中の正義。

悔やんでも悔やみきれず、だからこいつして夢の中で苦しむのかも

しない。

自分の罪を改めて知るよつと、そうあることが償いであるかのよ

う。

「……つー」

奥歯が軋む。

今更許してほしいなんて思つていない。

許されればきっと、俺は罪の重さまで忘れてしまつから。

背負わなくちゃいけないと、頭では嫌になるほどに分かっているのに。

未だに答えが見つからないんだ。

俺が犯した罪をどう背負えばいいのか。

アイツに、伝えなくちゃいけない言葉があるはずなんだ。

それはきっと、難しいことじゃない。

驚くくらいに簡単な言葉なんだ。

「隼人？ いるの？」

コンコンと扉を叩く音と、廊下のいる七星の声。

俺は一瞬、肩を震わせた。

単純に驚いただけでもあつたが、あまりにも悪いタイミングでの声を聞いてしまったからかもしれない。

「……隼人？ まだ寝てる？」

「……いや、起きてる。何？」

「ん、別に用事つてほどのことじゃないんだけど。ただ、なんか悪い夢でも見た？ 叫んでたよ？」

「え……俺がか？」

「うん。なんか、やめろって。ちょうど部屋を出たとき聞こえたんだけど、いきなりでビックリしたよ」

「……そう、か……。そんなこと言つてたか、俺……」「やめろ、か……。

それは、誰に向けて叫んだ言葉なんだろうな。

今の俺自身か、それともあの口の俺に向けてか。どちらにしても、そんなことを叫ぶよりじや結局俺は何も変わつてないつてことだな。

ずっと逃げ続ける。

逃げ切れないつて分かつてんのにな……。

つたく、往生際が悪いつて言つたか、諦めが悪いつて言つたか……。

「ホント、何やつてんだろうな、俺は……」

「……ねえ、隼人？ まだ半分寝ぼけてるの？」

「ああ、そうかもしれない。今起きたばつかなんだ」

「まあ、そんなことだらうとは思つたけどさ。もうお昼近いんだし、あんまり寝すぎると脳が溶けちゃうよ」

「……ああ、悪い

「……変な隼人。ま、いつか。早く起きなさいよね」

足音が遠ざかっていく。

足取りは軽く、どこか嬉しそうなリズム。

どうしてそれが、こんなにも俺を苦しめるんだろう……。

「……ちくしょう……」

俺は駅前までやつてきていた。

目的なんて最初から何もなかつた。

ただ、少しでも早く一人になりたかつただけ。

……いや、逃げ出してしまいたかつた。

だからこうして、着替えだけを簡単に済ませて家を飛び出したんだ。

「ちょっと、用事を思い出した」

出かける理由にした言葉。

理由らしい理由もなければ、ウソなりにひねりを加えたわけでもない、ただの口からでまかせ。

もちろんそれは、ただの建前だつた。

一人になりたかったというよりは、一人でいられなかつたと言う方が正しいのかもしねりない。

自分でもおかしいと思う。

だけど、もう七星のことを真つ直ぐに見ることができない。

それは昨日までのような、多少なりともお互いを意識していると言つ氣恥ずかしさなんかじやなく。

正真正銘の、俺が七星に対して一方的に抱いている負い目だつた。それでも、共に暮らしてきたこの十年間、過去の一度も似たようなことがなかつたわけじやない。

歳を重ねるに連れて、俺の中でも過去の罪の重さを理解できるようになつていつた。

初めはそれが恐怖以外の何物でもなかつた。

けれど、それを忘れるくらいに俺達は三人で幸せだつた。

本当の家族じゃないけれど、本当の意味で俺達三人は家族だつた。

その居心地のよさが、俺の中から罪の重さを少しづつ引かれて
ていったのかもしれない。

いつしか三人でいることが当たり前になつて、過去の傷が田にほ
見えなくなつて。

俺はそのことを自分勝手に、自分の犯した罪が許されたと思つよ
うになつていたのかもしれない。

いや、事実そう思つていたんだろ？

少なくとも、ほんの数日前までは。

それを掘り返したのが、ここ数日の間に連續して見続けた悪夢だ。
どうして今更、そんなものを見せるんだ。
もう終わつたはずだろ？

今の俺から、居場所を奪わないでくれ。

そうやって、いつも言い訳をしてた。

許されなくていいと思いながら、忘れないだけ願つてた。

そうして今も、ただ逃げている。

誰が悪いわけでもない。

そもそも、悪いなんていう概念そのものがあつてはいけないんだ。
頭では分かつていいんだ。

今までだつて、自分で何度も何度も言い聞かせてきたんだ。

俺さえ全てを受け入れてしまつことができれば、それで全てが終
わるんだと。

分かつてること、どうしてもできない。

心がいつもそれを拒んでる。

受け入れたら、俺は、俺は……。

この手を血に染めて唯一守り抜いた大切なものさえも、離れてい
つてしまふんじゃないだろ？
ただ、不安だつた。

ただ、怖かつた。

言えばそれで、全てが崩れてしまつる気がするんだ……。

……おかしいよな。

夢の中では確かに、言えたはずなのに……。

人の波に沿つて足を動かす。

明確な目的も目的地も持たず、歩く姿はまるで人形のように見えるかもしれない。

土曜日の昼間、いつも増してアーケードを行き来する人の数が多い。

人々の喧騒と町の騒音が混じり合つて、俺にはそれがチューーングのうまくできてないラジオノイズに聞こえて仕方がなかつた。雑音に雑音をさらに加えたような、ただの不快なだけの音の塊。メロディも旋律もあつたもんじやない。

それらはただ、空気を振動させているだけに過ぎなかつた。

……うるさい。

耳鳴りを覚える。
ただでさえ下を向いて歩いているのに、これ以上気分をうなだれさせられるというのだろうか。

静かな場所を求めたわけじやないが、今の俺にこの大音量のノイズは毒以外の何物でもなかつた。

道を外れよう。

このままじや本当に頭がおかしくなつてしまつ。

狭い裏路地に入る。

湿つた空気と乾いたホコリの匂いが鼻をつくが、そんなものは毛ほども気にならなかつた。

足元に散らかる掃き溜めのようなゴミを踏み潰しながら、薄暗い路地を進む。

空気が冷たい。

まるでここだけ季節が過ぎ去つてしまつたかのようだ。

少し後戻りするだけで、そこは炎天下の夏の下だといつのに、ここだけが中途半端に秋と冬の間にいるみたいだつた。

どこをどう歩いたのかは覚えてない。

歩くことさえも面倒になつてきていったはずなのに、気持ちとは裏腹に足はどこかへと向いていた。

「…………

どこへ行くと言つのだろう。

体はいつでもブレーキをかけることができる。

それなのに足が勝手に動くのは、つまり俺が無意識のうちにアクセルを踏み込んでいるからだ。

なあ、どこへ行くんだよ、俺は。

こんな場所に、目的地なんてあるわけがないだろう。

何よりもまず、俺には目的がないんだ。

目的がなければ、そもそも目的地なんて存在するわけがないじゃないか。

散歩するにしたつて、もう少し気の利いた場所があるだろう。

何もこんな、薄暗くて小汚い路地裏の細い道を歩く必要はない。

……さあ、引き返そう。

人ごみの中をまた歩くのも億劫だが、このままどこに通じるかも分からぬ道を行くよりはマシだ。

「…………

しかし、どうにか踏み出す足は止まる」とを知らない。

それはもう、俺の意思のどうこうを完全に無視している。

ただ、前へ。

どこに続いているかも分からぬ暗がりに向かって進む。

……おいおい。

何だよ、何があるって言つんだよ、この先に。

何もありはしないわ。

少なくとも、今の俺が求めているものなんてあるわけがない。

それを言つてしまえば、今の俺が求めているものなんて世界中のどこにもありはしないのだろうけど。

「そう、だ……。あるわけがない。答えなんて、どこにも……」

それでもこの足は、どこかを田指してゐる。
まるでそこになら、答えまではないにしても、それに繋がる鍵くらいは落ちてゐるよと言わんばかりに。

前へ、前へ。

細い道は続く。

広がるのは無機質な灰色の壁だけ。

ここには、はるか上空の陽の光さえもまばらにしか届かない。
ところどころ、薄汚れた地面が木漏れ日のように光の欠片を映し出している。

俺の足は、まるでそれを追いかけるように進んでいた。
ふいに、何かを思い出す。

ただ細く狭いだけの汚い路地裏に過ぎないこの場所。
でも確かに、見覚えのある景色。
どこかで見た、どこでもない場所。

それはほんの数日前の記憶。

二人並んで歩いた道を少し外れて、アイツが俺の手を引いて歩き出した場所。

閃光のように甦るイメージ。

気がつけば俺は、その場所に立ち止まっていた。

古びて錆付いた店の看板と、電球の切れたネオンサイン。

目印らしいものといえばたつたそれだけ。

それでも、その場所は十分俺の記憶に新しい。

中古のCDショップ。

看板が古いせいで、店の名前さえも分からない。
俺はその古びた看板をジツと見上げていた。

「…………」

一步、足を踏み出す。

今度はちゃんと、自分の意思で。

ガード音を立て、反応の悪い自動ドアが開く。

ドアが完全に開き切つてから、俺は店内に足を踏み入れた。

空気がガラリと変わる。

陰湿な路地裏とは取つて代わり、店内は数日前と同じゆつたりとした暖かい空気が流れていた。

店内にはテンポのいいジャズの曲が流れ、こいつのソルジャーもなんだがちょっととした時代錯誤を覚えてしまつくらいだ。

「いらっしゃい」

と、カウンターの奥から声がした。

見ると、そこには身長がゆうに百九センチはあるかという巨体の男……店のマスターが椅子に座つてコーヒーを口にしていた。この男性、背丈が高いだけではなく恰幅もいい。

ようするに縦にも横にも大きな男なわけだ。

俺はマスターの挨拶には答えず、代わりに小さく頭を下げる店の奥へと歩き出した。

今日はたまたまだろうか、見渡す限り店内に俺以外のほかの客の姿は一人も見当たらなかつた。

もとより客足は少ないだろうとは思つていたが、こじままで客がないのも考え方である。

まあ、それも店そのものの立地条件を考えれば仕方のないことだ。もう少し表通りに面した場所にあれば、若い年代の客層は店を覗きに来てくれるとは思うのだが。

と、店内を歩き回りながら思つた。

どうしてこんなところに立ち寄つてしまつているのだろう。

……いや、考えるのはやめよつ。

俺はたまたま路地裏に入つて、その道がたまたまこの店の前に続いていたと言う、ただそれだけのことだ。

辿り着いた場所が見覚えのある店だったら、フワフワと足が向い

ても不思議なことはない。

そうだ、そうに決まっている。

何も目的を持たず歩いていたんだ。

ここが俺にとっての目的地である理由も根拠も、そんなものは何一つありはしないのだから。

とはいえ、さほど広くもない店内とはいえて客が俺一人というのはどこか変な気分がする。

これといって欲しいものがあるわけでもなく、それなのにいつも言つていつまでも店内を見て回るのは迷惑ではないだろうか。俗に言つて冷やかしと何一つ変わりはしないのだから。

チラと、俺は店の一角からカウンターのマスターの姿を見た。しかしマスターは俺のことなど気にもくれず、相変わらずのその大柄な体を椅子に預けて新聞を読みふけっている。

「じゅつくりじゅぞ」という意味合いだろうか。

まあ、マスターとしても客がいないんじゃ商売にもならないわけだよな……。

洋楽のCDの棚を見て歩く。

どれもこれも知らない海外のバンドばかりだったが、中にはどこかで見たことのあるグループのジャケットも目に付いた。

しかし、英語ならまだしも他の言語では曲名も歌詞も読めないし、日本語の意味も分からぬ。

結局俺はCDを見て回ると言つよつは、ジャケットのデザインを見て回つてはいるだけだった。

そんなことをしている時間でも、俺には悪いものじやなかつた。

少なくとも、こうして他の事に集中している間だけは余計なことを考えないですむ。

そう考へれば、結果としてこの店に立ち寄つたのは正解だったのかもしけない。

あのままだと俺は、本当にじやまでも際限なく自分を追い詰めて

いただらう。

きつかけなんて何でもよかつたのかもしれない。

今はただ、こうして落ち着いて何かを考える時間が必要なだけで。

「…………」

不思議と気分が落ち着く。

店内に流れるメロディがさうさせたのかもしれない。

聞いたことがあるようで、でも実際は全く知らない曲。

それでも懐かしさが芽生えて、ついつい耳を澄ましてしまう。

曲自体は似たようなメロディを繰り返しているだけだと言うのこ

うしてこんなに気持ちが落ち着くのだろう。

音楽には癒しの効果があるというのは、今ではもう周知の事だ。

ということは、俺も癒されているということなのだろうか。

だとしたら、俺は何を癒されてる?

何を癒してほしい……苦しさから開放して欲しい?

そんなのは、分かり切つたことだった。

「…………俺は…………」

ふいに、店内の雰囲気が変わった。

今まで流れていたジャズの曲が途絶え、一瞬だが完全な静寂がこの場を支配した。

空気が凍るように収縮していくのが分かる。

さつきまでの路地裏と同じ。

何も聞こえない。

気分が悪くなつてくる。

また、この場所からも逃げ出してしまいたいといつ抑えきれない衝動が芽生える。

が、それも一瞬だつた。

力チリと、何かが切り替わる音。

ジジジという機械音。

直後に、さつきまでとは違う別のメロディが流れ出した。

「……この、曲は……」

それは、気のせいでも間違いでもなく。

今度こそ心の底から懐かしいと思える、大好きなメロディが流れ始めた。

フリー・ブルーム。

自由の羽根と書いた意味の曲。

俺はこの曲の歌詞を全て、一言一句間違えずに口ずやむことができる。

昔大好きだったドラマの主題歌として歌われていた曲。

当時はCDなんて買わなかつた。

ただ毎週のようにドラマを見ているだけで、フレーズは頭の中に入つていつた。

そのメロディが。

その詩が。

何よりも心地よかつた。

曲を聴いている間だけは、まるで自分の背中にも羽根が生えてい るよつに思えた。

自由なんて、そつそつ簡単に手に入れられるものじやないけど。

誰だつて手にできるよと、曲の中の詩がいつも言つていた。

その言葉が、全然ウソに聞こえなくて……。

「……」

気付けば俺は、目を閉じて曲に耳を傾けていた。

あの夜。

ほんの数日前、この店で買った同じ曲のCD。

一度聴いただけで、今はもう机の上に投げ出したまま。

あの夜は、信じられなかつた。

自由なんてない。

俺には羽根もないと、否定した。

……おかしな話だよな。

あれつきり聴きたくもないと思つてた曲に、今こうして耳を傾け

ているんだから。

だけど、不思議なんだ。

どうしてか今は、あの頃と回じよつし、ただこの曲を心地よく思
えてしまえるんだ。

フルコースを終えて、曲はしだいに遠ざかる足音のよひに小さく消えていく。

消えたくない」と言つた残のような残響が、いつまでも耳の奥で残つていた。

「今日は、連れの子は一緒にないのかい？」

ふいにそんな声が、隣から聞こえてきた。

「え？」

俺が隣を振り返ると、やいこは棚の中のじつを整理するマスターの姿があった。

間近で見ると、改めてその体の大きさを嫌と感じ実感をせられる。

「……あの子って」

「三日前、君と一緒に来ていた彼女だよ。今日は一緒にないのかなと思つてね」

マスターの言つ彼女と言つのは、間違になく七星の「ひだり」。三日前のあの日、俺は七星に連れられて初めてこの店を訪れたのだから。

「……今日は、俺一人です」

「……そうかい。いや、すまなかつたね、おかしなことを聞いて」

マスターの声はとても穏やかだ。

見かけの体格とは裏腹に、きっと性格も優しく温厚なのだからと俺は思つ。

「……」

それにつ、俺とマスターの間の会話は途絶えてしまつ。

もつとも、会つのはこれで一回田で、接客以外で話をするのはこれが初めてのことだ。

大した話題もないのに、そんそん話が長続きするはずはない。

と、少なくとも俺はそう思つていた。

「……今の曲ね、私が大好きな曲なんだよ」

「……え？」

マスターがふいに呟いた。

その言葉に俺は、隣にいるマスターを少し見上げた。

「何年か前に、ドラマの主題歌で使われていた曲なんだけれどね。売り上げ 자체は騒ぐほどじゃなかつたけど、私の中では名曲だよ」

「……」

マスターは腕の中に抱えたCDを棚の中に次々と納めていく。カチヤカチヤと、腕の中でケースがぶつかり合つていた。

「君もこの前、同じ曲のCDを買つていつてくれたろう?」

「え? ああ、はい……」

慌てて答えると、それでもマスターはとても嬉しそうに微笑んでくれた。

「いや、正直嬉しかつたよ。同じ曲を好きな人がいてくれるって言うのは、いいものだ」

「……そう、ですね」

マスターがあまりに無邪気に笑つので、その姿が一瞬俺よりも小さこ子供のように見えてしまつた。

本当にこの人は、心の底から音楽を愛しているんだなと思つた。

「……彼女もね、いつもこの店に来ると決まつて聴いている曲があるんだよ」

「七……アイツが、ですか?」

「ああ」

マスターは答えて、一度後ろを振り返る。

「ほら、そこに視聴用のプレイヤーがあるだろ? その真ん中の

やつには、いつも彼女の好きな曲が入っているんだ」

マスターの指差した先、そこには三日前に訪れたときに七星が使っていたプレイヤーが置かれていた。

「……聞いてみるかい？」

「……え、俺ですか？」

俺は自分を指差すが、もとより今は店内に俺とマスターしかいな

いわけだ。

答えずに、マスターは一つ頷いた。

俺は断ることもできた。

別にいいですよと一言言えれば、それでいいだけのことだ。

だけどなぜか、少しだけ興味が沸いた。

七星があれだけ好きになるほどの曲。

だけど、決して手に入れることはなかつた曲。

俺はそれを、単純に金銭面での問題だとばかり思つてた。

だけどここは中古CDショップだ。

プレミアのついたレコードとかならとんでもない値段がつきそつだが、CD一枚にそこまで値段がつくとは思えない。

俺はプレイヤーの前にやつてくる。

ヘッドフォンをつけ、プレイヤーの電源を入れた。

読み込みが始まる。

キューイイという機械音。

再生ボタンを押す。

そして、アイツのメロディが流れ始めた。

「……」

停止ボタンを押す。

俺はヘッドフォンを外し、しばし呆然とする。

「……彼女はね」

その様子を見たマスターが、俺のすぐ隣へとやつてくる。

「初めてこの店を訪れたのは、大体一年くらう前になる」

「……」

俺はマスターに向き直り、無言で話の続きを促した。

「そのとき彼女が最初に聴いた曲が、今君の聴いたその曲だった。それで気に入ってしまったのか、以来、店に来るたびに聴いているよ」

「……本当に、アイツがこの曲を……？」

「ああ。本当にとも」

マスターは微笑む。

まるで自分のことのように穏やかに語る。

「だが、その半面不思議に思つたよ。それだけ気に入つた曲なら、CDを買つていけばいいのに、どうしてそうしないのかなと」

マスターの疑問は当たり前のものだ。

事実、三日前にこの店を訪れた俺も七星に対して同じ疑問を抱いたからだ。

「あるとき私は、彼女に聞いてみたんだ。そんなに好きな曲なのに、どうして自分で手に入れないんだい、と」

「……」

「そうしたら彼女は、こう言つていたよ」

マスターは一度目を閉じ、すぐに開いた。

「この曲は、私だけの曲じゃない。いつか一緒に、この曲を聴きたい人がいる。だから、手に入れるのはそのときでいいと」

その言葉に、俺は頭をハンマーでぶん殴られたような衝撃を受けた。

「……何だつて？」

七星が……アイツがそう言つたのか？

そんな……でも、どうして……。

「……どう、して……」

その一言だけは、どうしても言葉に出てしまった。

しかしそれを聞いたマスターは、何もおかしいとは思わなかつたのか、表情を変えないままでいる。

「どうして、か。君は、どうしてだと思つ？」

「……俺は……」

「分からぬ。」

「……分からぬ。どうしてアイツが、そんなことを……」

「……彼女も、そう言つていたよ」

「……え？」

「私がどうしてだと聞いたら、彼女は分からぬと答えたよ。自分でもよく分からぬと。けど、彼女はこうも言つていた」

俺は息を呑む。

「今はまだ分からぬ。でも、いつか分かるときがきたら、それはきっとこの曲を一人で聴くときだと思つ」

その一言に。

どれだけの意味が、想いが、感情が込められているのか。

……分かつた。

はつきりと、分かつた。

逃げ出したままだつたのは、俺だけじゃなかつた。

アイツも……七星もずつと逃げていたんだ。

俺は勘違いをしていた。

救われない存在が自分だけだと勝手に決め付けて、七星に対していつも負い目を感じるよう自分を作り上げていた。

だけどそれは、大きな間違い。

同じだつた。

ずっと、同じだつたんだ、

七星もずつと、俺に対しても負い目を持つていて、自分が救われない存在だと決め付けていたんだ。

そんなことが、これからも続くのか？

何も変わらないまま、未来永劫に続くと言つのか？

いいや、違うだろ？

そんなことがあつていいはずがない。

何だ、ちゃんと分かつてるじゃないか。

そこまで分かってるんだ、もうやる」とは一つだよな?

「……どうか、したかい?」

マスターが変わらぬ声で話しかける。

「いえ、何でもないです。ただ……」

「……ただ?」

さあ、行こう。

行くべき場所が、あるんだろう?

「……ちょっと、用事を思い出しました」

それは。

もう、口からでまかせの言葉なんかじゃない。

「……ああ。行っておいで」

そう言つて見送つてくれたマスターの笑顔は、本当に優しかった。走り出す。

答えなんて、どこにもなかつた?

ウソ、ばつか。

答えなんて、最初からずつと持つてたじやないか。まあ、気付くのにちょっと時間がかかりすぎたよ。遅れは取り戻さないといけないよな?

だから、走るんだ。

もうすぐ夕方になる。

夏祭りの前夜祭が、もうそろそろ始まる頃だ。

「七星、私達もそろそろ行きましょうか

ソファで小説に読みふけつていた私を、明美さんが呼んだ。

「……そう、ですね。行きましょう」

私は小説を閉じ、グッと背伸びをして立ち上がる。

「大丈夫よ。隼人ならどうせ、忘れた頃にひょっこりやってくるわ

だから安心しなさいと言わんばかりに、明美さんは小さく微笑ん

だ。

「え、べ、別にそんなこと一皿も重つてないじゃないですか！」

本当に図星を突かれてどうしようもなく慌てていいのを「」まかそうとして、逆に私は焦つて言葉足りずになってしまつ。

「はいはい。そういうことにしてもくわね

「も、もづ、明美さんつてば……」

と、私はそこで食い下がる。

これ以上食つて掛かつても、逆に明美さんはますます樂しそうでしまいそうだったからだ。

私は荷物を取るために、一度部屋に戻る。

荷物といつても、携帯と財布を上着のポケットにしまこじんでしまえばそれで準備は完了なんだけど。

「じゃ、行きましょう。一応鍵も渡しておくわね」

明美さんから合鍵を受け取る。

それも一緒にポケットの中にしまこじんで、私と明美さんは揃つて家を出た。

空はまだまだ明るい。

ずつと遠くの空が、ほんのつとオレンジ色に染まつていいだけだつた。

海岸線に続く道を歩き出す。

あちこちの電柱に、今田と明田の夏祭りの広告やチラシが張られていた。

私と明美さんが揃つて歩く道を、子供達が自転車で追い抜いていく。

きつと、行き着く先は同じなんだろうな。

浜辺に近づくに連れて、ぶら下がる提灯の数が多くなつていく。微かだけど、祭囃子の音色も確かに聞こえていた。

笑われるかもしれないけど、少しだけ心がワクワクしていた。

その反面、どこかフワフワしていた。

原因は分かつてゐる。

ホントにもう、一体どこをほつつき歩いているんだろ？。

昼過ぎに用事があると家を出たつきり、隼人はまだ帰つてこない。メールもしたんだけど、返事は返つてこなかつた。

気付いていないのか、それとも電源を切つているのか。

まあ、どっちでもいいけどさ……せつかくのお祭りなんだから、早く来なさいよね。

あんまり遅いと、晩御飯は隼人の奢りつてことで。

神社のふもと、浜辺付近の海岸通はすでに多くの人々で賑わいを見ていた。

交通規制がしっかりと行われているようだ、この付近には車両は入つてこれないようになっている。

時刻は間もなく夕方の五時。

この時間に開いている屋台は、ほとんどが子供向けのものばかり。金魚すくい、わたあめ、カキ氷、射的、その他ゲームじみたものがほとんど。

食品関係の屋台は、六時を過ぎないと開かないとのことだった。まあ、さしてお腹も空いているわけではないし、一時間ほどんびりあちこちを見て回るのも悪くないかな。

途中で明美さんと別れる。

実行委員の方に顔を出して、少し手伝いをしてくるとのことだった。

「さて。私はどうしようかな……」

到着してから思ったのだけど、もう少し家でゆっくりしててもよかつたかもしねない。

この時間では圧倒的に子供達の姿が多く、屋台もそれに合わせたものしか開いていない。

歩き回ったところで、あまり見るものがないといつのが現状。どうしたものだらう……。

と、道の真ん中で考えてこるときだった。

「わっ！」

「わあっ！」

果たしてどちらが驚かし、驚かされた声なのか。

分からなくなるくらいに、私達の声は同じだつた。

「な、なんだ、葵かあ……」

振り返ると、がつしりと肩を掴んだ葵の姿があつた。

「へへー。どう、驚いた?」

「うん、ビックリした」

そう答えると、なぜか葵は満足そうに笑うのだった。

「つて、あれ? 七星一人? 来栖君は?」

「隼人なら、昼過ぎから出かけてまだ戻つてないよ」

「あらあら。七星を置き去りにしてどこかへ行つてしまつたつてことなのね」

「お、置き去りつて何? 変な言葉使わないでよ……」

「おや? その割にはそれらしい反応を示しているように見えるんですけど……これはもしかして……?」

「な、何考えてんのよ葵! 私だつて怒るよー」

「アハハハ。ごめんごめん。ちょっととからかつてみただけだつて」

「つう、相変わらずなんだから……」

私はどうやら、明美さんと葵には相当にじっくりやすいキャラをしているみたいだ。

二人の態度を見ていると、それを嫌でも実感させられてしまう。……ちょっとだけ、自分が情けなくなつてくる。

「ま、来栖君もそのうち来るでしょ。それまでは一緒に見て回ろうよ」

「うん、それは構わないんだけどね。今の時間つて、子供向けの屋台しかやつてないでしょ?」

「大丈夫大丈夫。神社の上では色々イベントやるつて話だから、そこで時間潰そう」

そう言つと、葵は私の手を引っ張つて人ごみの中に走り出した。

「わ、ちょっと葵!」

成すすべなく、私は葵に引っ張られていく。

行動力があると言えば聞こえはいいけど、葵のこれは猪突猛進と

言つものだと思つ。

でもまあ、それもいつものこと。

半ば諦めて、私は葵のあとに続いて走つ出すのだった。

「……あ、揃つた……って」

私がそう呟くなり、隣に座つてゐる葵が勢いよく立ち上がり、叫んだ。

「ビンゴー、はいはいオジサン、揃つたつてばー、コラ、無視すんなつ！」

「あ、葵……？」

葵は性格が変わつて……いや、ソラまでくればこれはもう変貌と言つてもいいと思つ。

私の手からビンゴゲームの紙を奪い取り、堂々と夕暮れに染まり始めた空に向けて掲げていた。

正直、見ているこつちが恥ずかしくて仕方がない。

周りには大勢の子供や家族連れの姿までいるところのこ、葵はそんなことなどお構いなしだ。

本当にこの性格は、見習わなくちゃいけないよつて見習つたら大変なことになりそう……。

その葵は、今ちょうど景品を受け取つて私のもとに戻つてきた。

「はい七星。やつたじやん」

葵は言いながら、私にその封筒を渡した。

「う、うん。ありがと……」

嬉しいことは確かなのに、どうして手放しで素直に喜べないんだもん。

その理由は、今いづいて田の前にいるんだけど……。

「葵つて、改めてすいこと思つた」

「へ？ 何よそれ」

と、本人はあっけらかんに言い放つ。

まさかとは思うが、気付いていないんだろ？

いや、いくらなんでもそれはない。

と、いうことはだ。

ようするに……自覚症状がないってことなのかな。

……それってある意味、気付いていないよりもタチが悪いんじゃないかな……。

考へ出したら頭が痛くなつてきた。

ともかくにもはつきりしたことば、私は葵みたいにはなれないなどいふことだった。

「ところで、賞品つて中身何だった？」

言われて、私は手の中の封筒に目を落とす。

「何だろ？ 薄いし、商品券とかじゃないかな？」

私は封筒の封を破る。

中から出でてきたのは、三千円分の図書券だった。

「図書券ねえ……つて、葵は小説とか読むし、案外ちょいどいいかもしぬれないね」

「うん。 そうかも」

私は素直に笑つて答えた。

ちょうど来月に、今読んでるシリーズものの新刊が発売される。そのときを使わせてもらひことにしよう。

私は図書券を封筒に戻し、ポケットの中にしまった。

そしてふと、葵がマジマジと私の顔を見ていることに気付いた。

「な、何？ どうかしたの、葵？」

「……んー、私の考えすぎだつたかなあ……」

などと言つて、勝手に自己完結してしまつ。

「え、え？ な、何？ 気になるなあ……」

「いや、そのね。別に大したことじゃなかつたんだけど……」

葵はそこで一度口にさる。

大したことではないという割には、どこかバツの悪そうな感じだった。

「……この前も、祭りの準備をみんなでしてた日。あの入り江から出てきてから、七星の様子がちょっとおかしかったからさ」

「あ……」

言われて私は思った。

そつか、葵なりに、私を心配してくれてたんだ……。

必要以上にハイテンションだったのも、もしかしたら私が気落としてると思ってそうしてくれていたのかもしれない。

「何でもなかつたなら、それでいいの。ごめんね、変なこと言って……」

「ううん、そんなことないよ。私、葵にも心配かけてたんだね……」「そんな大げさなことじやないけどさ。ただ、なんとなく雰囲気が、ね。来栖君と、何かあつたのかなって」

「……私って、そんなに顔に出るのかな」

「どうなんだろ。私もよく分かんない。でも、あのときは何て言つ

か……雰囲気がちょっと違つてたから、かな……」

「アハハ……ホント、葵には敵わないな……」

「……七星、やっぱり何かあつたの？」

葵が私の顔を覗きこんでくる。

本当に心配してくれてるんだ。

「……少し、歩こう。ここは、人が多いよ」

人ごみを避けて、私と葵は境内の裏手にやつてきた。

そうしなくちゃいけない理由はなかつたけど、できるならあまり他人には聞かれたくなかった。

「何から、話せばいいのかな……」

私は一人呟いて、わずかに空を見上げた。

明るさと暗さの境界線。

中途半端に染まりかけた色の空が広がつていて。

それはまるで、私の心中の内身をそのまま映す鏡のようだった。
混ざることもできず、かといって片方の色に染まることもできな
い半端物。

……イヤだな。

ホント、イヤになるくらいにそつくりだよ。
そんな中途半端な空の上、いくつかの星が光ってた。
それらはきっと、星にはなれなかつた星屑達。
でもいつか、星になれると信じて輝いている。
祈りも望みも届かない、広すぎる宇宙の海の中。
彼らは一体、何を想つて光を放つていいのだろう。

「……七星？」

葵の呼びかけに、私は視線を地上に戻す。

「ごめん。ちょっとと考え事してた」

「……ううん、それはいいけど……」

辛いなら、無理しなくてもいいよ、と。

そのあとに続く言葉は簡単に想像することができた。

「大丈夫。平気だよ」

「……」

葵はまだ何か言いたそうだったけど、私は強がりでそれを止めさせた。

「……少し、長くなるかもしない。それでもいい？」

答えずに、葵は静かに頷いてくれた。

柱に背中を預け、私は小さく深呼吸をする。
昔話を始めるよ。

「私に親がいないのは、葵も知ってるよね？」

「……うん。前に聞いたよ。確か、お母さんは体が弱くて、七星が
生まれてすぐに死んじゃって、お父さんは事故で……」

葵の言葉に私は頷く。

「その事故についてなんだけどね、表向きは火事つてことになつて

るんだけど、本当は違うんだ……」

葵は少なからず驚いてたみたいだけど、あえて無言で先を促してくれた。

私は続ける。

「家事なんかじゃないの、本当は。住んでた家が燃えたのは本当。だけど、お父さんは火事が原因で死んじゃったわけじゃないの」

……その先を、言つていいのだろうか。

今ならまだ、タチの悪い冗談だと笑つて「まかすことだつてできるんだよ？」

そうまでして苦しみを掘り返す必要が、どこにあるの？

誰でもない、苦しむのは私自身なのに。

どうして自ら、苦しみの中に身を委ねなくちゃいけないの？

あんなに苦しんだじゃない。

あんなに泣いたじゃない。

今更それを、どうして繰り返す必要があるの？

……そうだね。

ホント、その通りだよ。

でもね。

口にするからこそ、一時でも苦しみから解放されることがってあるんだよ。

その相手が、心の底から親友と言える人なら、それこそ、ね……。

「……お父さんはね、殺されたの」

「…………」

葵は声を上げはしなかった。

けど、表情の変化でどれだけ動搖しているのかは火を見るより明らかだった。

誰に、と。

その目が聞いてくる。

「……お父さんを」

言いかけて、一瞬言葉が詰まる。

だけどもう、後戻りなんてできない。

「お父さんを、殺したのは……」

永遠のような一秒。

まるで、はるか頭上で輝く星達の一生のようだった。

「私のお父さんを殺したのは……隼人」

葵の体がわずかに震えてた。

私はただ、沈黙を保つことしかできなかつた。

私のお母さんは、私を生んでもすぐに病氣でこの世を去つてしまつたらしい。

らしいといつのは、このことはあくまでお父さんから聞かされた記憶であり、私はお母さんの顔を写真ですら知らないからだ。

そうして私は幼少時代をお父さんと一緒に暮らしていくことになつた。

けれど、いつの頃からだつたろうか。

お父さんは変わつてしまつた。

私に、暴力を振るうようになつていつたのだ。

最初はただの暴言程度のものだつた。

仕事がうまくいかなかつたのか、それとも私がもとから嫌われていたのかは分からない。

物心ついた頃、私の目の映るお父さんはもはや恐怖の対象でしかなくなつていた。

それでも表面上の家族を装つことができたのは、お父さんはかろうじて暴力を抑制していたからだ。

だから私は、小学校に入学する以前まではお父さんに暴力を振るわれたことはない。

しかし私が小学生になり、最初の夏がやつてきた頃。

とうとう、今の今までかろうじて繋いであつた糸がブツリと切れ

てしまつた。

お父さんは私を叩き、殴るよつになつた。

日日に飲むお酒の量も増えて、一種の幻覚か狂乱のよつたな状態になつてゐたのだと思つ。

昼夜を問わず、私は同じ家で怯えながら暮らさなくちゃいけないことになつた。

料理も洗濯も掃除も、この頃から覚えた。

いや、覚えざるをえなかつた。

お父さんはまるで悪魔に取り付かれたかのよつだつた。

仕事もやめて、一日の大半をお酒を飲むか寝て過ごすかしかしなくなつていた。

虫の居所が悪いと、決まって暴力に訴えた。

矛先はもちろん、私だ。

毎日が地獄のよつだつた。

それでも、私は祈つてた。

願わざにはいられなかつた。

いつかこの暗闇の日々に終わりが来て、また二人で仲良く笑い合える、そんなときが来ると。

顔も声も知らない、天国のお母さんに祈り続けてた。

そんな私が唯一自分でいられるのは、学校にいる時間だった。そこには仲のいい友達もいる。

優しい先生もいる。

学校にいるわざかな時間だけが、私が私でいられる時間だった。けど、学校の先生も私の家の惨状には何も気付いていない。

それは、私が何も言い出さなかつたからだ。

家庭訪問のときでさえ、お父さんは仕事で忙しくてどうしても都合がつかないとごまかした。

学校側にも私がお母さんを早くに亡くしていることは伝わつていたので、その言い訳は実に効果的だった。

それでも私は、やはり苦しかったんだと思う。
何しろ逃げ場なんてどこにもなかつたのだから。

そんな私の家の異変にいち早く気付いたのが、隼人と明美さんだ
つた。

隼人は昔からの幼馴染で、家も近所だつた。
もちろん、通う学校だつて一緒だつた。
家が近いから、登下校で一緒になることだつて珍しくなかつた。
今思えば、隼人は幼い頃から妙なところで勘がよかつた。
だから、当時の私の異変にもいち早く気付いたのかも知れない。

ある秋の日のことだつた。

学校の帰り道、私と隼人はたまたま帰り道の途中で一緒になつた。

「あ

互いに一言そう呟いて、しばらく沈黙する。

学校では同じクラスなのに、ここ最近はめつきり会話することも少なくなつていた。

誰がそうしたわけでもない。

私が勝手に隼人から離れていただけのことだつた。

家が近所の隼人には、今の私の家の様子を特に知られたくなかつ
た。

「……お前さ

と、おもむろに隼人は口を開いた。

「何か、元気ないんじゃないのか？」

図星だつた。

そんなもの、あるわけがなかつた。

「……ううん、そんなことないよ

強がりだつた。

知られたくないと言つ気持ちが、折れそうな心を無理矢理に奮い立させていた。

「ホントか？ ウソだろ」

「ウソじゃないよ。ホントに、何でもないから……」

「……そつか。なら、いいや」

そう言つと、隼人は歩き出した。

私は後味が悪いまま、それでも変える方向が同じなので隼人の後に続いた。

無言の時間が流れ。

聞こえるのは、二人分の小さな足音だけ。夕暮れが迫る道に、同じ背丈の影が一つ。つかず離れず、わずかに揺れて歩いてた。

やがて、分かれ道が来る。

私の家は、隼人の家よりももう少し先にある。
「じゃ、また明日な」

隼人は玄関前で振り返り、私にそう告げた。

「うん。またね……」

返事も簡単に、私は家に急いだ。

帰りが遅いと、またお父さんに殴られてしまう。

「なあ、七星」

そんな私の背中を、隼人は呼び止めた。

答えずに、私は振り返る。

「今度、ウチに遊びにこいよ。俺の母さんも喜ぶからだ」

「……」

私は呆然と立ち尽くしていた。

突然のことに、返す言葉が見つからなかつた。

「おい、聞いてんのか、七星」

「……え、あ、うん。今度、遊びに来るね」

それだけ言つと、なぜか隼人はとても嬉しそうに笑つてくれた。

「おう。待ってるからな。またな

「そう言って、家の中へと帰っていく。

嬉しい反面、どこか悲しかった。

そんな風に自由になれる日々は、いつになつたらやつてくれるのだ
ううか。

流れ そうな涙をどうにか堪えて、私は家に向かった。

幸いお父さんは寝ていて、そのときは暴力を受けずに済んだ。
部屋に戻り、鍵をかける。

こうでもしないと夜は怖くて眠ることもできない。
だけど今日は、よく眠れそうな気がした。

待ってるからな。

そう言ってくれた人がいた。

それだけで、今日一日がいい日に思えた。

だけど。

きっとそれは、感じてはならない幸せの欠片だつたんだろう。

そんな些細な幸せすらも残さず奪い去るよつて、その夜、事件は
起きた。

炎の中にいた。

床も壁も天井も、どこもかしこも真っ赤に染まっている。

熱い、熱い、熱い。

床の上に横たわる私の体に、炎の熱が迫る。

痛い、痛い、痛い。

体のあちこちを殴られる。

やめてとどれだけ叫んでも、一方的な暴力は止まる」とを知らない。

背中を殴られ、腕を殴られ、腹を殴られる。

その衝撃に、肺の中の空気の塊を根こそぎ吐き出してしまう。

「ゲホッ、ゲホッ！」

苦しい。

息ができない。

ただでさえ酸素不足だというのに、それを後押ししてしまう。

そんなことは気にも留めず、暴力は続く。

実に一方的。

無抵抗な生き物を轟り殺すのと同じ。

弱者に対する強者の力の提示。

弱いものいじめの究極形。

「やめ、て……お父さん、おね……がい……」

少ない酸素を吐き出して私は叫んだ。

しかしそれは叫びと並みにはあまりにも儚く、もはや囁きにしかならなかつた。

そんな声は、轟々と猛る炎の中では誰の耳にも届きはしない。

「お父、さん……やめて……痛い、痛い、よ……」

言葉を口にするたびに、焼けた空気がのどの中まで回っていく。
る。

声帯が麻痺してしまったようになり、もう小鳥のさえずる声などの声も出ない。

イヤだ……こんなのは、イヤだよ……。

痛いのはイヤだ。

苦しいのはイヤだ。

辛いのはイヤだ。

助けて。

誰か、助けて……。

誰でもいい。

もしもこの世界に神様がいるんだったら、お願ひだから助けてほしい。

もうこの際、神様なんて贅沢は言わない。

今だけ。

この一瞬だけでいいから……。

正義のヒーローにやってきてほしかった。

意識が遠のいていく。

結局最後まで、この田に映っていたものは赤い炎の色だけだった。痛みなんてもう慣れてしまつて、苦痛にしか感じない。体中から力が抜けていく。

このまま眠つてしまえば、少しは楽になれるのかな?

……そうだ、きっとそうだよ。

きっと、次に目覚めたら。

今までのことば、全部悪い夢のせいにできるんだ。

だから、眠るつ。

もう、疲れたよ……。

まぶたが落ちる。

その刹那、誰かの声が聞こえた。

待つてゐるからな。

それは、彼との約束。

……ごめんね、隼人。

約束、守れ……なか……。

意識が落ちる。

かろうじて繋ぎとめておいた回線が、ブツリと音を立てて途絶える。

瞬間、世界の一部が崩壊した。

バタン、と。

大きく音を立てて、扉が開かれた。

振り下ろされていた腕が止まる。

私もその大きな音に、意識を取り戻した。

目を開ける。

炎に揺れる視界の先、誰かが立つていていた。

ひどく虚ろで、ひどく小さいその姿は、しかし確かに怒りを剥き出しにしていた。

「…………はや、と…………」

その名を呼ぶ。

途端に、涙がとめどなく溢れた。

来て、くれた……。

それだけのことが、私には何よりも価値のあることだった。

「何だよ、これ……」

声が聞こえる。

ああ、本当に、間違いじゃないんだ。

これは、夢なんかじゃないんだ。

「何やつてんだよ、叔父さん！」

小さなヒーローは吼える。

その言葉を、覚えている。

私はそのとき、どうしてか小さく笑ってしまった。

不思議だよ。

もう、何も怖くない、って。
そう、思えたから……。

ヒーローはやつてきてくれた。
ただ、それだけで嬉しかつた。
でもそれは、間違いだつた。
私はヒーローを望んではいけなかつた。
小さな体が突き飛ばされる。

全身を壁に叩きつけられ、隼人は目に見えて弱々しくなつていく。
考えてみれば当たり前のことだつた。
子供と大人じや体格はもちろん、力だつて全然違う。
勝負になんてなるわけがなかつた。

「く、そ……」

それでも隼人は立ち上がる。

絶対に敵わないと分かつてゐるはずなのに、何度も立ち上がる。
そのたびに、容赦のない暴力が隼人の体をボロボロに引き裂いて
いつた。

ガンツ！

幾度目かの衝撃。

背中から壁に叩きつけられ、隼人は力なく床の上にへたり込む。
小さな体は、その全身が見ていられないほどにボロボロだつた。
どうにかまだ五体満足ではあるけど、もう体は言つことを聞かな
くなつてゐるはず。

「……もう、いい、よ……隼人、立たない……で……」

このままだと、隼人まで死んでしまう。

私なんかを助けにきたばっかりに、とばっちらりを受けて死んでし
まう。

それだけは、絶対にダメだ。

私の体はまだ動く。

だつたら、止めないと。

「……やめ、て。お父、さん……やめて……」

両手で足にしがみつく。

それに気付いてか、再び暴力の矛先は私に変わる。

振り払われた足が、私の腹を抉つた。

「……っ！」

呼吸が停止しそうになる。

必死に咳き込みながら、酸素を求める。

直後に、また大きな物音がした。

見ると、隼人が床に転がっていた。

また壁に叩きつけられたのだ。

「はや、と……もう、いいから。逃げ、て……」

隼人の体はまだ動いている。

呼吸で胸が上下する程度のものだが、確かに生きている。

しかしそれももう虫の息だ。

生きていると言つことは、死んでないと言つことと同じではない。

今の隼人は、からうじて死んでいない状態だ。

だからもう、これ以上立ち向かおうものならば、確実に死んでしまう。

それだけは絶対に止めなくちゃいけない。

「立たない、で……もう、いい、から……立たないで、隼人……」

祈るような囁き。

隼人はこうしてしてくれた。

それだけで、私は十分すぎるほどに嬉しかった。

だからもう、立ち上がらないで。

隼人まで苦しい思いをする必要なんて、どこにもないんだから。

心の中でそう告げて、私は全身に力を込めた。

ズキズキと痛みが走り、まるで自由が利かない。

本当に、壊れたオモチャにでもなってしまった気分。

それでもいい。

オモチャヤだつたら、痛みも苦しみも何もないんだから。

「お、父さん……私は、こっち、だよ……」

少しだけでも、私が時間を稼ぐから。

隼人、その間に逃げて。

来てくれて、本当に嬉しかつた。

神様は、いたんだね。

隼人は、本当に……。

「私の中の、たつた一人のヒーローだよ……」

頭上から拳が振り下ろされる。

そこにためらいと言つものは何一つない。

完全に我を失つて、血の繋がつた娘をその手で亡き者にせんとする暴力の塊。

まるで映画のワンシーンのよう。

クライマックスをスローモーションで見せるような、怖いくらいにゆっくりとした動き。

……ありがとう、隼人。

目を閉じる。

……バイバイ、隼人……。

視界が暗転する。

その、直後。

「うあああああつ！」

叫ぶ声。

私は慌てて目を開ける。

炎に包まれた視界の先、私の目に映つたもの。

それは。

ナイフを握つてお父さんに倒れこむ、隼人の姿だった。

けれど、間に合わない。

このままじや隼人のナイフよりも早く、お父さんの拳が隼人を殴りつける。

そうなれば、きっと隼人はもう助からない。

お父さんを止めなくちゃいけない。

でもそりしたら、お父さんはナイフに刺されてしまつ。

私は……どうすれば……。

悩んでいる時間はない。

そうこいつしている間に、お父さんの拳は完全に隼人を標的に変えていた。

このままでは、隼人は確実に殴り飛ばされる。

そして、そして……。

死んでしまう……。

「……ダメ ッ！」

気がつくと私は、お父さんの腕にしがみついていた。

お父さんが私に振り返つた、その一瞬に。

隼人は、そのナイフをお父さんの体に突き刺した。

そのまま、私達三人の体がバラバラに床の上に転がつた。

そこで私の意識は完全に途絶え、次に目を覚ますのは病院のベッドの上でのことになる。

「…………」

一通りの話を終え、私はもう一度空を見上げていた。

思ったよりも時間が経つていたのか、空の色はうっすらと紺色に染まり始めたところだった。

「……そつか。そんなことがあつたんだ……」

隣に座る葵は、暗い表情でそつ呟いた。

「……うん」

暗くなるのも無理はない。

私が話した内容はそういうものだつたから。
少しだけ涼しくなつた夕方の風が、私と葵の間を通り抜けた。
心地よい風に、私はわざかに目を閉じた。

「……でも、私は後悔はしなかったよ」

「……え？」

「「」こと、お父さんもお母さんも悲しむかもしれないけど……」

視線を戻し、葵を真っ直ぐに見据えて言った。

「私は、本当に隼人に感謝してるから……」

「……うん。部外者の私が言うのも何だけど、さうとそれは間違つてないと思う」

「ありがと、葵……」

「な、何よ改まって」

「話、ちゃんと聞いてくれたから」

「……それはこっちのセリフだよ。ありがとね、七星。話してくれて。ちょっとだけ、七星のことが分かったよつな気がする」

言つて、葵は微笑んでくれた。

だから私も、笑い返してみた。

「でもや」

「ん？」

「どうして急に、そんな大事なことを話してくれたの？」

「……正直、自分でもよく分かんないんだよね」

でも、理由らしい理由があるとすれば、それは一つだけ。

「思い出した、からかな。きっと……」

「思い出したつて……その、火事のときのこと？」

「うん」

思い出したとは言つても、記憶がなくなつていてそれを思い出したわけじゃない。

いつの間にか記憶の中からも薄れていったあの日の出来事を、思い出してしまつたのだ。

「この前、みんなで入り江に行つたでしょ？ あのとき、思い出したんだ……」

あのとや。

隼人は落盤から私を助けてくれた。

それこそ、自分の身を犠牲にしてまで。

そのときに、あの日の記憶がふいに甦った。

絶対に敵わないと分かってる相手に、しかし何度も何度も立ち上がりつた隼人の姿。

デジヤヴュ、って言うんだっけ？

あの日の隼人と、そのときの隼人が重なって見えたんだ。

「そつか……それで、ついつい思い出しちゃったってわけね」

答へず、私は頷いた。

「そのときには、私思つたの。ああ、また私は隼人に助けられてる。助けられてばっかりだな、って……」

「……人間なんて、みんなそうだと思うよ。気付かないところで誰かに助けられて、気付かないうちに誰かを助けてる」

葵は詠うように言う。

「大切なのは、その気持ちを忘れないでいることなんじゃないかな？ 少なくとも、私はそう思つてる」

「……そうだね。きっと、葵の言つてることは正しいと思う」

「その点で言えば、七星は大丈夫だよ。ちゃんとそのことを覚えてる。中には辛い記憶もあるだろうけど、ね」

「……うん。だけど、ね……」

私の言葉に、葵が疑問の表情を浮かべる。

「それでもやっぱり、私は隼人を苦しめているんじゃないかなって思うんだ……」

「な……どうしてよ？」

「……私のせいで、隼人は人殺しになっちゃったから。それは、私が弱かつたせいだもの……」

「待つて、七星。それは違うよ。誰だって、人間なら弱さを持つるものなの。強い人間なんて、それこそいないようなものだよ？」

「違うの。そうじゃないの……」

自分でも驚くくらいに消え入りそうな声。

「……私がもつと強ければ……せめて、もつと早くに誰かに助けてつて叫ぶことができれば、きっと、あんなことにはならなかつた……」

「……七星」

「結局私が弱かつたから、隼人は私を助けるために人殺しになるしかなかつた。私が、隼人を人殺しにしちやつたの……」

「……隼人はきっと、そのことでずっと苦しんできた。ううん、今も苦しんでる。いつそのこと、あの日私なんか死んじゃえば……」

「七星つ！」

葵が怒鳴り声を上げた。

私はビクンと肩を震わせ、葵に向き直る。

「……それ以上言つなら、私はアンタを引っ叩かなくちゃいけない」

「……」

葵は本気で怒っていた。

膝の上で握られた手は、小刻みに震えていた。

「……ごめん。でも、私は……」

「七星、アンタ本気でそう思つてる?」

「……」

「本当に、そう思つてるの? 来栖君がどんな想いで、たつた一人でアンタを助けに行つたと思つてるの?」

「……それ、は……」

「来栖君にはね、選択肢があつたの。警察が来るまで待つとか、大人に相談するとか。無難に乗り切ることなんて簡単だつたの」

「……」

「それでも彼は、それをしなかつた。単身で火事の中に飛び込んで、アンタを助けた。そうでしょう?」

「……」

「命をかけてまで、助けたいと思つてくれた人がいるの。やうして助かつた命があるから、アンタは今、こうしてここにいる」

葵は一度目を閉じ、ゆっくりと開ける。

「それなのに死んじゃえばよかつたなんて、そんなの間違つてるよ。それは、七星だつて分かつてははずだよね？」

最後は諭すように、どこか優しく。

「……うん。分かつてる、けど……」

やはり私は、簡単に首を縦に振ることができない。その様子を見て、葵は言った。

「だつたらもう、手つ取り早く確認したほうがいいよ」

「確認つて、もしかして……」

直接隼人に聞く、ということだらう。

「それは……」

できることならそんなことはしたくない。

あの日のことを無理矢理掘り返されることは、隼人だつてイヤなはずだ。

「このままズルズル引きずつても、何も解決しない。ときには踏み出すことも必要だよ」

「……」

葵の言つていることはもつともだつた。

だけど私は、まだ心のどこかで怖がつてゐる。

あの日と同じ、弱い自分のままだつた。

このままずつと、弱いままの自分でいるの？

そうやつて逃げ続けて、何もかもを偽つて生きていくの？

それがどれだけ自分を苦しめる道か、本当に分かつてゐるの？

「……私は

と、そのときだつた。

ふいにポケットの中の携帯がメロディを奏でる。

無言で促す葵を横目に、私はデジタルの画面を覗く。

そこに。

着信 来栖隼人。

「……七星、がんばって。来栖君だつてきっと、同じ苦しさを背負つて
いるはずだよ」

私は葵の言葉に小さく頷いた。
そしてわずかに震える指先で、通話ボタンを押した。

俺は長い石段を上り終える。

祭りに賑やかさがそこにも続いていて、多くの人々が大して広くもない境内の中、ひしめき合つようになつて集まつていた。人ごみの中を搔き分けて、俺はその場所に向かう。

神社の裏。

七星はそこにいる、電話の向こうでそう言つていた。
境内を抜け、神社の裏手に続く雑木林を目指す。
と、その途中で意外な人物に出会つた。

「……瀬口？」

雑木林の近くで一人佇んでいるその姿は、間違いなく瀬口だつた。瀬口も俺に気付いたのか、ハッと顔を上げてこっちに歩み寄つてくる。

「や。来栖君」

軽く片手を上げて瀬口は言つ。

「瀬口、何やつてんだよこんなとこで？」

「いや、特に何つてわけじゃないんだけど……」

瀬口の言葉はどこか歯切れが悪い。

俺、何か悪いことを聞いてしまつたのだろうか？

「それより、来栖君こりそこんなとこで立ち止まつてていいの？」

「え？」

「七星、そつちで待つてるよ。早く行つてあげないと」

「あ、ああ。でも、何でお前がそんなこと……」

「詮索はあとあと。ほら、女の子を待たせるんじゃないってば」「ま、ま、ま、瀬口は、ドンドン俺の背中を押した。

「お、おこ。何なんだよ、一体……」

そう言いつつも、俺は促されて歩を進める。

一
來
栖
君
」

と思つたら、また呼び止められる。

「ハ、ア、何、二、」

卷之三

「七星の印と、ちゃんと支えてあけないとダメだよ。あの子の救えるのは、きっと来栖君だけだと思うから……」

「……何だよ、それ。瀬口、お前何言つて……」

「私が言えるのはそれだけ。じゃね、かんぱりて」

つていった。

12

「河でお前が、死んだ」と、

だけどそれは、結果として俺の背中を押したことになるのかもしない。

……二で、実際に脅かされたよな、俺。

二、好處一：一氣呵成

会って話そう。

伝承へ受け継がれてゐる

そのため必要なものは、最初から全部」の手の中にあつたんだから。

「あ……」

最初に声をあげたのは七星だった。

「悪い! 遅くなつた!」

「ううん。私も今来たところだから」

バレバレのウソだつた。

なぜなら、俺はすぐそこで瀬口と会っていたのだから。
まあ、今はそのウソなんてどうでもいいことだ。

「隣、いいか？」

「あ、うん……」

俺は七星の隣に腰を下ろす。

とはいって、そこはコンクリートの地面の上。
ズボンの下から、わずかにひんやりとした感覚が伝わってくる。
俺はそのまま、一度頭上の空を見上げた。
徐々に夜の色の変わりつつある空模様。

とこりとこりと、儚いほど光を放つ小さな星が顔を出していった。
「急に呼び出したじめんな。家に帰つてから話そうとも思つたんだ
けどや」

「ううん、いいよ別に。それで、話つて、何？」

「ん……」

こやか話し出すとなると、俺は何から話せばいいのか分からなくな
ってしまった。

肝心要の伝えたい言葉は、それこそたつた一言だけ。
だけどそれだけじゃ、きっと無意味なんだ。

言葉を探す。

うまく言ひに繕うことなんて、最初からこれつまみつけられていな
いんだ。

拙い言葉でもいい。

伝えたいことを伝えればいいんだ。

「……なんだかんだでさ、俺達が家族になつてからもう十年だよな
独り言のよう、正面を見据えて言つ。

「……うん。そうだね。もう、十年になるんだ……」

相槌を打つよつこ、それでも七星はしつかりと答えてくれた。

「長いようで、あつという間だったよな。ありきたりな言葉だけど

る」

「うん。ホント、早すぎるよね。家族になつたの、ついこの前のようと思えるもの」

それぞれにこの十年を思い返す。

それは本当にあつと/or/いう間で、だけど/い/つして振り返れば、やはりいくら思い出を口にしてもキリがなくて。

光陰矢の/ご/と/しつて言つ/言葉もまんざらじやないと、/そ/う思えた。

「色々あつたよな。今思つと、/しょ/つちゅう喧嘩ばつかしてたよな」

「それは、隼人がい/つも先に口を出すからでしょ」

「何言つてんだ。その後真つ先に手を出すのはお前じやんか」

「いくら言つても、隼人が分からずやだからだよ」

「そんで結局、母さんに怒られるのは俺の役目だつたよな。女の子に手を上げるんじやないつて」

「自業自得でしょ」

「そつちは女一人、こつちは男一人。口で勝てるわけないつーの」

アハハと、俺達は互いに笑いあつた。

そういうえば、どれだけ喧嘩したときでも最後には必ず/い/つやつて笑い合つてたよな……。

まあ、大体最初に謝るのも俺の役目だつたんだけどさ。

それからずつと時間が流れて、俺達も少しずつだけど大人への階段を上つていつて。

そういう目には見えない積み重ねがあるから、今こうして並んでいるんだよな。

「色んなことがありすぎて、全部は思い出せないかもな」

「だけど、きっとどこかで覚えてると思う。隼人が忘れたことでも私が覚えてて、私が忘れたことでも隼人は覚えてるのかもしけない」「そうだな。確かに、そうかもしけない」

「……人間つてさ」

言いながら、七星はその場で立ち上がった。

「生まれてから死ぬまでの一生が、星によく似てるんだって」

「星つて、あの星か？」

俺は空の星を指差す。

「そう。知ってる？ 星に終わりなんてないんだよ」

「終わりがないんじや、人間とは違うんじやないのか？ 人間は、その……やっぱ、死んだらそこで色んなものが終わっちゃうだろ」「形はね。だけど、その人の記憶や声、思い出、生まれた場所、過ごした時間は、絶対になくならない。だって……」

一步踏み出し、振り返って七星は言つた。

「その人のことを覚えてる人が、必ずどこかにいるから

「……そりやまた、ずいぶんとメルヘンな話だよな」

立ち上がり、俺は言つた。

「実は、小説の中の受け売りなんだけどね」

「ああ、そんなことだらうと思つたけどぞ」

そうしてまた、互いに小ちく笑い合つた。

「でもまあ……」

もう一度俺は空を見上げる。

いくつもの小さな星々。

いつか、無限に広がる宇宙の海で瞬いて生まれて。こうして今、地上を照らしている。

弱く儚い光。

それでも、誰かに届けと。

どこかに届けと。

生まれた意味を求めて、光を放つ。

それは本当に、人間と何ら変わりのないもので。

振り返り、俺は言つた。

「そういうメルヘンも、たまには悪くないかもな」「でしょ？」

そうしてお互に、空を見上げる。

ああ、悪くないな。
だつて、そつくりだ。

あの星のこの星も、全部自分みたいに思えてくるんだ。

……さあ。

昔語りは、もう十分だろう。
伝える言葉は、最初から決まっていたんだ。
何一つ難しいことなんてない。
何気ないその一言を、伝えよう。

……七星

「ん？」

「ありがとう」

「……え？」

「家族になつてくれて、ありがとう」

「隼人？」

「……ずっと、言い出せなかつた。だつて俺は、お前の大切なものを奪い取つてしまつたから……」

「俺、ずっと逃げてた。奪うだけ奪つて、背負うことから逃げてたんだ。自分が苦しんでるつて、勘違にしてた」

七星は何も言わない。

それが否定でもいい。

逃げるのもう、嫌なんだ。

「だけどそれは、七星も同じだつたんだよな。奪つた俺よりも、奪われた七星のほうがずっとずっと辛かつたに決まつてゐる」

「隼人……」

「許されたいつて、いつもどこかで思つてた。楽な道ばかり選ぼうとした。でもそれじゃダメなんだ。何も変わらない」

「……うん」

「だから、俺はもう逃げないから。全部、背負つて生きていくから。

七星の辛さも悲しさも、俺が半分背負つから、だから……」

「……つん、つん……」

「……これからも、一緒にいてほしい。いや、いてもいいか？」

「星の隣に、いてもいいかな？」

「……ズルイよ、隼人……」

「……え？」

「……私が言いたかったこと、全部先に言つちやうんだもん。これじゃ私、もう何も言えないよ……」

「あ……悪い」

「……いいよ。許してあげる。けど、私にもこれだけは言わせて」

「……何？」

七星は俯きかけた顔を上げて、真つ直ぐに俺の目を見た。そして……。

「……ありがとうございます。私を家族に迎えてくれて、ありがとうございます。それと

……」これからもよろしくね、隼人

目端に涙を一杯に溜めて、それでも笑顔でそう言つた。

「……ああ。よろしくな、七星」

それが限界だつたのか。

七星の頬を、透明な零がゆつくりと伝つて地面に落ちた。

それと同時に、俺の胸に軽い衝撃。

地面を蹴つて、七星は俺に飛びついた。

俺は突然のことの一瞬バランスを崩すが、どうにか踏ん張つて耐える。

今度はそう簡単に、手を離すわけにはいかないよな。

そつと、七星の肩を抱く。

俺の腕の中で、七星はいくつもの涙を流していた。

その驚くほどに小さな体を、壊れないようだけできるだけ優しく支える。

……もう少し。

あと少しだけ、こうしていよう。

七星の涙が、枯れてしまつまで……。

「とりあえずは、これでハッピーエンド、かな」

私はそつと物陰から歩き出す。

覗き見してたことにほちよつと罪悪感はあるけど、やつぱり気になつて仕方なかつた。

できることなら、七星にも来栖君にも幸せになつてほしかつた。でもそれは、やつぱり無用の心配だつたのかもしれない。

「ま、めでたしめでたしつてことだよね」

「……何がめでたいんだ、何が」

「うわあつ！」

と、私はのけぞるように大声を出しあがまつ。

マズイ。

今の中でも七星達に気付かれてしまつたかもしれない。

「おい。人をパシらせといて何打その態度は……つて……

「うるさい、黙れ！」

私は健一の襟首をつかんでズカズカと歩き出す。

「待て、葵一、話せば分かるー、つてか、首ー、締まつてる締まつてるー！」

「いいから、黙つて歩くー！」

ズルズルと健一を引きずつて、私は空いたベンチにやつてくる。後ろを振り返るが、そこに七星と来栖君の姿はない。

どうにか気付かれずにはすんだようだつた。

「ふう……危ない危ない

「それは、俺の余命のことじゃないのか……」

健一は貪るように酸素を取り入れていた。

「アンタは殺したつて死ぬようなタマじやないでしょ、うが」

「偏見だ、差別だ。俺だつて生きてるんだぞ」

「ああ、ハイハイ、そうですね」

健一の言葉に適当に相槌を打ちながら、私はふと思つ。

よかつたね、七星。

もとからいつかは「ううう結果になるんじゃないかとは思つていたけど、そうなる過程がずいぶんと遠かつた。

いつまでたつてもつかず離れずの二人は、私から見ればひどくまじろつこしいものがあつたのかもしれない。

だけど今は、ちゃんと心の底から祝福できるよ。

喜びも苦しみも、悲しみも楽しみも共にできる存在。

正直、羨ましいな。

……それに引き換え、私つてば。

チラリと、振り返り健一の顔を見る。

幼馴染で腐れ縁。

悪いヤツじゃないのだけれど、何を考えてるか分からぬ上にどこかパツとしない。

この差は何だらうと、私は溜め息しか出でこない。

「何だよ、その意味ありげな溜め息は」

「……別に、何でもない。気にしたら負けよ」

「……微妙にムカツクな、それ」

そして、互いに溜め息を漏らす。

「で、健一。それ何?」

私は健一が手にぶら下げる袋を指差して言った。

「何つて、お前。それを俺に言わせるのか?」

「何それ? 意味がわかんないんだけど?」

「……神様、コイツ殴つていですか」

そんな囁き声が聞こえたな気がした。

「あのなあ。お前が俺に何か適当に買つてこいつて言つたんだが

が

「へ? 私、そんなこと言つたっけ?」

「へ? 私、そんなこと言つたっけ?」

「言つた！ 間違いなく言つたぞ。しかもお願ひじゃなく、命令だ」

「ああ、そういうええば。

私が来栖君と分かれてからすぐには、健一もあの付近にひやつてきたんだつけ。

それで、このまま健一を突つ込ませたらなるものもならなくなるつて私の直感が知らせて……。

「……ああ、うん。言つたような気がしてきた」

「……神様、コイツ蹴飛ばしていいですか」

だから、独り言ならもつと聞こえないように言えぱいいのに……。

「……まあいいや。何か疲れてくるから。もうどうでもいい

「む。その言い方はちょっと聞き捨てならない」……つて

「ほれ。冷めないうちにとつとと食え」

そう言つて健一が私に差し出したのは、屋台のたこ焼きだつた。

「お前、たこ焼き好きだろ？ 每年のように食つてたもんな。感謝しそうよ？」屋台の人に無理言つて、出来立てもらつてきたんだから

そう言つて受け取つたたこ焼きは、確かにまだホカホカと暖かかつた。

「……」

「な、何だよ。急に黙り込んで。気持ち悪いな……」

そんな健一の文句も、今はまともに耳に入らない。

「そつか。

もしかしたら私も、近すぎて全然気がつかなかつただけなのかな

。

「おい、どうしたんだよ葵？ 腹でも痛いのか？」

いや、確かにたこ焼きは大好物だけさ。

それを私が毎年のようにお祭りで食べてたなんて、普通分かんな

いよね。

「だけど健一は……『コイツは知つてたんだ。

「……葵？ マジで気分でも悪いのか？」

「……え？ な、何？ 聞いてなかつた、ごめん」

「……お前なあ……」

健一「は呆れたように溜め息をつく。

「もういい。お前が食欲ないんなら、俺がまとめて消化してやる」

「え?」

「どうつ!」

と、私の手からたこ焼きの入った箱が奪われた。

「あ、こらー、何すんのよ健一!」

「うるせえ! よくよく考えたら、これ俺の腹じゃん。というわけで、これらは両方とも俺のものだ!」

言つなり、二つのたこ焼きを手にして逃げ去つていく。

「こひ、待て! 私のたこ焼き!」

そうして私は、目の前の背中を追いかけていく。
どうしてだろ?。

不思議と、笑える自分がそこにいたんだよね……。

西久保健一。

私の幼馴染で腐れ縁。

悪いヤツじゃないのだけれど、何を考えてるか分からぬ上にどうかパツとしない。

上記に、もう一つ追加。

案外、いいヤツ。

……かもしれない。

俺達四人は揃つて浜辺へと下りる階段に座つていた。

もう間もなく、自國は夜の八時を迎えるようとしている。

ちょうどその時間になると、祭りの前夜祭メインイベントである花火大会が始まる。

浜辺を中心とした海岸通にはすでに多くの人々が場所取りにやつてきており、俺達もその中の一部だった。

あれから俺と七星はもつしばらく昔話を続け、その後一人で祭りの中に戻つていった。

ちょうどそのとき、健一と瀬戸の一人とも合流し、四人で祭りを見て回ることになった。

合流直後の健一がやたらとズタボロだったのが気になつたが、まあどうせいつものことだろう。

「健一、あと何分？」

「んー、あと五分つてとこかな」

浜辺ではいくつかの人影があちこちを動き回つている。

おそらく、実行委員関係の人が花火の最終調整をしているのだろう。

う。

「花火か……」

と、隣の七星がふいに呟いた。

「花火がどうかしたのか？ 七星」

「ん、別にどうつてわけじゃないんだけど。ただ、こうやって花火を見ることなんて、年に一回のこのお祭りのときくらいかなあつて「確かに、そうかもね。今じゃ結構、こういう小規模なお祭りつてなくなつてるって言つし」

言われてみればそんな気がしてくる。

子供の頃は家の庭でも花火をしていたような記憶があるけど、最近じゃそういうことはめっきり少なくなつてた。

それが俺達の体や心の成長に伴つものなのか、そうでないのかは分からぬ。

だから今は、少しだけ心が弾んでいた。

もつと幼かつた頃、どんな些細なことに對しても興味や好奇心を当たり前のように抱いていたように。

「……まだ少し時間あるし、私ちょっと飲み物でも買つてくるよ」「え？ おい葵、時間つていつてももつちよつとしか……つて、イデデ、耳を引つ張るな耳を！」

「いいから、アンタも来る。七星と来栖君も何か飲む？」「ああ、それじゃ俺はコーヒーを頼む」

「私は紅茶がいいな」

「オッケー。ちょっと人とごみで時間取られるかもしれないけど、気長に待つててね」

「おい、時間食つてたら花火が終わつちまつ……イデデデ、だから引つ張んなつづーの！」

「ハイハイ、黙つてついてくる。んじや、ちょっとばかし行つてくれるね」

「分かつた。分かつたからまず耳を離せ。千切れるから、マジで」

「そういう残して、二人は人ごみの中に紛れていつた。

残された俺と七星は、一人の姿が見えなくなるまで小さく笑つていた。

「葵つてば、無理に氣を使わなくていいのに……」

「……だな。今のは正直、健二相手だからこそ通じたようなもんだろ」

言いながら、俺達は浜辺に向き直る。

夜風に乗り、潮の匂いが微かに運ばれてくる。

空はいよいよ夜の色一色に塗り潰され、顔を出す星々も一際多く

なっていた。

半分より少しだけ欠けた月が、揺れる波間にポツカリとその姿を映し出している。

やがて、何の前触れもなく打ち上げ音が響いた。

空を仰ぐ。

夜空の真ん中に、夏の花が咲いた。

続けざまに、いくつもの花火が打ち上がる。

咲いては散る、光の花。

それは人の一生に比べれば、あまりにも短すぎる儚い命。まさしく、真夏の夜の夢。

それでもその花咲く一瞬は、誰かの心に残るだろう。

誰かの目に映るだろう。

そしていつの日か、語られる思い出になるだろう。

ふいに、俺の手の上に七星の手が重なった。

横を見ると、花火のせいか、わずかに紅潮して見える七星の頬。それでも七星は、笑つてた。

だから俺も、笑い返してみる。

ギュッと、重ねた手を握り返す。

その手の中に、数え切れないほど過去と今、そして未来を握り締めて。

背負うものもある。

決して楽な道のりにはならないだろう。だけど。

守るものも、見つけたから。

もう、一人じゃない。

手を取り合つて歩いていけるよ。

いや、歩いていくよ。

どこまでも、どこまでも……。

「葵達、どこまで行つたんだろ……」

「だな。もうすぐ最後のやつになつちまうぞ……」

周囲の人だかりに目を向けるが、夜の暗さで一人の姿を見つけることはできない。

ふと俺は、そのときになつてようやく思い出した。

上着のポケットの中から、MDプレイヤーを取り出す。中にはもう、一枚のディスクがセットしてある。

「七星、これつけて」

イヤホンの片方を七星に手渡す。

七星は訝しげな表情を見せたが、俺は構わずに促す。

そうして俺と七星は、イヤホンを片方ずつ耳につける。

「隼人、これ……」

七星の言葉には答えずに、俺は小さく笑つてMDの再生ボタンを押す。

イヤホンをつけたのだから、音楽を聴くに決まつていい。ただし、その曲は……。

「七星、この曲知つてるか?」

音楽に耳を傾けながら、俺は聞いた。

「……うつむ。知らない曲。でも、いい曲だね

「だろ? 僕が一番好きな曲なんだ」

タイトルはフリー・ブルーム。

日本語で言えば自由の羽根。

数年前、恋愛ドラマの主題歌として歌われていた曲。

ぶつちやけ珍しいものでもないし、すごい売り上げを記録したわけでもない。

平凡と言えばそれまでの、どこかにはありそうな曲。

それでも、俺にとつての特別な曲。

そしてこの曲にはもう一つ、カップリングになつてゐる曲があつた。

演奏が終わる。

トラックが一曲目に移行し、演奏が再開される。
そこから流れる曲は……。

「……あ

七星が呟く。

それもそのはずだ。

だつて七星は、この曲を誰よりも知っているはずだから。
時間を忘れるくらいに視聴して、とても嬉しそうに笑みを浮かべ
る曲。

「七星や、あの中古の屋でいつもこの曲を聞いてたんだよな」

「隼人、知つてたの？」

「今日の昼間、その店に行つてた。そのときにマスターから、少し
話を聞いたんだ」

「……そつか、あのお店に行つてたんだ」

「俺が昼間、マスターに言われてこの曲を聴いたときは本当に驚い
た。

なぜなら、ヘッドフォンの向こうから流れてきた曲は俺の大好きな
なフリー・ブルームだつたのだから。

しかしそのまま曲を聴いていると、カップリングの曲にトラック
が移行したのだ。

そして流れ出した曲が、この曲だつた。

聴いたことのない曲。

でも、七星が時間を忘れるくらいに好きな曲。

俺はそのまま、静かに曲に耳を傾けた。

そして曲の終わる頃、どうして七星がこの曲を聴いていたのか、
その意味が分かつた。

俺から言わせれば、それはずいぶんと恥ずかしい理由だつたけど。
それでも七星にとつては、何よりも大切な意味があつたのだろう。

「お前がこの曲を好きな理由つて、これだつたんだろ？」

「……さすがにバレちゃつたか。つて、笑わないでよ！ 私だつて

結構恥ずかしいんだから！」

さらに顔を赤くして、七星は言った。
まあ、俺だつて結構恥ずかしいんだけどさ。
お互い様つてことで、いいだろ？

それは。

幼すぎた少女にとつての、唯一の真実。
自分を救つて、父親を奪つた少年の話。

悲しくないと言えば嘘になる。

だけど、少女の傍にはいつも少年がいた。
寂しくないと言えば嘘になる。

だけど、少女の傍にはいつも少年がいた。

だから少女は、幸せだと思つことができた。

たとえ世界が少年を許さなくとも、少女は少年を許すだろ？

そこに、理屈なんて何一つ必要ない。

あるのは、たつた一つの真実。

あの燃え盛る炎の中、自分の身を省みずに駆けつけてくれた
少年がいたこと。

嬉しくて涙が出た。

悔しくて涙が出た。

悲しくて涙が出た。

全てが終わつて、少女は父親を失い、自分を得た。

全てが終わつて、少年は自分を失い、少女を得た。

それでも少年は、少女を守つたことを後悔なんてしていない。

代償として、その両手が生涯血の色に染まつたままだとしても。
きつと、後悔することなんてないだろ？

だから。

少年がその想いを持つてくれている限り、少女の想いも変わらな

い。

どんなことがあっても、決してその想いは変わらない。
あの日、少女を助けにきてくれた少年は……。

少女にとっての、世界でたった一人のヒーローだったのだから。

演奏が終わる。

最後のフレーズがエコーのように遠ざかり、俺は停止ボタンを押した。

フリー・ブルーム。

その曲のカップリングとなつた曲の、タイトルは……。

君だけのヒーロー。

やたらと更新だけが早いペースで終わりました。

本作はこれで完結となります。

最後までお付き合いください、どうもありがとうございました。
もう少し書き足そつかなという部分も多々あったのですが、悩んだ
末にここでひとまずの終了とさせていただきました。

とはいって、続編などのこともまるで考えていませんので、やはりこれはここで一つの区切りを迎えるべきなんだろうなと思っています。
それでは最後になりますが、最後まで読んでくださった方は、ようしければ適当に感想の言葉でも添えて評価していただけると幸いで
す。

現在連載中の「千年の冬」ももうすぐ完結を迎える予定ですが、それが終わったら今度はファンタジーからSFのジャンルに挑戦してみようかと考えています。

機会があれば、ぜひご覧ください。

それでは、この辺で失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4990a/>

気がつけばいつもそこに君が

2010年10月8日15時44分発行